

元狂気が幻想郷へ行く
ようです

LCRCL (エルマル)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

出身とは別世界の幻想郷に引っ越した、火野有太。

彼は幻想郷に一体何をもたらすのか？

東方projectとMULAストーリーのクロスです。

MULAストーリーを読んでない人でも楽しめる内容となっております。

出してほしいキャラいたら教えて下さい。

一応プロフィール

火野有太

年齢 78（年齢はほぼ関係ないと思え）

種族 ニンゲン（現人神）

属性 火（桜）

能力は本編で判明

目次

宵闇と巫女 | 1

弾幕ごっこ？ ああソレ知ってる！

6

家を建てるぞ〜 | 13

スキマBBA | 19

Welcome Hell | 25

中国とメイド長とロリ吸血鬼 | 31

剣と槍 | 37

元狂気 vs 狂気ではなく気がふれてる吸

血鬼 | 41

妖怪の山 | 46

戦闘と許早苗 | 51

興奮とケロケロ | 56

バ鳥と妹 | 60

EXルーミア!? | 65

煩惱退散：できるワケがない | 70

文字変換で漢字が出てこない大天狗

74

市場の神と獺 | 79

ルーミア が 家に加わった！ | 84

頭？ダイヤより硬いぞ？ | 88

初代博麗!? | 93

初代は強い | 98

蟲と魔導書 | 103

タマシイについて | 108

甘い①	165
有太は鈍感ではない	160
チートキャラの雑談	154
なるほど、分からなくもない	150
大きいとピーピー	145
人形遣いとバレる秘密	140
メリーさんではなくこいしさん	136
ツンデレと体操服鬼とサトリ	132
と橋姫	126
アメリカンな妖精と土蜘蛛と釣瓶落とし	120
剣士と手合わせ?	115
銀髪剣士と亡霊の姫	111
まったいら、おつきーな。	

クソ野郎	230
キャラに語彙力はあるのか?	226
割と頭を使っている戦い	221
容赦なし	215
殺妖人	208
違和感	203
バグったスケルトン	199
美味しくいただいた	194
やつと動き出す物語	190
知：つてる天井だ	185
だいぶ強すぎる初代さん③	181
だいぶ強すぎる初代さん②	176
だいぶ強すぎる初代さん①	170

殺意の透明人間

235

謎の2段構え

240

作戦成功と乱入

246

本気でいくぞ

255

終幕

264

炎天桜舞を教えてやろう…姉さんが

270

もこたんだお!

278

おつきーながヤキモチ?

286

おつきーなの訪問

290

嫉妬?

295

仲がいいんだか悪いんだか

300

一方、ケーティは

304

冴月麟

309

弾幕はパワー、なのか?

313

えいえんてー?

318

えーりんではなくぐーや

323

えーりん!えーりん!

327

暴走するアリス

331

空間系つてチートじみてるよね

335

賢者の恥態(?)

339

自覚

343

宵闇と巫女

side 火野有太

どうも、とあるヤツの元狂気の火野有太だ。

突然の事だが…

有太「俺は、別世界に住むことにした」

理由は単純。

ゆつくり暮らしたいからだ。

有太「そこで、俺は幻想郷を選んだ」

コレも単純な理由だ。

俺の元本体も幻想郷に住んでるからだ。

つまり、俺は別世界の幻想郷に住む事になる。

…1話から細かい話はするなって？（メタい！）

しようがないんだよ。

…さて、本編すたーと。

シユツ

俺は能力で幻想郷に入ってきた。

有太「ココは、森か…」

空を飛ぶのは…やめとくか。

ガサツ

…ん？

「わはー」

奥の方から金髪の幼女が出てきた。

有太「ニンゲン…じゃなくて妖怪か？」

「そーなのだー」

…ぐうう。

「おなかすいたのだー…」ドサツ

腹が減ってるようだな。

有太「お前、人食い妖怪か？」

「…そーなのだー」

有太「そうか…ちよつと待て」スツ

パーカーの袖を捲り…

…ズバツ!

有太「ツ…」

自分の左腕を斬り落とした。

「!？」

そして…

有太「…ハアツ！」

…ギョーン!

神力で治した。

有太「うし。ほらよ」スツ

斬り落とした腕を妖怪に渡す。

「だ、大丈夫なのかー?」

有太「大丈夫だ。ほら食え」

「あ、ありがとうなのだー!」

ムシャムシャ

うおう、やっぱ自分の腕が目の前で食われるのは怖いな。

―数分後―

有太「…終わったか？」

「ごちそうさまなのだー！」

有太「お粗末様。そんじゃあな「待つのだ！」…ん？」

「お礼に道案内するのだー！」

有太「おお、それはありがたいな。名前は？」

ルーミア「ルーミアなのだー！」

有太「じゃあルーミア、道案内頼む」

ルーミア「任せるのだー！」

スタスタ

森の中を進んでいった。

―数分後―

しばらくすると、神社が見えてきた。

有太「神社？」

ルーミア「博麗神社っていうのだー。れーむー！」

しーん

ルーミア「…あれ？」

有太「留守なのか？」

ルーミア「多分そーなのだー」

有太「そうか。まあお賽銭は入れとくか」

500円玉を出し、賽銭箱に入れた。

カランコロン：

有太「コレですよs」「おさいせえええええん！」うおっ!？」

突然神社から巫女が血走った目で走ってきた。

ルーミア「あ、れーむだ」

「アంత、いくら入れたの!？」

有太「500円」

「…ホントに感謝するわー!」ニッコツ

満面の笑みで言ってきたなコイツ。

有太「それで、お前誰？」

靈夢「私？私は博麗靈夢、12代目博麗の巫女よ」

有太「靈夢か。俺は火野有太だ、よろしく」

コレが、俺と靈夢の初対面だった。

ルーミア「そーなのかー」

…ん？心読まれた？

弾幕(づ)っ(づ)？ああソレ知ってる！

side 火野有太

霊夢 「はい、お茶」 コトン

有太 「あざっす」

ズズツ…

霊夢 「それで、アンタはどこから来たの？見慣れない服着てるけど」

(パーカーの事)

有太 「俺は外の世界から引っ越して来た」

霊夢 「引っ越し？」

有太 「ああ、もう68だし、ゆっくりしたいからな」

霊夢 「…ちよつと待って？」

有太 「？」

霊夢 「アンタ何歳って？」

有太 「68だ。ホントだぞ？」

霊夢 「つまり、ニンゲンじゃないの？」

有太「いいや、ニンゲンだ。とある理由で外見が老けないだけだ」

霊夢「へ、へえ」

ルーミア「そーなのかー」ボー

有太「…ん?」

縁側の方を見ると、空から誰かが飛んできていた。

「霊夢〜!遊びに来たぜ〜!」ビュウウン

スタツ

来たのは金髪の魔法使いだった。

霊夢「帰れ」

「酷いぜ…ん?お前誰だ?」

有太「ついさっき幻想入りした火野有太だ、よろしく」

魔理沙「有太か。私は霧雨魔理沙だぜ、よろしくな!」

有太「おう」

霊夢「…お茶は出さないわよ?」

魔理沙「じゃあ何で有太に出してるんだ?」

霊夢「お賽銭を入れたから」

魔理沙「だよな…」

え、コイツ金入れないとお茶出さないのか？

霊夢「お茶が欲しいならあつちにある素敵なお賽銭箱に金を入れて来なさい」

魔理沙「遠慮しておくぜ。∴ところで有太」

有太「何だ？」

魔理沙「弾幕ごっこって知ってるか？」

有太「ああ、知ってるぞ。実際にやったこともある」

魔理沙「なら話は早いぜ。弾幕ごっこで勝負だ！」

有太「∴ちよつと待ってくれ」スツ

元の世界の幻想郷で作ったスペルカードは∴あつたあつた。

有太「何枚だ？」

魔理沙「3枚で勝負だ。3回当たったら負けだ」

有太「オーケー」

霊夢「荒らされると困るから空中でやりなさいよ」

ルーミア「頑張るのだ」

俺と魔理沙は宙に浮く。

有太「コレぐらいか？」

(地上15メートルほど)

魔理沙「ああ、それでいいぜ。先攻は譲る」

有太「…ほう?」スツ

俺に先攻を渡したら、速攻でやられるぞ?

有太「じゃあ早速倒させてもらう。落符〈天空落とし〉
ギユウウン!

宇宙のようなエネルギーが降り注ぐ。

魔理沙「何だこりゃ!?!」ササツ

有太「おお…」

初見殺しを避けるとはな。

魔理沙「ふう、じゃあ次は私の番だぜ! 魔符〈スターダストレヴアリエン〉キラキラ
星屑か。なんか天空落としに似てるな。

有太「よっ、ほっ」サツ

カンタンだな。

有太「じゃあ次は…コレだな」

コレは当たるだろ。

有太「火符〈ヘルフレイム〉」

ゴオオオオ!

中くらいの火球を大量に飛ばす。

相当動きが速くないとコレは避けられないぞ。

魔理沙「ツ……うわっ！」ボツ

有太「当たったな」

魔理沙「クツ、やりやがったな……」

1—0か。

魔理沙「私の2枚目はコイツだ！恋符へノンディレクションナルレーザー」ピュン！

光線が飛んでくる。

有太「ほいほいほい」サササ

魔理沙「気持ち悪い避け方だな……」

有太「コレが一番効率的なんだよ。よし」

2枚目全避けつと。

魔理沙（すごい回避能力だな……どれぐらい戦闘経験があるんだコイツ？）

有太「俺の最後のスペルカードだ……」

アイツの技を出すか。

こりゃ驚くぞ？

有太「幻符（殺人ドール）」

時間停止!

←ブウウウン…

時を止めて霊力のナイフをばら撒く。

有太「再生」

→ブウウウン…

シユバツ!

魔理沙「…なっ!?(咲夜のスペルカードだと!?)」

おっ、驚いてるな。

つまりココにも咲夜がいるのか。

有太「ほらよ、避けないとな!」

魔理沙「くう…」サツ

避けきったか。

有太「いい変化球だとは思ったがな…」

魔理沙「危なかったぜ…何でお前が咲夜のスペルカードを?」

有太「ああ、別世界の咲夜から教えてもらったからだ」

魔理沙「はあ…?」

うん、分からないよな。

魔理沙「よく分からないぜ」

有太「だろうな」

魔理沙「まあいつか。：最後は私の十八番だぜ！」スチャツ

アレは…八卦炉？小さいからミニ八卦炉か？

有太「…来い！」

魔理沙「弾幕はパワーだぜ！恋符へマスタースパーク」

ドガアアン！

極 太 光 線 が飛んで来た。

有太「ま、パクリだからアイツほどではないか」サツ

…シヤツ

(服にかする音)

あ。

魔理沙「よし、当たったぜ！」

有太「つまり引き分けだな」

魔理沙「こんなに強いとは思わなかったぜ…」

有太「お前こそな（油断しなきゃ勝つたのにな…ちくせう）」

その後神社に戻ってしばらく雑談したとき。

家を建てるぞ～

side 火野有太

霊夢や魔理沙（お茶漬けを出された）、ルーミアと話している内に、外は夕方になっていた。

有太「じゃ、そろそろ家を建てるか」

魔理沙「…は？」

有太「見たいなら着いてきな」

スタスタ

ルーミア「ついてくのだー」タタツ

霊夢「気を付けなさいよ」

魔理沙（一体どうやって建てるんだ？）

神社付近の森に入っていく。

「グルアウ！」

…妖怪か。

魔理沙「退治してやるぜ」「いや待て」…？」

有太「タマシイ：青」キイン！

妖怪のタマシイを青にする。

「グルッ!？」

有太「あつち行け」スツ

手を右に出す。

「グルアアア…」ビューン！

妖怪はそれに伴って右に飛んで行った。

魔理沙「い、今のは？」

有太「秘密だ。行くぞ」

ルーミア「なのだー」

スタスタ

―数分後―

有太「んと、ココに玄関があつて…」

比較的平たい空間を見つけたので、敷地の計算をする。

魔理沙「肝心の家の素材はどこなんだ？」

有太「素材っていうか、家自体を今異空間に保存してるぞ」

魔理沙「そんな事できるのか!？」

例は、そうだな…

有太「…八雲紫ってこの世界にいるか？」

魔理沙「お、おう」

有太「カンタンに言えばスキマの空間にいれてるんだ」

魔理沙「あ、なるほど…」

ルーミア「??」

ルーミアは理解できなかったようだ。

有太「…よし、計算完了。ちよつとお前ら下がってろ」スツ

2人『?』

有太「まずは…とうっ！」バツ！

スパアン！

敷地の中にある木を伐採し、移動させる。

有太「そして…転送火桜！」BLOOM！

シュツ

魔理沙「ファ!？」

ルーミア「家が現れたのだー」

有太「…よっ、と」

ドスン…

有太「後は中の点検だな。ついてこい」

魔理沙「…凄いな」

有太「大した事じゃねえよ」

ガチャツ

中は現代の一般家庭みたいな様子だった。

しかし、水道やガス、電気の線の先には転送火桜を付けている。

有太「…問題ないな」

ドサツ

リビングのソファアに座ってそういった。

有太「お前らも座れよ」

ルーミア「やわらかいのだー」ドサツ

魔理沙「何故か電気を通ってるぜ…」ドサツ

有太「何故か知りたいか？」

魔理沙「ああ！」キラキラ

そんなキラキラした目で言わなくてもな…

有太「いいだろう。明日教えてやるよ」

魔理沙「よろしく頼むぜ！」

時間は…6時半か。

有太「つし、晩飯でも作るか」

魔理沙「お前、飯も作れるのか？」

有太「まあな。お前らも食うか？」

魔理沙「タダ飯頂くぜ！」

ルーミア「食べたいのだー」

有太「よし、じゃあ作ってくるから待ってろ」

時は魔理沙と有太の弾幕ごっこと同時期。

有太が時間停止を使った時。

←ブウウウン…

「…時が、止まった？」

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜は驚いていた。

咲夜「私の同じ能力を持つ人がいるのかしら？」

→ブウウウン…

咲夜「動き出した…」

嫌な予感がするわと彼女は言い、仕事を再開したとき。

スキマBBA

side 火野有太

ジユウウウ：

有太「つし、終わった」

得意料理を作らせてもらったぜ。

有太「飯だぞ。まあ、米じゃないが」

コトン

俺が作ったのは、ラザニアだ。

2人『おおく！』キラキラ

有太「ほら、冷めない内に食べる」

魔理沙「じゃあ、いただきますだぜ！」パクッ

ルーミア「いただきますーす」パクッ

もぐもぐ。

2人『んま〜い！』

有太「それはよかった。味わって食べるよ」

魔理沙「おう！」

―数分後―

2人『ごちそうさま』

有太「お粗末様。俺は食器洗いにいくから、適当に寛いでてくれ」
スタスタ

side 霧雨魔理沙

いや、有太のラザニアは美味しかったぜ！

魔理沙「…ところで、ルーミアはいつ有太に会ったんだ？」

ルーミア「森の中で会ったのだ。お腹すいてたけど、腕を食べさせてくれたのだー！」

魔理沙「う、腕!？」

でも有太は両腕ともあつたぞ!？」

ルーミア「左腕をちぎってから私に渡してきて、神力で回復したのだ」

魔理沙「マジか…アイツは神力を…つまり現人神なのか？」

「正解だ」

魔理沙「うおつ、もう終わったのか」

有太が食器洗いから戻ってきていた。

有太「量が少なかったからな」

魔理沙「それで、有太はホントに現人神なのか？」

有太「一応な。神名は『火桜神・裏』だ」

魔理沙「ひざくらしん？何だソレ？」

有太「その内分かるさ。：そういえば、お前は魔女だろ？」

魔理沙「ニンゲンの魔法使いだな。何故その質問を？」

有太「ちよつと待っててくれ」タタッ

アレは…あつた。

タタッ

有太「コレだ」

『火の書I』

魔理沙「魔導書か！」

有太「その通り。筆者は俺の姉だな」

(姉＝元本体)

魔理沙「…もらっていいか？」

有太「もちろん。その本の技全部できるしな」

魔理沙「ありがとうだぜ！」

その後もしばらく有太と話し、そして寝た。

side 火野有太

魔理沙「グー……」くかー

ルーミア「……………」スヤスヤ

有太「…俺も寝るか」

……………なんてな。

有太「よっ」ズバツ

空間を裂いて……

有太「出て来やがれ！」ガシッ

「ちよっ!?!」

とあるヤツを引っ張り出した。

ドサッ

「何てことするのよー！」

有太「人のプライベートを見てよく言うぜ……この世界の紫」

引つ張り出したのはスキマ妖怪で幻想郷の賢者、八雲紫だった。

紫「…貴方がいた世界の私から話はきいてるわ」

有太「おつ、マジか」

じやあ俺が来たホントの理由も分かるな。

紫「アレ…本当なの？」

有太「ああ。絶対、確実、100%起きる」

紫「そう…（私をスキマから引つ張り出すなんて…とんだヤツね…）」

俺現在進行形でお前の心を読んでる事に気付けよ。

有太「おい、スキマBBA「何ですって？」事実だろ？」

そこも元いた世界の紫と同じか。

事実を言われてキレると所は。

紫「ゆかりんは永遠の18歳なのよ！」

有太「へえ。それは精神の事だろ。実際の年齢はえつと…」

千五ひやk「言ったらぶつ殺すわよ？」

有太「やってみるよ…お前のプライベートぶちまけんぞ？（冗談）」

紫「…スキマセンでした許して下さい」土下座

ゑ…もしかしてとんでもない事してたヤツ？

有太「スキマBB A言ったのは謝る。…他に要件はあるか？」

紫「いや、もうないわ。私は帰…あ」

紫の動きが止まった。

有太「ん、どうして…？」

ちよつと待っ…

ガシッ

「有太？私に散々言っておいて逃げれると思ったのかしらん？ええ？」

有太「な、何でアンタがココにいるんだよ!？」

「私の領域内だからよん」

有太「（。D。）

やべ、俺死ぬかも…

Welcome Hell

side 火野有太

やべ、俺死ぬかも…

有太「な、何する気だ…へかさん…？」

今俺の目の前には、地獄の女神へカーティア・ラピスラズリがいる。

しかも怒ってる。

へカーティア「今土下座して例の物を返すなら、罰は軽くするわよん？」

クソツ…

有太「申し訳ございませんでした、返します」シユツ

紫「（。㇏。）」

俺が差し出したのは…

黒いパンツだった。

ー回想（元いた幻想郷）ー

姉「有太、準備は終わった？」

有太「…ん、後はコイツだな」スツ

黒いパンツを入れる。

姉「…ちよつと待って？それ私のじゃないわよね？」

有太「アンタに対して欲情すると思うか？」

姉「うん、ない」

だろ？

有太「コレはヘカさんのだ」

姉「……アンタ、死ぬわよ？」

有太「フラグ立てんなよ。じゃ、行つてk「あら、何故それを持つてるのかしらん？」

…回収早すぐねえか!？」

ヘカーティア「まずどうやって盗んだのかしらん？」

有太「盗んでねえよ！クラウンピースと正当な取引をしただけだ！」

ヘカーティア「(ピース…後でおやつ抜きね)…とりあえず返して」

有太「だが断る！じゃあな変なTシャツ野郎！」

シュツ…

ヘカーティア「…今なんつった？」ブチツ

(軽くキャラ崩壊しとる！)

姉「…ヘカさん、私は無干渉で行くわよ？」

ヘカーティア「ええ、アルミは何もしてないしいわよん。…ちよつとボコしてくる

わ♪」ドツ

シユツ：

アルミ「：アイツ、生きてるといいわね」

ー回想終了ー

こんな感じだ：

へカーティア「ふん：」パシツ

有太「クソう：折角クラウンピースと取引したのに：」

へカーティア「次やったら惑星落とすわよん、いい？」

有太「はい：」

へカーティア「じゃあね」シユツ

：ふう、やつと帰ったか。

死ぬかと思つたぜ：

紫「有太、貴方：」

有太「何だ、紫？」

紫「よくあんな人のパンツ盗めるわね？」

有太「偶々できただけだ。：エロ本読んで寝るか」スタスタ

紫（：それ、普通女性に向かっていう事じゃないわよ？）

「次の日」

有太「ふああああ…」

「おう、起きたか」

有太「ん…おはよう魔理沙」

魔理沙「おはようだぜ…」ニコッ

有太「…どうした？」

魔理沙「…コレ、何だ？」スツ

…あ。

有太「俺のエロ本。お前らの事忘れてベッドの横に置いてたわ」

魔理沙「…とりあえず燃やすぞ」スツ

魔理沙は八卦炉をエロ本に向ける。

有太「あ、ちよ…」

魔理沙「恋符へマスタースパーク」ドガアアン！

シユウウウ…

魔理沙「…なっ!？」

エロ本は無傷だった。

有太「結界で纏ってるから意味ないんだが…」

魔理沙「……………」

有太「…まあいいか。朝飯作るぞ」スタスタ

魔理沙「…有太」

有太「んあ？」

魔理沙「次は精々私が見ない所に隠してくれ」

有太「お、おう…」

何か、めちやくちや当たり前な事を言ったな…

中国とメイド長とロリ吸血鬼

side 火野有太

朝食を魔理沙、ルーミアと食べた後（好評だった）魔理沙は帰り、ルーミアは寺子屋へ行った。

…今思うと、元の世界のルーミアには会ったが、魔理沙には会ってないんだよな。

霊夢には会ってるが。

まだ会う機会がなかったのか？

有太「まあいいや。今日は…」

少し散歩に行くか。

ガチャッ

有太「よつと」フワッ

まずは…あっちだな。

俺は行先の方へ飛んでいくのだった。

「…近づいてくるわね」

「どうしたの、お姉様？」

「少し興味深い運命を見たの」

「へえ…」

…スタツ

有太「つと、着いた」

俺の目の前には、真っ赤な館があった。

つまり、俺は紅魔館に来た。

「……………」ぐー

門番は寝ている。

…起こすか。

有太「おーい、起きろ」ユサッ

「…わ、私は寝てませんよっ!？」

有太「いや寝てただろ」

「…あれ？来客ですか？」

有太「おう。最近ココに引越してきてな。俺は火野有太だ」

美鈴「私は紅美鈴です。：貴方から強い”気”を感じます」

有太「気?：ああ、だろうな。俺結構強いし」

美鈴「格闘はできますか?」

有太「少しはな。勝負したいのか?」

美鈴「はい、是非!」キラキラ

うおっ、目が光つとる。

有太「分かった。時間ができたらな」

美鈴「はい!」

←ブウウウン…

有太「ん?」

誰かが時を止めたな…誰だ?

「…何故動けるのかしら?」

有太「ん?…ん!?!」

あ、いや…驚くよな?

目の前に咲夜がいるんだからよ…

有太「俺もそんな能力持ちだからだ」

咲夜「…そう。貴方が火野有太…様ですかね？」
ん、敬語になったな。

有太「ああ、その通りだ」

咲夜「私は紅魔館のメイド長、十六夜咲夜です。お嬢様がお呼びです、こちらへ」
タスタ

有太「お、おう…」

元の世界にも増して瀟洒だな。

咲夜に着いていき、紅魔館に入る。

咲夜「……………」パチン

→ブウウウン…

無言で解除するのか。

スタスタ

再び進む。

―数分後―

咲夜「こちらです」

やつと着いた。

5分ぐらい歩いたぞ？空間を拡張しすぎじゃね？」

咲夜「それ程大きくしてないと思いますが……
いや、してるぞ。」

てか、俺声に出ってたのか。

咲夜「お嬢様、お客様がご到着致しました」

「入りなさい」

有太「…失礼する」ガチャツ

部屋の中に入ると、そこには…

ロリ吸血鬼が2人。

「今、失礼な事を考えたわね？」

有太「何の事だ？」

ロリ吸血鬼と言っただけだぞ？

レミリア「…まあいいわ。私は紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ」

フランドール「私はフランドール・スカーレットよ！」

うん、知ってる。

この世界でも仲良さげだな。

有太「俺は「火野有太、ね？」…そうだ。どうせお前の能力で見たんだろ？」

お前の能力、『運命を操る程度の能力』でな？

レミリア「え、何で分かったの？」

：あ、コイツカリスマブレイクしてるヤツだな。

有太「勘」

フランドール「霊夢みたいね」

だろうな。

元の世界では姉の転生だし。

そして俺は姉の元狂気だし。

剣と槍

side 火野有太

有太「で、本題だが…」スツ

例のブツを出す。

有太「最近ココに引越してきたからな、友好の証だ。受け取ってくれ」

レミリア「あら、礼儀正しいわね」

有太「…あ、コレもだな」

もう一つも渡す。

こりや驚くぞ？

フランドール「開けていい？」

有太「どうぞ」

ビリビリッ…

乱暴だなおい。

開けると、片方には槍、もう片方には剣があった。

レミリア「グングニル…？」

有太「ソイツはグングニルV2という武器だな。本来の物の数倍の威力だ」
レミリア「へえ…何でコレを？」

有太「…お前の最強の技は神槍へスピア・ザ・グングニル✓だろ？」

レミリア「……………」スッ

無言で槍を向けてきた。

有太「向けんよ。俺は別世界の幻想郷から引越してきたんだ。そこのお前にも会ってる」

レミリア「それで？コレを渡すのにどうつながるの？」

有太「実はソレ、あっちのフランが作ったモンなんだ。もう片方の武器もな」

フランドール「コレのこと？」

有太「ああ。ソイツはレーヴァテイン改だ。あっちのフランが愛用してるぞ」

レミリア「…嘘は言っていないようね」

有太「言うハズないだろ。まあ初対面だから怪しいと思うかもしれないがな」

フランドール「有太！」

有太「ん？」

フランドール「コレ、試していい？」

試す？じゃあ手合わせか。

レミリア「こらフラン、流石にソレは「いいだろう」えつ、大丈夫なの？」

有太「こう見えても俺、クソ強いと自負してるぞ。あっちの風見幽香を倒せるレベル」
レミリア「へ…？（あの花の大妖怪を？倒す？）」

有太「それは置いといて。フラン、何処で戦うんだ？場所がないなら異空間でやろうぜ」

フランドール「うーん…異空間でやろっ！」

有太「オーケー。レミリア、コレを」スッ

レミリア「コレは？」

有太「異空間の映像をコレに転送する。コレで俺とフランの試合が見れるだろ？」

レミリア「そうね…ありがとう」

有太「じゃ、フラン。俺の横に立て」

フランドール「こっう？」スタツ

有太「そうそう。じつとしてろよ…」スッ

ギョーン！

有太「転送火桜！」BLOOM！

シュッ

レミリア「き、消えた？…あ！」

映像にはフランと有太が写っていた。

「異空間」

シュツ

有太「っし、じゃあ戦闘準備だ」

フラン「ドール」「ふふっ、有太は強そうだから本気を出してもいいよね？」

有太「おう、全力でかかってきな」

武器は…相手は剣を使うし、コイツにするか。

有太「ハイペリオン」シャキン

元狂気 v s 狂気ではなく気がふれてる吸血鬼

side 火野有太

有太「ハイペリオン」シャキン

青黒い剣を出し、構える。

フランドール「じゃ…行くよッ！」ドッ

早速突撃か。

有太「フンッ！」シャツ

…キーン！

剣を剣で防御する。

フランドール「やあっ！」ズンッ

有太「いつ…オラア！」ズバッ

体勢を崩されたが、すぐに戻して斬る。

フランドール「禁忌ヘレーヴァテイン改」ギユオン！

スペルカードとして攻撃する気か。

有太「なら俺も！魔剣へハイペリオンHM」ズバアッ！

(HM→ハイパーマックス。完全強化という意味)

ドゴオオオ!

剣と剣がぶつかり合い、衝撃波が発生する。

有太「ツ、凄え腕力だなあおい!」

ブランドール「有太こそ…!」

サツ

一歩下がる。

有太「この剣の特殊能力を見せてやる」

ギョーン!

有太「黒符へウイザーインパクト」ドガアアン!

ブランドール「爆発!? 禁忌へ克蘭ベリートラップ」シユバツ

フランも弾幕を放ってきたか。

元の目的から外れるかもしれないが…

有太「いつその事弾幕戦にしようじゃねえか! 炎符へヘルフレイム」

ゴオオオオ!

ブランドール「そんな物、壊してあげる! きゅつとして…」キユツ

有太「…おお?」

フランドール「…ドカーン！」ドカーン！

シューウウ…

有太「ヘルフレイムを破壊しやがった…」

フランドール「きやははっ！禁忌へフォーオブアカインド」パツ！
分身か…4体だな。

有太「…まさか、それぞれ技を？」

フランドール「その通り！禁忌へ恋の迷路」

フランドール「禁忌へカゴメカゴメ」

フランドール「禁弾へスターボウブレイク」

フランドール「禁弾へカタデイオプトリック」

それぞれが一斉に技を撃ってきた。

…なら！

有太「こつちも4つ技を放ってやる！」

落符〈天空落とし〉

幽符〈アストラルビット〉

覇符〈炎天掌〉

炎符〈ブレイズスクリュー〉

シュバババツ！

フランドール「ええ!!」

ボンツ！

弾幕に当たり、フランドールの分身は消えた。

有太「ふうつ、今のは結構エネルギーを使ったぜ…」

フランドール「…わ」

有太「わ？」

フランドール「私も…遊び疲れちゃった」

有太「そうか。じゃあやめるか？」

フランドール「うん」

結果 引き分け

有太「少し解せないが、いつか。転送火桜！」 B L O O M !

シュツ

シュツ

咲夜「あ、戻ってきたようですね」

有太「おう」

レミリア「……………」

有太「どうした？」

レミリア「……うー☆」

…何してんだ？

レミリア「私も戦いたかった〜！」じたばた

有太「いやガキか！」

フランドール「安心して、お姉様はいつもこうだから「そ、それは言わないで！」

レミリア「私はいつもカリスマ溢れる吸血鬼よ！」ドヤア！

いやドヤ顔で言われても…

フランドール「…有太」

有太「何だ？」

フランドール「お姉様の武器、壊していい？」イライラ

有太「やめて差し上げろ」

てか、何で姉の方がガキっぽいんだよ。

妖怪の山

side 火野有太

フランと戦い、しばらく雑談した後、俺は紅魔館を去った。

有太「次はどこに行くか…」

白玉楼か、永遠亭か、人里か…

有太「…あつちにするか」

スタスタ

↓数分後↓

有太「……………」

俺が来たのは、妖怪の山だ。

霊夢曰く山頂辺りに神社があるらしい。

参拝がてら調べようと思う。

スタスタ

「そこにニンゲン、止まれ！」

有太「ん?」

白狼天狗か。

有太「あー、山の神社に参拝しようと思ってるな？」

「そうであろうと、ニンゲンを山に立ち入らせるにはいかない」

有太「…そうか」

じゃあ帰…

有太「るワケないんだよな。よっ」スッ

『犬系の妖怪を確実に引き付ける骨のおもちゃ』を取り出す。

「…ッ!? (アレは…骨!)」

っし、注目してるな。

有太「…ほいっ!」ポイツ!

「うおおおおお! (取らねばー!)」ダダダダダ

…撃退完了つと。

有太「進むか」スタスタ

―数分後―

途中でこの世界の射命丸に会ったが、マッハ10で逃げてきた。

有太「逃くげるんだよオオオツ！」ダダダダダ
文「待ちなさい…つてええ!?!速い!?!」
こんな感じ。

有太「さて、着いた…ん？」

この神社、なんか見覚えが…名前は？

『守矢神社』

有太「…え？」

もう一回。

『守矢神社』

…マジか。

有太「あつちでは外の世界にあるハズだぞ？」
こりや姉に報告だな。

有太「とりあえず参拝するか」スタスタ

神社あるあるの長い階段を上って本堂に着く。

有太「てか、神が神に参拝って面白いな」

まあいつか。21円入れて、と。

パンパン、リイン。

有太「コレでよしと」

「おや、ニンゲンが参拝とは珍しいねえ」

：コイツ、神か。

有太「どうも。それ程珍しいか？」

「当たり前だ、哨戒天狗達が見張りをしているハズだからな。：つまり」

有太「？」

「お前は強いんだろう？」

有太「：そうなるな」

神奈子「自己紹介が遅れたな。私は守矢神社の神の1人、八坂神奈子だ」

有太「俺は最近ココに引っ越してきた現人神、火野有太だ」

神奈子「現人神か：うちにも1人いるな」

有太「へえ」

神奈子「ところで有太、私と戦わないか？お前は強そうなのでな、手合わせ願いたい」

有太「んー：」

雰囲気からして神の中では上の中ぐらいの力だろうな。

対して俺はヘカさんの6割ぐらいの力だから…一応勝てる。

ただ、相手の能力が分からないから勝てるか分からない。

しかし、相手も能力（ry

有太「受けて立つ（そんなに考える必要もないか）」

神奈子「それじゃあ…始めよう！」ドッ

戦闘と許早苗

side 火野有太

神奈子「それじゃあ…始めよう！」ドツ

何だアレ…オンバシラ？

神奈子「神祭へエクスパンデッド・オンバシラ」ドゴツ！

オ～ン～バシラが飛んでくる。

(リズムは「クロマグロがとんでくる」みたいな感じ)

有太「赤手へゴツドハンドX」ギユン！

ガシッ！

赤い手を出し、オンバシラを止める。

神奈子「！ほう…」

有太「今度は俺の番だぜ！炎符へフレイムバレット」ボツ！

神奈子「密度がないな…」ササッ

当たり前だ。

そりゃ…

シユバババツ！

有太「跳ね返るからな！」

神奈子「ツ、忘穀へデイバイニンングクロップ」ドツ！

シユウウウ：

相殺されたか：

神奈子「行くぞ：御柱へライジングオンバシラ」ドガツ

またかよ！？

有太「こうなつたら：覇符へ天空掌」ズガアン！

ビユウウン！

風を纏った掌底を放ち、オンバシラを吹っ飛ばす。

神奈子「もう一度だ！」ドゴツ！

有太「ハア!? うおっと」サツ

やだこの神、デケエ柱投げつけてくるんだけど!?

そっういえば俺の柱は：つと下ネタはやめとくか。

有太「落符へ天空落とし」ギユウウン！

バキッ！

神奈子「私のオンバシラが!？」

有太「オラア！」ドッ

突撃だア！

神奈子「ツ、来い！」

神奈子は構える。

有太「フンッ！」ピヨン

神奈子「と、跳んだ？」

有太「くらえい！打符〈雷天落倒〉」ビリッ

神奈子「防御…!?」バキッ！

有太「そおい！」

ドゴオオオ！

俺の拳は神奈子の頭に命中した。

神奈子「…つつう!?!」

有太「よし、決まったぜ！」

この技、決まれば気持ちいいんだが、命中率が低いんだよな。といつても9割ぐらいだが。

神奈子「ツ、痛いじゃないか！」モワン

有太「ハハッ、お前頭にタンコブができてるじゃねーか！」

神奈子「許さんぞおお！」ドゴツ

有太「うおお…凄え数」

空中には大量のオンバシラが。

神奈子「ぶっ潰れるおおお！」

(DIOのマネかよ!?)

ドゴゴゴッ!

有太(こりや流石にしやれになんねえな…なら、俺も大技をやるか!)ゴオオオオ!

神奈子「…? (何をするつもりだ…この熱は…?)」

有太「俺の家系で受け継がれる技だ!くらえ…火竜へマリオファイナル」ボツ

ゴオオオオオオオオ!

火の双竜がオンバシラを燃やしていく。

有太「行けえええっ！」

シユウウウ…

ついに、オンバシラは全て焼かれた。

神奈子「…私…私の負けか」

有太「そのようだな」

「ええ!?!何ですかこの光景!?!」

2人「ん？」

見てみると、そこには緑髪の巫女がいた。

コイツはこの神社の巫女か？

神奈子「さ、早苗。そのだな…」

早苗「何てことしてるんですかああ!？」

しばらく神奈子は早苗とやたらに説教されたとき。

興奮とケロケロ

side 火野有太

早苗「次やったら許早苗ですからね！」

神奈子「す、すまない……」

……長かったな。半時間ほど説教されてたぞ？

早苗「ふう……すっきりしました。それで貴方は？」

有太「俺は火野有太。霊夢から山の頂上付近に神社があると聞いて、来てみたら神奈子にケンカ売られた。そして戦って勝った」

早苗「そうですね……スミマセンウチのポンコツ神が……」

神奈子（ポンコツ神って、私そう思われていたのか!?!）Z U ン

なんか、神奈子が落ち込んでるようだが無視しておく。

早苗「私は守矢神社の風祝（かぎはふり）の東風谷早苗です。有太さんからも神力を感じてます……」

有太「ああ、俺も現人神だな。お前もそのようだな」

早苗「……あ！思い出した！有太さんって別世界から来たんですよね？」

何かすつげえ興奮してんな。

…興奮つて言葉、エロいよな（どうでもいい）

上がつて居間にある座布団にすわる。

有太「…ん？」

「君が神奈子相手に勝つた現人神だね？」

有太「ああ、そうだが？」

カエルのような帽子をかぶつた金髪の子ビ神がそこにいた。

「…今失礼な事考えてたよね？」

有太「気のせいだ」

諏訪子「まあいつか。私は洩矢諏訪子、守矢神社の本当の神だよ」

有太「へえ…ところで、その帽子生きているのか？」

諏訪子「うん、生きてるよ。ピョン太君つて名前だよ」

「ケロッ」

有太「帽子にカエルのタマシイが宿つたのか」

諏訪子「そうそう、よく分かつたね？」

有太「その辺は少し詳しくてな」

スタスタ

早苗「有太さん、お茶です」コトツ

有太「ん、あざっす」スツ

ズズツ：

…美味しい。

早苗「そういえば、有太さんは何故この世界に？」

有太「…お前、何処まで読んでる？」

早苗「えつと、5部1章です」

有太「じゃあまだだな。…てか、この世界にあるとすれば、西暦からして既に完結してるハズなんだけどな」

早苗「え、そうなんですか!？」

有太「お前が幻想入りしたのはいつだ？」

早苗「2018年です」

有太「クソ途中じゃねえか。どうにかして全部読め。そしたら教える」

早苗「えく」ダラア

それ程重要な事なんだ、カンタンに話せるかよ。

バ鳥と妹

side 火野有太

有太「それでさ、円堂がさ…」

2人『マジン・ザ・ハンドつて…』

早苗にイナイレの話をしたら、めちやくちや分かってくれた。オタトークをするのって楽しいよな。

諏訪子「もう2時間ぐらいその話してるね…」

有太「ん、いかんいかん。もう遅いから帰るわ」

早苗「また話しに来てください！」

有太「おう」

神奈子「………」じー

…神奈子がじつと見つめてくるんだが？

有太「ど、どうした？」

神奈子「…次は勝つ」

…あ。

有太「おいそれを早苗の前で「懲りないんですかア!？」…あちやあ
逃げるか。」

タタツ

神奈子「まてえええ…」

有太「…つし、追ってこないな」

てか、神奈子は神としてのカリスマがブレイクしてそうだな

有太「ん?」

「ハア、ハア、探したわよ…」

目の前にはクソ疲れてそうな烏天狗が。

有太「おう、文か」

文「ど、どうして私の名前を!？」

有太「秘密だ。じゃ」スタスタ

文「…待ちなさい!」

有太「安心しろ、守矢神社で過ごしてただけだ」

文「それでも、侵入者である事に変わりはないわ」

有太「そつか。じゃあ逃げさせてもらおう！」ダッ

文「今度こそ逃がさないわ！」ビュン!

有太「それは、どうだろうな！」スッ

謎の玉を出し、地面に叩きつける。

ボンッ!

文「けほっ、けほっ：煙玉ですって：!？」

有太「じゃあな！」ヒュウン

文（こ、こんな原始的なモノに引つかかるなんて、私にプライドが!）

その後普通に逃げ切り、家に着いた。

ガチャッ

有太「ふう、ただいま「おかえり、兄さん」：ん？何でお前がココにいるんだ、ケーティ」

橙髪で『WITHER QUEEN』と書いてあるパーカーを着ている俺の妹、ケーティ・マリオがいた。

ケーティ「ちよつとこの世界に用事があつてね」

有太「絶対ウソだろ」

ケーティ「もうバレた？」

有太「ウィザークイーンであるお前がこの世界に用事があるはずない、以上」

☆説明しよう！

有太は4兄弟で、アルミ、有太、ケーティ、???の順番だ！

アルミと有太は双子、ケーティは4歳下、???はそのさらに4歳下の年齢だ。

ちなみに、ケーティと???は義妹だから血は繋がってないぞ！

アルミ、有太はニンゲン、ケーティは魔族、???は分類上妖怪と種族もバラバラだ！

有太「で、何しにきたんだ？」

ケーティ「ちよつと私もココに住んでみようと思ったのよ」

有太「へえ。ご自由にどうぞ」

ケーティ「ありがと、兄さん。家賃いる？」

有太「いらねえよ、部屋開いてるから適当に使ってくれ」

ケーティ「了解」

コンコン

有太「客？」

ガチャッ

ルーミア「わはー」

EXルーミア!?

side 火野有太

ドアを開けると、ルーミアがいた。

有太「なんでお前が？」

ルーミア「有太の料理を食べに来たのだー」

俺の料理？

有太「そんなに美味かったのかー？」

喋り方を真似して言う。

ルーミア「美味かったのだー！」

ほうほう。

有太「具材は充分足りてるし、いいぞ。入れ」

ルーミア「失礼しまーす」

ガチャツ

ケーティ「…あら、その子は？」

有太「宵闇の妖怪、ルーミアだ。なんか俺の料理が美味かったから、また食べたいっ

てよ」

ケーティ「ふーん。まあ確かに兄さんの料理は美味しいもんね。私はケーティ・マリオよ。よろしく、ルーミア」

ルーミア「よろしくー」

有太「じゃ、作ってくるぜ」スタスタ

今日は…和食にするか。

ケーティ「ねえ、ルーミア」

ルーミア「？」

ケーティ「そのリボン、お札なんでしょ？」

ルーミア「…へえ、もう気付いたのか」スツ

ケーティ「まあ、魔術に関しては詳しいし」

ルーミアはリボン（お札）を外す。

フツ…

ケーティ「可愛いじゃない。真の姿ってヤツ？」

姿は大人になっており、妖力も増幅されていた。

(俗にいうEXルーミア)

ルーミア「その通り。この姿だと大妖怪レベルの力があるのだ」
語尾は伸ばさなくなっている。

ルーミア「それでも私より強そうな貴女は何者なのだ？」

ケーティ「最強の魔族」

ルーミア「…よく分からないのだ」

有太「ふう…できた」

今日は天井だ。

有太「お前らく、飯できたぜ…って」

ルーミア「ありがと」

姿が大人になつとる…!

有太「お札を外したのかよ？」

ルーミア「あつちでも経験済みなのか」

有太「お、おう…だが何でいきなり？」

ルーミア「ケーティにバレた」

有太「ほう。まあバレルわな」

コトン

ケーティ「いただきまうす！」。パクツ

早えよ。

有太「…しゃあない、俺も食うか」

ルーミア「いただきます」

3人『…美味しい』

イイ感じのサクサク感だな！

晩飯の食器洗いも終わり、そろそろ寝る時間だ。

有太「で、ルーミアはケーティと同じ部屋で寝るのか？」

ルーミア「うーん…有太と寝る！」

…はあ!?

有太「ダメダメダメダメ。男と女が同じ部屋で寝たらロクな事にならん！」

ケーティ「別に大丈夫じゃない？ 兄さんはヘタレだし」

…グサツ

有太「おうふ。ヘタレじゃねえよ!？」

ケーティ「とにかく、襲ってくる事はないと思うから」

有太「それでもな、やめといた方がいいぞ? てか何で俺と寝たいんだ?」

ルーミア「:暖かいから」

有太「何が?」

ルーミア「どっちも」

: What the heck does she mean?

(コイツ何の事言ってるんだ?)

有太「:はあ。いいぞ」

ルーミア「やたっ!」

とりあえず俺は煩惱退散、煩惱退散…

煩惱退散…できるワケがない

side 火野有太

煩惱退散…できるかあ！

有太「柔らかすぎるんだよお前イ！」

ルーミア「そうなのか？」ギユツ

コイツ、ベッドで俺の隣に寝てるんだが、抱き着いて離れないんだよ！

おかげで大人ルーミアの乙πを堪能できるが…

有太「理性が崩れちまうとや！」

博多弁で喋るレベルでヤバイ。

ルーミア「わはあ、暖かい…」

有太「ルーミア、もう離れてくれ。お前の乙πが柔らかすぎるんだよ」

ルーミア「女性に向かって乙πなんていう卑猥な言葉は言っちゃダメなんじゃないの

？」

有太「んなもん今はどうでもいいだろ！離れてくれい」

ルーミア「やだ」ギユツ

むにゆむにゆ

…ンフオオオオオオオ！（興奮）

ルーミア「ほら、柔らかいでしょお？」ニヤニヤ

わざとかよ！

有太「いいぞもつとやれ！（いい加減やめてくれ！）…はっ!?」

建前と本音が逆になっちまった！

ルーミア「…そもそも何で私がこんな事してるか分かる？」

有太「えつと…飯のお礼？」

ルーミア「それもそうだけど、なんか有太の近くにいと落ち着くのだ」

落ち着く？…ああ。

有太「多分俺が元狂気だからだな」

ルーミア「？」

有太「狂気たるものは闇の存在。能力が闇であるお前とは相性がいいんだろ」

ルーミア「そうなのか。だから落ち着くのか…それに」

有太「それに？」

ルーミア「有太はエロいけど優しいし」ギョッ

ルーミアの乙エ気持ちよすぎだろ！

(元ネタ：ティーダのチ○ポ気持ちよすぎだろ！)

有太「褒め言葉は嬉しいんだが：俺の理性がもうホントにヤバいから離れてくれ」
(エロいも褒め言葉ととらえてる)

ルーミア「だが断る！」

(ジョジョネタ。なんで知ってるの?)

有太「：グツ、もうダメだ」ガパツ

ルーミア「きやつ」

俺の理性が持たない！

なので自分からルーミアに抱き着いた。

何やってんだよ俺！(歓喜)

ルーミア「え、ちよっ／／／カアツ

有太「可愛いなこの野郎！」ナデナデ

凄く柔らかい匂い：

ルーミア「：わはあ／／／」

有太「この状態で寝るか？」

ルーミア「う、うん：／／／」

その後何故かぐっすり寝れた俺達だった。

(付き合ってもないのにソレはダメだろ…)

ケーティ「兄さん、ルーミア、おはよ…う…」

有太「……………」ギユツ

ルーミア「……………」ギユツ

ケーティが見た光景は、有太とルーミア（EX）が抱き合って寝ている光景だった（意味浅）

ケーティ「何故こうなった？てか服着てるからお楽しみみてワケでもなさそうだし…ホントなんで？」

その数分後目覚めた2人に、ケーティは質問攻めをするのだった。

文字変換で漢字が出てこない大天狗

side 火野有太

ケーティ「で？それで抱き合って寝たの？」

2人『はい…』

ケーティ「ホント、勘違いする所だったわよ？」

有太「だよなあ…」

ルーミア「でもしようがない」

ケーティ「どこが？」

ルーミア「有太の近くにいと落ち着くのだ！」

ケーティ「…ふーん？」じー

…絶対変な意味だと思われてるな。

有太「違う違う、コレは俺とルーミアの性質によるものでな…」

ーただ今説明中ー

有太「…という事だ」

ケーティ「なるほどね。それなら私も魔族という闇の存在だし、私の近くにいると落

ち着くの？」

ルーミア「多分」

有太「∴朝飯作ってくる」スタスタ

―数十分後―

朝飯も食い終わった俺達は、今日することについて話すことにした。

ルーミア「私は有太についていくのだ」

リボンをつけてロリになったルーミアがそう言った。

(戻った、という表現は間違ってる。リボンがない状態が本来の姿だからね)

ケーティ「私は家にいるわ」

有太「ん∴あ。そういえば、妖怪の山の麓で市場が開催させるらしいな」

早苗が言ってたぜ。

有太「そこに行ってみるか」

ルーミア「わはー」

有太「行つてきマンモス」

ケーティ「いつてら〜」

ガチャツ

有太「歩いて行くか」

スタスタ

ー市場ー

ガヤガヤ

見ろ、人がゴミのようだ！（突然のムスカ大佐）

…ゲフンゲフン。

有太「見て回るか」

ルーミア「…有太、アレ」

有太「どした…ん？」

文「……………」じー

何か見られてるな。

…まあ、移動中ずっと見てたんだろが。

有太「どうしたんだ、文？」

文「貴方に名乗った覚えはありませんが、いいでしょう。何故ルーミアさんと一緒に？」

有太「さあ？なんか気が合うからついてきてるだけだ」

ルーミア「そーなのだー」

文「ふむふむ。…ところで、妖怪の山に侵入した時、幻想郷最速である私ですら貴方

に追いつけなかったんですが、何故ですか？」

有太「マツハ10で走ったから、以上」

文「マ、マツハ10!? 一体どうやって…」

有太「お前の能力をフル活用すれば普通に行けるスピードだぞ？」

文「あ、ありえませんが…」

有太「ありえるから言ってるんだ。じゃあな」スタスタ

文「あ…（私の能力も知ってるよね…どうやって…?）」

少し歩き回っていると、とある売店に着いた。

有太「アビリティカード？」

ルーミア「他人の能力の一部が封入されてるカードなのだ」

有太「へえ。買ってみるか…」

「ちよつと待ちな」

有太「ん？」

そこには藍髪の大天狗がいた。

コイツは…

有太「…飯綱丸龍か」

龍は、めぐむと読む。

文字変換に出てこないから厄介だ（メタい！）

龍「何故私の名前を…と言いたい所だが、既に八雲紫から話は聞いている。火野有太、だな？」

有太「そうだが…まさか昨日の件でしばきにきたか？」

龍「いや、その件は問題ないのでいい。ただ…」ゴゴゴ

まさかやる気か？

有太「…ただ？」

龍「アビリティカードを買う場合、市場の神がいないとダメなのだ」

へっ？

有太「…あ、そゆことか」

龍「なので戻ってくるまで少し待ってもらいたい」

有太「オーケー、待つとくぜ」

龍「感謝する」

何だ、俺問題起こしたと思っただぜ…

市場の神と獺

side 火野有太

「待たせたわね〜」

数分待つっていると、めちやくちや奇抜な格好をした…神がいた。

コイツが市場の神か？

「ん？君は？」

有太「火野有太だ。アビリティカードを買いたい」

千亦「私は天弓千亦、市場の神よ。ところで、どれを買うのかしら？」

有太「コレだな」スツ

デフォルメしたチルノの絵が描いてあるカードを取る。

千亦「オーケー。…ほい」パチン

シユウ…

封印が解けたような音がする。

千亦「はい、料金は10000円です」

10000円か。

スツ

有太「ちようどだな」

財布から野口さんを出し、千亦に渡す。

千亦「まいどあり〜」

有太「じゃなく」

龍（危険そうには見えない…山に来てても危害はなさそうだな）

スタスタ

ルーミア「ところで、何でチルノのカードを買ったのさ？」

有太「真っ先に視界に入ったからだな」

ルーミア「適当な理由だな」

有太「別にいいだろ。…お？」

『夢の枕屋』

市場で枕売るヤツなんているんだな。

行ってみるか。…って、夢？まさか。

「いらっしやいませ〜」

有太「やっぱりか…」

「あ、君は」

有太「ドレミーじゃねえか。枕といえばお前だよな」

店員というか、枕を売っているのは猿のドレミー・スイートだった。

ドレミー「何で貴方がこの世界にいるの？」

有太「ちよつと用事でな。あ、枕1つ」

ルーミア「私もほしいのだー」

有太「…じゃあ2つで頼む」

ドレミー「まいど。枕2つで5000円だね」

有太「ほい」

今度は樋口さんを出す。

ドレミー「ちようどだね」

有太「じゃ、夢でまた会おう」

ドレミー「ソレ、君の夢に入り込めない事を知ってて言ってるよね？」

有太「そうだっけ？」

その後色んな店をまわって、色々買った。

有太「ただいま…ん？」

置き手紙？ケーティからだな。

『外の世界に行ってくる』

有太「はあ？」

ルーミア「ケーティは外の世界に行けるのかー？」

有太「そうだが、何でだ？理由が思いつかん」

一応、外の世界が……達の世界だとは知ってるが……まさか会いに行くのか？

有太「まあいつか。アイツが問題を起こすとは思えないし」

スルツ、ポンツ！

ルーミア「それでいいの？」

リボンを外したルーミアがきいてくる。

有太「大丈夫だ、問題ない」

ルーミア「そっか」

有太「とりあえず晩飯作ってくる」

スタスタ

ルーミア「3日連続有太の家に来たけど……」

ココの居心地が良すぎる…!
ルーミア「野宿する100倍マシなのだ！」

ルーミア が 家に加わった！

side 火野有太

俺とルーミアは2人で晩飯を食べている。

ルーミア「ねえ有太」

有太「ん？」

ルーミア「ココに住んでいい？」

…は？

有太「えつと、何でだ？」

ルーミア「野宿する100倍マシなのだ」

有太「それだけの理由なら、博麗神社もあるだろ」

鬼とか、狛犬とか、地獄の妖精とかいたし。

(出してないだけで萃香、あうん、ピースには会ってる)

ルーミア「ココが快適なのだ！」

有太「そうか。うーん…」

部屋は俺とケーティの部屋を数えなくても後2部屋あるからな…

有太「いいぞ。あっちの…俺の部屋の隣がお前のでいいか？」

ルーミア「うん！」

有太「…ただなあ」

ルーミア「？」

有太「俺の事、完全に信じ切ってるワケじゃないよな？」

ルーミア「うーん…信じ切ってるワケじゃないけど、有太のようなニンゲンは信用できると知ってるからね」

有太「へえ…お前何歳なんだ？」

ルーミア「千歳は超えてるかな？」

有太「だろうな」

妖怪は年を重ねる度に妖力が強まる。

俺の予想だとルーミアはレミアと同じぐらいの妖力を持つてるから、年齢的にそれが妥当だろう。

ルーミア「とにかく、有太は信用できると思ってるのだ」

有太「…そうか」

心を読んでる限りルーミアは俺を裏切ろうとしてないようだし…

有太「俺もルーミアを信用するぜ」

ルーミア「ありがとなのだ」

有太「つくそ、ミスった」トントン

ルーミア「…何してるの？画面を叩いてるけど」

有太「音ゲー」

ルーミア「おとげーって何なのだ？」

有太「曲に合わせて譜面を叩く、いわばリズムゲームってヤツだ」トントン

ルーミア「へえ…」

ちなみに俺が今やってるのはプ○セカだ。

有太「…ひゃあ、連打がやべえツ！」

ルーミア（反応が個性的なのだ…）

その後、俺は寝ようとした所にルーミアが入ってきて、再び抱き合って寝たのだった。
…その内俺の理性が崩壊しないことを祈る。

―次の日―

有太「今日は何処か行くか?」

ルーミア「今日は寺子屋があるのだ」

有太「へえ。荷物はあるのか?」

ルーミア「闇の中になってしまうから大丈夫なのだ!」

有太「そうか。じゃあいつてらっしや「有太も来るのだ」…ん?」

ルーミア「友達に紹介したいのだ」

有太「…分かった」

ルーミア「それじゃ、出発なのだ!」

有太「おー」

途中で魔理沙に会い、どうやら紅魔館で本を盗みに行くらしいのでとりあえず止めておいた。

頭？ダイヤより硬いぞ？

side 火野有太

着いたぜ人里。

ルーミア「ココなのだ」

有太「場所があつちと同じ…当たり前か」

「ルーミアじゃないか。…君は？」

寺子屋の教師、上白沢慧音が出てきた。

有太「火野有太、コイツの…友達？」

慧音「不確定なのは怪しいな」

有太「いやホントだつて。なあルーミア？」

ルーミア「そーなのだ。有太の近くにいと落ち着くのだ！」

おいソレ言うなよ！

慧音「…もしやいかがわしい事を？」

有太「違う違う「生徒にそんな事するのは許さん！ハア！」…うおっ!?ちよっそれは」

ガシツ

…ゴーンッ!

慧音に思いつきり頭突きされた。

ピキツ (骨にヒビが入る音)

慧音 「痛っ!?!何だこの硬さは!?!」

有太 「はあ、だから止めろと言おうとしたのに。俺の頭はダイヤより硬いんだよ」

何故かって?

頭はニンゲンの急所だからな、常にエネルギーで防御してるんだよ。

ルーミア 「…けーね先生が頭突きでひるむのは初めて見たのだ」

有太 「そんなに硬いのか?」

ルーミア 「うん。悪い事した生徒に罰として頭突きして、気絶することもあるのだ」

有太 「マジかよ」

慧音 「くう…結局君は何者だ?」

有太 「ルーミアの友達、以上」

慧音 「…分かった、深くはきかないでおこう。行くぞルーミア」

ルーミア 「はい」 スタスタ

有太 「じゃな」

…と、いうことで。

有太「博麗神社に来たわけだ」

霊夢「ルーミアと同棲してるのね…」

有太「まあそうだな。あつちからしたいって言ってきてきたし」

魔理沙「お前、ルーミアに変な事でもしたのか？」

有太「してないぞ？てか変なモン食わせるのはお前だろ」

魔理沙「キノコは変じゃないぜ！（怒）」

有太「はいはい。…ところで、萃香は何処だ？」

伊吹萃香。鬼。

霊夢「あつちで酒飲んでるわよ」

有太「そうか。ちよつくら酒飲み勝負してくる」

魔理沙「は!?! 正気か!?!」

有太「おう、むしろ勝つ自信がある」

霊夢「どういう体質してんのよアンタ…」

スタスタ

有太「おーい萃香」

萃香「お前は…有太か。何だい？」

有太「俺と酒飲み勝負しないか？」

萃香「…へえ？」じっ

勝負と聞いた瞬間、萃香はこつちをじつと見る。

萃香「…お前は反則しないだろうし、いいよ。酒を持ってきな！」

有太「おうよ。…よっ」コトン

萃香「それは何の酒だい？」

有太「俺がいた世界の、天界の酒だ。美味いぞ」トクトク

萃香「…おお、コレは美味いなあ」

有太「じゃ、勝負だ！」グビッ

―数分後―

萃香「足りないよ！もつともつと！」

有太「おうよ！」

ゴクゴク

魔理沙「……………」(。D。)

―1時間後―

萃香「もつと、お…」

有太「ん、もうバテてるのか？」

萃香「いや、まだだねえ」

霊夢（有太が全然酔ってない…なんで？）

―2時間後―

萃香「……………」くかー

有太「よし、俺の勝ち」

霊夢「ど、どうやってそんなに飲んでるの？」

有太「…種明かしするか。コレを見ろ」シユー

魔理沙「頭から…湯気？」

有太「ああ。胃袋を加熱して液体を蒸発してんだ。じやないと酔う以前に腹いっぱいになっちまうしな」

霊夢「なるほどね…」

コレをすれば、俺の友達も鬼相手にも対等に飲める。

初代博麗!?

side 火野有太

…そういえば。

有太 「なあ霊夢、質問があるんだが」

霊夢 「何？」

有太 「この神社に祀られてる神、知ってるか？」

霊夢 「知らないわよそんなもん」

魔理沙 「おい…」

うん、それは巫女としてどうかと思うぞ。

有太 「そうか。ちよつと待ってろ」 スタスタ

この世界でも同じだったら面白そうだな。

霊夢 「…？」

―数分後―

有太 「…わお」

マジであったんだが。

有太「こりや伝えないとな」

タタツ

有太「おい霊夢、ちよつとついてこい」

霊夢「はあ？」

有太「ちよつと見せたいモンがあるんだ。魔理沙も来るか？」

魔理沙「もちろんだぜ！」

ー神社の裏ー

霊夢「裏に来て何するつもりよ」

有太「見てろよ…フンツ！」ドゴツ！

…ガシャン！

特定の場所に足を踏み込むと、地面に穴が開き、そこから階段が現れた。

2人『!』

有太「…マジで何処かのRPGみたいだな」

姉さんが言った通りだ。

魔理沙「あーるびーじー?…早苗が言ってたヤツか？」

有太「多分ソレだな」スタスタ

階段を下りて道を進む。

魔理沙「不気味だな…」

霊夢「こんな場所が神社にあつたなんて…」

てか、今思うと地下にあるからピース辺りが気付くと思うんだがな…ココ特有の神力の影響で気付かなかつたんだろうな。

有太「おつ、奥が見えてきたぞ」スタスタ

パアア…

道の奥にあつた部屋は、不思議な空間だった。

魔理沙「何だココは…?」

霊夢「…?」

魔理沙「どうした霊夢?」

霊夢「私と似たような気配が…」

有太「ご名答。ココにはお前と似たような存在がいる。…そうだろ?」

…初代博麗の巫女、博麗靈夢

「その通りよ、火野有太」

シュツ

紫髪の巫女…いや神が現れる。

魔理沙「なっ…」

霊夢「初代…!?!」

まさかこの世界にもコイツがいるとは思わなかったぞ…

だって、コレは二次創作要素だしな（メタい！）

靈夢「改めて自己紹介するわ。私は博麗靈夢。初代博麗の巫女で、博麗神社で祀られている博麗神よ。よろしくね、12代目」

魔理沙「れいむって、同じ漢字なのか？」

靈夢「いや、私の靈は難しい書き方の方よ」

魔理沙「なるほど…（この2人、どう呼び分けるんだ…？）」

靈夢「あの、初代さん」

靈夢「気軽に靈夢でいいわよ」

靈夢「じゃあ靈夢さん。何でずっとココにいたの？」

靈夢「……………」

靈夢（…まさか、言っちゃマズかったのかしら？）

靈夢「実は…」ゴゴゴ

有太（え、コレも同じなのかよ？）

靈夢「…100年程寝てたの♪」テヘツ

靈夢「ズデーン

魔理沙「寝すぎだろ!？」

有太「ははっ、世界は変わっても初代は初代だな」

初代は強い

side 火野有太

霊夢 「え、幻想郷はそんなに変わってるの!？」

萃香 「そうだよお」

初代は現在萃香や霊夢から今の幻想郷について説明を受けている。

有太 「てか、100年寝るのって神の中では普通なのか？」

霊夢 「偶々よ」

偶々1世紀寝たのか。どれぐらいの確率だよソレ。

スルッ

紫 「有太」

スキマが開き、紫が顔を出した。

有太 「何だゆかりん？」

魔理沙 (ゆかりん!?)

紫 「貴女の妹が外の世界に行った反動で、別の人が迷い込んでしまったのよ。もう帰したけど」

誰だ?……ほう。

有太「姉さんが言ってた、スキマを開く能力を持つてるヤツか」

紫「ゑ、何で分かったの?」

有太「心読んだ」

霊夢「何処のサトリ妖怪よ…」

有太「といっても、コレは表面上の記憶しか読めないからな。てか能力じゃねえし」

霊夢「ソレ、私もできるわよ。それと…久しぶりね、紫」

紫「…ええ、久しぶりね霊夢」

霊夢「………」じー

紫「ど、どうしたの?」

霊夢「100年も経ったから少しは老けてると思ったけど、残念ね」

妖怪にソレは言っちゃダメだろ。

ほぼ老けないんだし。

紫「あらあ…永遠に寝たいのかしら♪」ピキッ

霊夢「やってみなさい、スキマBBA♪」ニコッ

霊夢（私と同じ事を言うのね…）

紫「霊夢、ちよつとぶつ殺すから表出なさい」

靈夢「受けて立つわ♪」

有太「えっと、庭でやれよ？」

2人は庭に出ると…

ドゴオ！バゴオ！バキイ！

魔理沙「おうおう、やってんな…」

萃香「私も参戦したいなあ〜」

有太「やめとけ、余計に被害が出る」

―数分後―

紫「」ボコーン

靈夢「いやあ、久々に動いたから疲れたわ」

魔理沙「……………」(。D。D。)

靈夢「……………」(。D。)

有太(うん、強えな…)

全力で戦っても勝てるか分からん。

姉さんなら勝てるかもしれないが…俺は性格的にな…

紫「何で悪口言われた私がケンカで負けるのよ！もう！」

靈夢「ちからのさ」

紫「貴女が強すぎるのよ！むうく！」ガシツ
ゴクゴク…

紫は近くの酒瓶を持って一気飲みした。

紫「こうなったらヤケ酒よ！」ゴクツ

萃香「おく」

霊夢「酒は自分のを飲みなさい」ひよい

紫「あら霊夢ちゃん意地悪！」

霊夢「ちゃん付けするな！」

2人「………」

変な光景を見る俺と魔理沙。

魔理沙「あはは、今日も平和だな」

有太「だなく。俺ん家で飯食うか？」

魔理沙「もちろんだ」

2人「あはは」

よし、帰る！

有太「サイナーラ！」バツ

魔理沙「帰るぜ！」バツ

霊夢「ちよっ!？」

ー自宅ー

家に帰ると当然のようにルーミアがいた。

ルーミア「おかえりなのだー」

有太「おう、寺子屋はどうだった？」

ルーミア「楽しかったのだー」

魔理沙「…マジで一緒に住んでんだな、お前ら」

有太「あのドS（親切）？アイツ程俺はいいヤツじゃねえよ、多分」
ルーミア「そーなのかー？」

おいルーミア、お前は分かるだろ。

ルーミア（私は有太の方が優しいと思うのだ）

誉め言葉は嬉しいがな、うーん：

有太「まあいつか。飯作るから適当に寛いでくれ」スタスタ

リグル「分かった！」

魔理沙「おー」ダラア

お前は寛ぎすぎだ。

side 霧雨魔理沙

：それにしても。

魔理沙「有太の家って色々あるな」

外の世界の家ってこんな感じなのか？

ルーミア「野宿する100倍心地いいのだー」

リグル「そりゃ野宿だからね？」

…ん？

魔理沙「本棚に…魔導書！」

ルーミア「有太の姉が書いた本なのだー」

魔理沙「有太の姉って魔法使いなのか？」

ルーミア「違うけど、詳しいらしいのだ」

魔理沙「ほー。『火の書Ⅰ』はもらったしな…」

他の本も一生借りるか？

魔理沙「火、水、風、雷、土…タマシイ？何だコレ？」

リグル「魂の魔法じゃない？」

魔理沙「でも何でカタカナなんだ？」

リグル「さあ？」

魔理沙「まいつか。とりあえず借りる「おっとソレはダメだ」…痛っ!？」ベシッ
私の背後には有太が立っていた。

有太「お前のソレは借りるじゃなくて盗むだ」

魔理沙「違う、一生借りてるだけだぜ！」

有太「一生借りる？つまり人生を終わらせればいいだろ？一旦殺して時間巻き戻せば

いいんだなあ？」ギロツ

魔理沙「ゴ、ゴメンだぜ……」

有太「……ハア。分かればいい」

何だよ今の、怖すぎるだろ……

有太「タマシイについて説明してほしいんだろ？」

魔理沙「……そうだぜ」

有太「っし、じゃあ飯でも食いながら説明してやる」スタスタ

ルーミア「わーい」タタツ

……いい匂いがするぜ。

魔理沙（有太の物を一生借りちゃダメだな、うん）

スタスタ

飯はカレーだった。

パクツ

リグル「……!!」パアア

ルーミア「美味しいだろー?」

有太「何でお前が言うんだ……」

リグル「うん、美味しい!」

魔理沙「……じゃあ有太、説明を頼むぜ」

有太「おう……」

タマシイについて

side 火野有太

魔理沙「…じゃあ有太、説明を頼むぜ」

有太「おう。まず、タマシイは魂と同義だ。専門用語だからカタカナになってるだけだ」

魔理沙（同じなのかよ）

有太「それと、タマシイはニンゲン、モンスター、妖怪、神、魔族などにある。物にタマシイが宿れば付喪神になる」

ルーミア「ふーん」

有太「そしてコレが大事なんだが…タマシイは8種類ある」

魔理沙「種類とかあるのか？」

有太「ああ。ニンタイ（空）、ユウキ（橙）、セイジツ（青）、フクツ（紫）、シンセツ（緑）、セイギ（黄）、ケツイ（赤）、キョウフ（桃）の8種類だ。キョウフはユウキの亜種だと思え」

魔理沙「種類によって特性があったりするのか？」

有太「まあそうだな。ニンタイは斬撃(速)、ユウキは打撃(拳)、セイジツは打撃(蹴)、フクツは弾幕(特殊)、シンセツは打撃(武器)、セイギは弾幕(物理)、ケツイは斬撃(力)、キョウフは打撃と斬撃の中間だな」

魔理沙「情報量が多いな…」

有太「あつちでは一般知識だからほぼ全員知ってる内容だぞ？」

ルーミア「そーなのかー」

魔理沙「それと、タマシイの書があるからには技とかあるのか？」

有太「おう、あるぞ。早速見せてやろう」ガタン

席を立ち、少し離れる。

有太「俺のタマシイはケツイだ。だからこんな事ができる…ケツイナイフ！」ギョーンズバツ！

何処からともなく赤いナイフを出し、斬撃を繰り出した。

リグル「今、何も無い所からナイフを出したよね!？」

有太「コレはタマシイのエネルギー…つまり、霊力で生成したモンだ」

魔理沙「ん？待てよ。タマシイのエネルギーって、霊力の事か？」

有太「自分の種族によるぞ。俺の場合は霊力と神力だ」

魔理沙「なるほどな…後、ほぼ速攻でナイフを生成してたが、速すぎないか？」

有太「慣れれば手ではなく何も無い空間に生成することもできる。…こんな風にな」
シヤキン！

俺はポケットに手を突っ込んでいる状態で、自分の周りに赤いナイフを生成する。

リグル「おお〜」

有太「さて、タマシイについての説明は以上だ。本は”一時的に”貸すから詳しくは
そこで知ってくれ」

魔理沙「分かったぜ！」

そして残りのカレーを楽しんだとき。

魔理沙とリグルは同じ部屋で寝ていて、ルーミアは俺の部屋でゴロゴロしており、俺
はリビングにいる。

…さてと。

有太「おーいゆかりん」

スルツ

紫「はーい、ゆかりんよ」

有太「ちよつと頼みがあるんだが…」

まったいら、おつきーな。

side 火野有太

スタツ

「お前が最近別世界から来たという火野有太か」

有太「その通りだ」

俺は紫に頼んで、「後戸の世界」に連れてきてもらった。

流石に勝手に入ったら怒られるからな。

それにしても…

有太（この世界でもおつきーなか…）

（下ネタやめろ）

隠岐奈「私は後戸の神、摩多羅隠岐奈だ。何故この時間帯に紫に連れてきてもらったのだ？」

有太「状況的にこの時間帯以外無理だからだ」

俺がいた幻想郷との違いを調べたいしな。

隠岐奈「そうか…ところで、紫の機嫌が良さそうだったか？」

有太「成り行きで『スキマBBA』とは呼んでるが、アレは冗談だ。俺にとってお前は可愛いぞ』って褒めたらめっちゃ照れてたな」

隠岐奈「……………」じー

「いや、何言ってるんだお前？」みたいな顔をされるが、無視だ。

俺も言った直後にそう思ったが。

有太「それで、俺が来た目的だが…俺がそもそもこの幻想郷に来た目的を賢者の隠岐奈に伝えに来た」

隠岐奈「ほう…？」

有太「実はな…」

そして数時間後。

隠岐奈「で、おつきーなどは何だ？」

有太「汗」

俺が来た目的を話した後、隠岐奈は俺に興味を持った。

それで俺があつちでの話をしていった所で…この質問だ。

うん、俺どう答えればいい？

有太「そのな、お前は摩多羅隠岐奈だろ？」

隠岐奈「そうだが？」

有太「それでアレが”まったいら”なのか”おつきーな”なのかって、な…？」

この時点でもうセクハラだから、コレ以上言いたくない。

ま、この小説はR15だから言っても規制はされないが（メタい！）

隠岐奈「アレとは何d……………えっ」

有太「あ」

ヤベっ、視線が…

隠岐奈「…なるほどなるほど、そういう事か。よく分かったぞ火野有太」ニコツ

そりや怒るわな…謝るしかねえ！

有太「申し訳ございませんでしたッ！」しゅたっ

スライディング土下座を披露する。

どうだ…？

隠岐奈「……………」

有太「…？」

顔を上げてみると、隠岐奈は黙って俺を見つめている。

ずっと土下座した状態で見つめられるの、正直恥ずかしいんだが…

隠岐奈「ふん、許してやる…」プイツ

有太「ありがとな…」

許されたが…俺は今猛烈に落ち込んでいる。

有太「美女の前で下ネタは禁句というのによ…言っちゃまった…」ズーン

隠岐奈「び、美女!?!何処だ!?!(私らの他に人がいるのか!?!)」キョロキョロ

有太「お前だよ!」

他に誰がいる!

隠岐奈「…なんだ、私か。…私!?!」

…あ。

有太「あー、気にしないでくれ。そろそろ時間が遅いし帰る、じゃあな」スツ

シユツ

俺は再び口を滑らせてしまったので、すぐその場を離れることにした。

隠岐奈「どういう事だ火野…ってえ?いない…」

銀髪剣士と亡霊の姫

side 火野有太

次の日の朝10時頃。

魔理沙とリグルはもう帰っている。

有太「そうだ、白玉楼へ行こう」

まだ行っていないな。

ルーミア「え？いきなり行くのか？」

有太「ああ。留守番頼めるか？」

ルーミア「任せるのだ！」

有太「おう。じゃあ行ってくる」

ルーミア「行つてらっしゃい」

ガチャツ

有太「飛んで行く」フワツ

―数分後―

途中で文に追っかけまわされたが、何とか撒いた。

有太「あの穴だな」スッ

―冥界―

有太「つし、冥界着いたつと」

少し移動して、白玉楼の門に着く。

有太「ごめんくださうい」

…お？

「曲者！」ドッ

刀を2本持つている銀髪少女が斬りかかってきた。

有太「(ココでもこうなるのか…) よっ」サッ

「避けるなあ！」ムキーン

有太「俺は『ごめんください』つただけだぞ?!いきなり斬りかかってくるなよ物騒な！」

相手の逆ギレに思わずツッコんでしまう俺。

…妖夢はココでもすぐ斬りかかってくる、メモメモつと。

妖夢「見慣れない服を来ている貴方は…怪しき満点です！」

有太「そりやないだろ…」

妖夢「とりあえず斬る！」 スッ

ドッ！

有太「はあ!？」

何故そうなる!？

有太「…仕方ねえな、一旦落ち着かせるか。炎符『フレイムバレット』」 ボッ

シユバッ！

妖夢「ッ!？」 キイン！

有太「先制技を防御できるワケねえだろ、それと落ち着け」

(そうとは限りません)

妖夢「落ち着いて…られるかつ!」 ドッ

有太「…はあ。だーかーら」 スッ

パシッ

妖夢に一瞬で近付き、刀を掴む。

妖夢「な…離せ!」

有太「落ち着け、俺は客だ。まだ戦うならこの刀…折るぞ?」 ギロツ

少し威圧すればいいか。

妖夢「ッ……」

「そこまでよ、妖夢」

妖夢「…幽々子様!？」

有太「やつと来たか」

幽々子「貴方が紫が言つてた有太ね〜？私は西行寺幽々子よ〜」

有太「よろしく」

幽々子「…で、妖夢？」

妖夢「はい…」

幽々子「前から会つたことがないお客さんを曲者と勘違いして斬るなど言つたでしよ

〜?」プンブン

プンブンって、怒り方可愛いなおい。

妖夢「申し訳ございませんでした!」シユタツ

妖夢は見事な土下座をしてくる。

有太「次やらないならいいぞ」

妖夢「あ、ありがとうございます…」

幽々子「罰として夕飯を倍ね〜」

妖夢「え!?!そ、そんな…」orz

有太「…お前、マジで言ってるのか？」
幽々子の食べる量、カービィと互角だぞ？
幽々子「今日の夕飯、楽しみね〜♪」
わぁお、マジでらっしやる。

劍士と手合わせ？

side 火野有太

…で。

妖夢 「手合わせして下さい！」

幽々子 「頼めるかしら〜？」

有太 「俺、劍術下手だが？」

妖夢 「なら劍術なしでもいいです！」

…うーん。

有太 「いいぞ」

妖夢 「じゃあ早速「だがちよつと待て」…？」

有太 「靈力…よし。神力…よし」

幽々子 「へえ、神力を持つてるのね〜」

有太 「まあな。…準備完了、いつでも来い！」 ザッ

妖夢 「…はい」 スッ

♪桜咲く。 — 3代目桜

さて、どう来る？

妖夢「……！」ドッ

正面か。

有太「桜符〈炎天桜舞〉」BLOOM!

妖夢「(弾幕!) 人符〈現世斬〉」シヤッ!

おお、弾幕を斬ったか。

…コレならどうだ?

有太「炎符〈ヘルフレイム〉」ゴオオオオ!

大きめの火球を妖夢に向かって投げける。

妖夢「ええっ!?!」

有太「ほら、斬ってみろ!」

妖夢「ツ、断命剣〈冥想斬〉」シヤッ

スパアン!

妖夢はさつきより強い斬撃でヘルフレイムを真つ二つに斬った。

有太「おお…」パチパチ

妖夢「(ようやく射程距離に入った!) 人鬼〈未来永劫斬〉」ズバツ!

…さつきよりさらに強いヤツか。

有太「霸符〈天空掌〉」ズガアン！
キイーン！

妖夢「やあっ！」シヤツ

有太「よっ」サツ

妖夢「避けるなあ！」ムキーツ

またかよ。

有太「戦闘において攻撃を避けるのは普通だぞ…炎符〈滅焼脚〉」ボツ

…バゴオ！

妖夢「グツ…!？」ドゴツ

ドサツ

…あ、ヤベ。

有太「クリーンヒットしちゃった…」

妖夢「何、ですかこのパワーは…」

有太「マジでスマン、力入れすぎた」

妖夢「もしかして、手加減してたんですか？」

有太「まあ…」

妖夢「手加減しないで下さい」

…え？

有太「…本気か？」

妖夢「本気です」

有太「…分かった。俺は本気を出す。

…3秒で決着をつけてやろう」

多分、驚くだろうな。

3…

妖夢「3秒って、舐めてる「2」…!？」

有太「1」ギョーン

妖夢「ツ…」

有太「風符へ即時退場」ドッ

ビュウウン!

妖夢「う、うわあっ!?!」フワッ

ピューン…

有太「よし、俺の勝ち」

俺は本気を出すと云ったが、本気で戦うとは一度も言っていない（言いがかり）

幽々子「よく飛んだわね」

有太「…部下の心配をしなくていいのか?」

技を使った俺が言う事じゃないが。

幽々子「あの子は強い、この程度なら大丈夫よ」パクパク

…その煎餅、何処から取った?

タタッ

有太「お、戻ってきたか」

妖夢「本気で吹っ飛ばしたただけじゃないですか!」プンプン

有太「でも、一応”本気”だぞ？」

妖夢「そういう事じゃないです！」

有太「はいはい」

妖夢「はいはー回です！」

有太「はーい」

妖夢「伸ばさない!!」

有太「へい」

妖夢「”はい”です!!!」

うん、コイツイジルの楽しいな。

アメリカンな妖精と土蜘蛛と釣瓶落としと橋姫

side 火野有太

有太「じゃ、俺はそろそろ帰るぜ」

幽々子「またね♪」

妖夢「……………」むすう

有太「じゃあなく「待って下さい」…ん？」

妖夢「どうしたら、貴方は私と本気で戦いますか？」

…ほう？

有太「別に条件なんかないんだが…まあ、1つあるならお前がもつと強くなる事だな。
…じゃ、俺は帰るぜ」

スタスタ

妖夢「……………」

—人里—

昼飯は何にしようか：

「あら、有太じゃない」

有太「：ヘカさん？なんでこんな所に？」

ヘカーティア「甘味処へピースと行くのよん」

クラウンピース「団子を食べたい！」

うん、相変わらずアメリカンに服を着てらっしやる。

ヘカーティア「有太も来ない？」

有太「俺はちゃんとした飯が食いたいからな：別の店に行く。またな「待つて」

ぐえっ」ガシッ

フードの根本掴むなよ、苦しい：

ヘカーティア「ココでの生活、どうかしらん？」

有太「中々楽しめてるぞ」

ヘカーティア「：それはよかった。またねん♪」

クラウンピース「またなく！」スタスタ

：今思うと。

有太「俺、幻想郷のトップ達と接点持ちすぎじゃね？」

紫然り、隠岐奈然り、ヘカさん然り、レミリア然り、幽々子然り。

…いや、レミリアはかりちゅまおぜうだから違うか（辛辣）

レミリア「ぶえくしよん！」

咲夜「大丈夫ですか、お嬢様？」サツ

（ティツシュで吹く準備完了）

レミリア「…大丈夫よ」

有太「…それよりも飯だな」

その後適当な店で昼飯を食べた。

123. 472分後↑は？

有太「ふい〜」

あの店の飯、美味かったな。

鯨吞亭、だっけ？機会があったらまた行くか。

次は…そうだ。

有太「地下だな」

この世界のさとりに俺の”必殺技”を食らわせてやりたい。

(絶対エロいヤツだろ…)

―地下への穴―

穴に着く。

有太「まず、中に火の玉を落とす」ポツ

ストン…

「ギヤアアア！」

かすかに誰かの断末魔が聞こえる(死んでない)

…よし。

有太「入っていく〜」ピヨン

ヒユウウウ…

―数秒後―

…スタツ

有太「つし、着地完了…ん？」

「プスッ

そこには黒焦げの土蜘蛛が。

有太「モロに当たったか？…回復させておくか」スッ

パアア

有太「…じゃ、行くか」

スタスタ

ヤマメ「…っん？」

ー7秒後ー

ヒユウウウ

何かが落ちてきた。

…こんな時は。

有太「…オラア！」ブンツ

カキイン！

靈力で作ったバットでかつ飛ばす！

「~~~~っつ!?!」

落ちてきたモノの中から少女が出てきた。

…キスメか。

有太「…ん？」

キスメ「何てことするのよ！」

有太「落ちてきたお前が悪い。じゃ」

スタスタ

キスメ「むきいいい！」

ー53秒後ー

橋に着いた。

有太「渡るか…お」

「1人で渡るなんて、妬ましいわね」
橋姫に遭遇して早々妬まれる。

有太「何が？」

「理由をきくなんて妬ましいわね」

有太「じゃあどうしろと…」

ツンデレと体操服鬼とサトリ

side 火野有太

さて、俺の目の前にツンデレ橋姫こと水橋パルスイがいるんだが…

パルスイ「さっさと通りなさいよ妬ましい」

少しおちよくってから行くか。

有太「いやいや、お前こそ何で通らないんだよ妬ましい」

語尾を同じにして言い返す。

パルスイ「は、はあ!?!何故貴方が妬ましいのよ妬ましい!」

理由をきいてから、それを妬ましいというのか…分かん。

有太「はいはい妬ましいですな」

パルスイ「…バカにしてるの?」

有太「違う、コケにしてる」

パルスイ「意味は同じよ妬ま」 「だから何処が妬ましいんだよ?」 …そ、それは

焦るパルスイ。

…後はコレだな。

有太「…おっと、ちよつと急がなきゃな。またな、嫉妬深い美人さん」
タタタ…

パルスィ「…び、美人なんかじゃないわよ妬ましい！」
いやいや、鏡見ろ。

―数分後―

有太「賑わってるな〜」

まあ、俺が向かってるのは別の意味で賑わってる場所だが。

有太「速足で行くか」スタスタ

「おや、ニンゲンがこんな所に何の用だい？」

…げっ。

有太「とある用事で地霊殿に向かっている者だ」

振り向いて返事をする。

…やっぱりアンタか。

勇儀「ニンゲンが地霊殿だと？ 霊夢殿じゃあるまいし…お前、何者だ？」じつ
鬼の四天王の1人、星熊勇儀がきいてくる。

有太「最近幻想郷に引っ越してきた火野有太だ。よろしく」

勇儀「私は星熊勇儀、見ての通り鬼さ…って、お前が有太か！」

有太「？」

勇儀「萃香と酒飲み勝負して勝ったそうじゃないか」

有太「ん？…おう、まあな」

勇儀「私とも酒飲み勝負しないか？」

有太「あー…勝負したいのは山々なんだが、今は時間が惜しい。後でココに戻るからその時しないか？」

勇儀「…二言はないな？」じっ

有太「ああ」

勇儀「…分かった。また後でな！」

有太「おう！」タタツ

そして俺は地霊殿へと走ってった。

―地霊殿―

有太「雰囲気は同じか…」

「貴方が火野有太さんですね？」

…早速出てきたな。

有太「その通りだ。アンタは？」

さとり「この地霊殿の主、古明地さとりと申します」

有太「おう、よろしくなさとり」

さとり「はい…つて、ええ!」（。D。）

…おつ、早速引つかかったようだな。

さとり「『それでは、どうぞこちらへ…』私が考えていた事を…!」

有太「心を読む能力を持っているのは、アンタだけじゃないんだぜ?…まあ、俺の場合、俺はあくまでも表面上の思考だが」

さとり「そ、そうですか…とりあえずこちらへ（まさか私の心が逆に読まれるとは…）」

普段心を読む側が心を読まれてるんだ、焦るのもおかしくないだろう。

俺はさとの後について行った。

メリーさんではなくこいしさん

side 火野有太

普通の部屋に案内されたので、そこにあつた椅子に座る。

さとり「ご用件は…なるほど」

脳内：引越してきたばっかりだから、各地に挨拶に行つてる。

有太「それで、友好の証だ。受け取ってくれ」スツ

俺が出したのは…鈴だ。

さとり「コレって…えっ、知ってるんですか？」

脳内：お前の妹の能力対策だ。

有太「まあな。てか…」スツ

さとり「…そこにいたの？」

脳内：ココにいるしな。

有太「ほら、出て来な」ポンポン

「見つかつちやつた〜」スツ

俺の隣に緑髪の少女が現れる。

さとりと瓜二つだが、サードアイは閉じている。

さとり「こいし、いつから有太さんの隣にいたの？」

こいし「この人が地底に入ってきてから！」

有太「いや、もうちよつと前だろ？」

さとり「気付いていたんですか？」

有太「おう。無意識に関しては俺も得意だしな」

脳内：俺の戦術にも入れる程だし。

さとり「なるほど……」

有太「んじゃ……こいし、コレを帽子につけてくれ」スツ

こいし「うん！」

シャリーン

こいし「できた！似合うかな？」

さとり「ええ、似合ってるわ」

こいし「有太は？」

有太「似合ってるぞ」

こいし「ありがと！」ニコッ

そういうえば、元いた幻想郷のこいしは極稀に目を開けて覚醒してたが…

さとり「…何ですか、それ？」

有太「いやな、お前ら姉妹は普段と逆の事をすると一時的に強くなるんだよ」

初めて見た時は妖怪もスーパー化できるんだななんて思ってたな。

☆説明しよう！

スーパー化とは、MULAストーリーで見られる特定の条件下で起きる覚醒状態である！

髪色は変わらず服や目の色が変わり、パワーが倍増するぞ！

さとり「そんな事ないですよ？…多分」

不確定かよ。

こいし「なになに、何の話？」

有太「何でもねえよ。…なあ」

2人『？』

有太「こいし、その目を閉じたのはトラウマが原因だろ？」

こいし「……………うん」

有太「だよな…普通の人からしたら、心を読むなんて気持ち悪いだろ。…でもな」

こいし「?」

有太「それはソイツらからしたら」読めないのが当たり前だからだ。つまり、読めるのが当たり前の世界だったら、そんなトラウマ植えつけられなくて済むだろ?」

さとり「確かにそうですが…そんな事がありえるんですか?」

有太「ああ、ありえる。てか、俺が元いた世界は一定以上の強さを持つ奴ら全員表面上の思考が読めとれた。そんな集団にお前らがいても、何ら違和感はないと思うぞ?」

こいし「ふーん…でも、なんで有太はそんな話を?」

有太「うーん…特に理由はないな。でも、コレで少しはトラウマが和らいだらろ?」

こいし「…うん!」

有太「それでいい。じゃ、次は面白い話をしてやる」

どの話にしようか…よし、アレだ。

人形遣いとバレる秘密

side 火野有太

さとりとこいしに面白い話をした。

有太「……つて感じで、事件は解決したのさ」

こいし「おおう」キラキラ

さとり「言ってる事と考えてる事を別々にすることで、二重の意味を持たせる表現方は斬新ですね」

有太「まあ、そうだろうな」

脳内：誉め言葉ありがとよ。

こんな感じだ。

有太「んじゃそろそろ行くぜ。勇儀と酒を飲む約束をしてんだ」

こいし「またね〜！」

有太「じゃあな〜」

勇儀「んぐっ、んぐっ…やるなお前！」

有太「アンタもな…」ゴクゴク

2人の周りには空っぽの酒瓶が大量に置かれていた。

「す、すげえ…」

「姉貴とタメをはれるニンゲンがいるとは…」

有太「ふう〜！」

ギリギリ勝てたぜ…と思いながら、俺は自宅に着く。

有太「ただいま〜」ガチャツ

ケーティ「おかえり、兄さん」

有太「おう、ケーティ帰ってきてたのか」

ケーティ「ええ。」あの子」と手合わせもしてきたの。この状態の2割の力でやった

んだけど、負けちゃったわ」

有太「マジで？パワーはどれぐらいだ？」

ケーティ「通常で400万」

有太「おお…また強くなってやがる」

ルーミア「何の話なのだ？」

EX状態になつてるルーミアがきいてくる。

有太「ちよつとした外の世界の話だ。大した事じゃねえよ」

ルーミア「ソレは大した事なのだ」

そうか…？

有太「まあいいや。地底から酒を持ってきたんだ、つまみを作るからお前らも飲むか？」

ケーティ「地底の？飲むわ」

ルーミア「私も飲むのだ！」

有太「オーケー。んじやつまみ作ってくるぜい」スタスタ

焼き鳥にするk「ピンポーン」…誰だ？

有太「はーい」ガチャツ

「飯を食べに来たぜ」

有太「またかよ、魔理沙」

魔理沙「ああ、まただぜ。それと今夜は…」

霊夢「私と…」

「初めまして」

霊夢：「アンタもかよ。」

有太「俺は火野有太だ」

アリス「私はアリス・マーガトロイドよ。魔理沙と同じ魔法使い「ソレは知ってる。魔理沙から聞いた」そ、そう」

有太「おい魔理沙、俺が初対面の人にするのが飯のふるまいか？」

魔理沙「別にいいんじゃないか？」

霊夢「早く食べたいわ」

アリス「…大変なのね」

有太「いや、もう慣れてる。入れ」

魔理沙「失礼するぜ」

3人を入れる。

…つて、あ。

ルミア「…え」

3人『…誰？』

有太「しまった…」

普段その姿は見せないってのに…

霊夢「ルミアに似てるわね…」

アリス「それにしても身長が高いようだけど…」

魔理沙「お前、誰だ？」

ルーミア「えつと…リボンを外した状態のルーミアなのだ」

3人『…えっ!?!』

大きいとピーピー

side 火野有太

一旦ケーティの紹介とルーミアの説明をした。

霊夢「へえ、口調は伸びなくなるのね」

アリス「そのパーカー、誰に貰ったの？」

ルーミア「有太に欲しいって言ったら作ってくれたのだ」

アリス「え、作ったの!？」

有太「ああ、パーカーは自作で作ってるぞ」

アリス「なるほど…」

魔理沙「……………」

…?

ケーティ「どうしたの、魔理沙？」

魔理沙「……………ぎるぜ」

ケーティ「？」

魔理沙「大きすぎるぜ！」

大きい？…ああなるほど理解した。

ルーミア「…何が？（惚け）」

…おい、惚けんよ。

ケーティ「…あ、なるほど」

俺の妹は察したようだ。

霊夢「さあ？」

アリス「何なの、魔理沙？」

2人は分からないようだ。

…まあ、あまり気にしないタイプなんだろうな、大きい方だし。

コレが胸囲の格差しやk（ry

魔理沙「…お前ら、ホントに分からないのか？」

3人『分からない』

（ルーミアは便乗）

魔理沙「分かった、見せてやるよ…」ゴゴゴ

…ま、まさか。

魔理沙「コレだよ、コレ！」バツ

ルーミア「キヤツ!? (さ、触ってきたのだ!?)」

ムニユムニユ

ルーミア「ちよっ、魔理沙…あんっ／／／」

有太「……………」サツ

この”大変微笑ましい光景”は、見ちゃダメだ…

…いや、クソ見たいけどな? (やつぱりか)

見たら後で殺されそうだから、見てないだけだ…うん。

アリス「魔理沙、何してるの!?!」

魔理沙「どうしたらこんなに大きくなるんだ! 私なんてまな板同然なのに! 何でだあああ!」ムニユムニユ

自分の胸が成長しない事を愚痴りながらルーミアの胸を揉み続ける魔理沙。

ルーミア「あつ…ひやつ…んっ／／／」

有太「」

うおおおおおおおマジで振り向きてえええええええ!

でも我慢だ火野有太…振り向いたら死ぬぞ…!

霊夢「…そろそろ止めてあげなさい」

冷静に魔理沙を止めようとする霊夢。しかし…

魔理沙「何だよ、私より胸大きいクセに！」

ソレに対して文句を言う魔理沙。

霊夢「胸は関係ないでしょ」

そしてソレをバツサリ切る霊夢。

ケーティ「こうなったら…」

アリス「？」

…お、やるのか？

ケーティ「ピーピーピー…」

文字通りピーピー言うケーティ。すると…

魔理沙「…ッ!」ゾクッ

ルーミア「…ふえ？」

魔理沙「ト、トト…」

霊夢「ト？」

魔理沙「ちよ、ちよっとトイレ行ってくるぜっ！」ダッ

やりやがった…

霊夢「…ケーティ、どういう事？」

ケーティ「実はね…「ソレは俺が説明する」…分かった」

有太「魔理沙がよく俺の飯を食いに来るのは知ってるだろ？」

アリス「ええ」

有太「その時、魔理沙の料理にコイツを混ぜ込んだんだ」スツ

俺が出したのは、黄色い飴玉。

ルーミア「あ、ソレを魔理沙が食べたのを見たことあるのだ」

有太「コレは”ピーピーキャンデー”といってな、食べたヤツが”ピーピー”って声

を聞くと下痢をする代物だ」

(元ネタ：ドラゴンボール)

霊夢「ええ…」

有太「アイツは本をよく盗むらしいし、懲らしめる為にやってみるといいぞ」

アリス「流石にそれは…」

有太「…まあ、そうだよな」

ケーティ「さっさと終わらせたくて、言っちゃったわ♪」テヘツ

テヘツ、じゃねえんだわ…

なるほど、分からなくもない

side 火野有太

有太「…！」ギユン

ギユルルルル！

俺は今、庭で炎舞を披露している。

魔理沙「おお…」

霊夢「あの面霊気並に綺麗ね…」

…ほう、この世界にもこころがいるのか。

(MULAのこころは原作とかなり違う)

…スタツ

有太「…ふう。どうだ？」

ルミア「カッコよかった！」

ケーティ「…いつ覚えたの？」

有太「ココに来るちよつと前にお前の嫁に教えてもらった」

ケーティ「嫁？…は!? 違うわよ！」

有太「安心しろ、3割冗談だ」

だってあんなに百合百合してたら、なあ？

ケーティ「私達は親友なの！」

有太「はいはい。…んでアリス、どうだった？」

ケーティを軽く流し、アリスにきく。

アリス「貴方のその精密な動きなら、人形遣いになれるわよ？なってみない？」

有太「慎重に断らせて頂くぜ。俺のこの精密動作性は別の事で使ってるからな」

戦闘、というものにな。

霊夢「ふわあ…眠いわ」

有太「ん、そうか。お前ら3人は同じ部屋がいいか？それとも別々か？」

3人『同じでいい』

…マジで？

有太「分かった。ルーミア、案内してやれ」

ルーミア「了解なのだ〜」

スタスタ

……………。

有太「で？お前はいつまで悶えてるんだ？」

ケーティ「確かに抱き着いたり、押し倒されたりするけど、流石に同性愛じゃないわ
…でも、『キスして』とか言われるし…えっ? ええっ?」ブツブツ

有太「……………」

無視しとくか。

「あら、こんな時間に庭で何してるのん?」

有太「…へかさん?」

振り向くとへかさんがいた。

有太「どうしたんだ?」

へかーティア「ちよつと伝え忘れてたことがあったのよん」

有太「?」

へかーティア「この世界も私の領域内って言ったじゃない?」

…ああ、確かに言ってたな。

有太「ソレがどうかしたのか?」

へかーティア「正確には、記憶だけがこの世界の私、つまりこの私に引き継がれてる

のよん」

有太「…は?」

どゆこと?」

へカーティア「えっと、例えば…貴方がこの世界とあっちの世界にそれぞれ一人ずついるとするわよん？」

有太「おう」

へカーティア「カンタンに言えば、あっちからこっちの世界へ、記憶だけ転送したのよん」

有太「…あ、なるほど、分からなくもない」

でもな…

有太「それだけ伝えにきたのか？」

へカーティア「もちろん、それだけじゃないわよん♪入っていいかしらん？」

有太「ああ、いいぞ。ただ…泊まるなら誰かと同じ部屋になるが？」

へカーティア「別に泊まらないし、いいわよん」

有太「分かった、入ってくれ」

スタスタ

ケーティ「…とにかく、私に嫁はいないわ！…あれ？」

やっと終わったのか…

チートキャラの雑談

side 火野有太

コトン

俺とヘカさんの分のお茶を机に乗せる。

ケーティは部屋に戻った。

有太「…んで、他に要件は？」

ヘカーティア「実は…」ゴゴゴ

おお…?

なんかただならぬ気配g

ヘカーティア「特にないのん♪」テヘッ

有太「ドサッ

ねえのかよ!

ヘカーティア「私と対等に雑談できる相手なんてかなり限られてるじゃない?」

有太「まあ、そうだな…てか、俺と姉さん以外で対等かつ仲がいいヤツなんていなく

ね?」

ヘカーティア「失礼な、ちゃんというるわよん！」プンプン

有太「誰だ？」

ヘカーティア「隠岐奈よん」

…え？

有太「アンタら接点あつたのか？」

ヘカーティア「あるのよん。偶にお茶する仲間」

(ヘカさんが一方的にそう思ってる。しかし隠岐奈はまんざらでもない)

有太「ほーん。…で、俺と雑談するならネタはヘカさんから頼む」

ヘカーティア「そうね…最近構ってくれない閻魔ちゃんのことを話そうかしら？」

有太「…ああ、アイツか」

あの説教、もつと短くまとめてほしいよな…

ヘカーティア「忙しいらしいんだけど、ピースに行かせたらそれ程でもないらしくて

…私に構いたくないのかしらん？」

有太「うん、絶対そうだ。アイツは真面目なものにな…何したんだ？」

ヘカーティア「えつと…あ」ハッ

何か思い出したようだ。

有太「？」

ヘカーティア「実は、あの子が部下死神と一緒に人里にいるのを見かけたのよん」
有太「それで？」

ヘカーティア「その時私：『まるで親子みたいね♪』って言っちゃったよん：」
有太「Oh：」

そりや嫌がるわな。

アイツ背が低いのを気にしてるらしいし。

ヘカーティア「私、どうしたら：」しゅん

かなり落ち込んでいるヘカさん。

てか、コレ雑談じゃなくて相談じゃね？

有太「まずは謝ればどうだ？」

ヘカーティア「そうね：」

：あ。

有太「ただし、絶対に余計な事言うなよ？例えば、身長とか胸とか、そういうの」
ヘカさんだったら間違えてやりかねんからな：

ヘカーティア「分かったわ。：というか、なんで胸も？」

有太「：鏡を見てこい」

アンタのその2つの惑星をアイツのまな板に比べてみる、差は一目瞭然だ。

(惑星、だと…)

ヘカーティア「…あ、なるほど」

有太「……………」ズズツ

流石にヘカさんは察したようだ

ヘカーティア「つまり有太は大きい方がいいのねん？」どーん

有太「ゲホッ!?!」

思わずむせてしまった。

…つて

有太「何言ってるんだよアンタ!?!そ、そんなワケあるだろ!?!」

(あるのかよ!?!)

…あ。

やつべ、さらつと自爆しちまった。

ヘカーティア「やつぱりねん♪」ニコツ

しかし、ヘカさんは引かないようだ。

ヘカーティア「まあ分かったわ。謝って、あの子にとっては地雷なことは避ければい

いのね?」

有太「…そ、そうだ」

とりあえずコレで雑談：いや相談は完了か。

ヘカーティア「それで有太、相談に乗ってくれたお礼をしたいんだけどん：」

有太「別にお礼はいらないけど：ん？」

ヘカさんは俺の横まで来る。

ヘカーティア「大きい胸が好きなんでしょ？」

有太「：あまり言うような事じゃないが、そうだな」

ヘカーティア「じゃあ：」

ギョツ

有太「んむふ!？」

ヘカさんに抱き着かれる。

ヘカーティア「コレはどうかしら♪」

ムニムニユ

有太「さ、最高だぜ：（脳死）」

そして俺はしばらくヘカさんに抱き着かれるのであった。

―数分後―

ヘカーティア「それじゃ、またねん♪」

有太「おう」

ガチャッ

…今夜のエロ本は巨乳ものだな。

有太は鈍感ではない

side 火野有太

へかさんが帰った後、俺はすぐに巨乳ものを読もうと自分の部屋に戻ったが、ドアを開けた瞬間…

「あ、やつと来たのだ♪」グイッ

有太「うおっ!？」

ドサッ

俺はベッドに押し倒された。

…いや、正確には腕を引っ張られて倒された。

有太「いきなり何だよ、ルーミア」

ルーミア「来るのが遅いのだ！」ポンポン

有太「ソレは俺の勝手だろ…てかなんで俺の部屋にいるんだ？また一緒に寝るのか？」

ルーミア「そーなのだ」

有太「だろうな…」

俺、今からエロ本を読もうとしてたんだが？

ルーミア「もしかして、いかがわしい本を読もうとしてたのか？」

有太「…察せ」

ルーミア「…ふーん、そうなのか（じゃあ今襲ったらいいのか？）」

（危険な思考をしてらっしやる…）

ギョツ

ルーミアに抱き着かれる。

むにゅっ

胸は当たるが、へカさん程ではないので何とかスルーする。

（前は普通に反応してたのに？）

ルーミア「…あれ？」

有太「どうした？」

ルーミア「胸を当てても興奮しないのだ…なんで？」

有太「さあ？（惚け）」

ルーミア「むむむ、何かがおかしいのだ…」

有太「別に、何もおかしくないだろ？（一応表情には出てないだろうが、柔らかなのは変わらないんだよな…）」

ルーミア「…そうだ！」 スツ

有太「？」

ルーミア「こうすればいいのだ！」 ゴソツ

…は!?

有太「おいおい脱ぐな脱ぐな！」

ルーミア「直接当てれば絶対興奮するのだ！」

有太「待って待ってそれはおかしいすぐやめろ俺の理性が崩壊するから頼むやめてくれ

！」

ガシツ

ルーミア「離すのだー！」 うがー

有太「ダメだ。何が目的かは知らんがすぐやめろ。襲われる気か？」

とりあえず真面目に止める。

直接当てられたりしたら流石に俺の理性が退場してしまうからな。

ルーミア「違う、私が襲う側なのだ！」

有太「そういう事じゃねえよ…ほら、着ろ」 ゴソツ

ルーミアに服を着せた。

しかし…

ルーミア「……………」むすっ

有太「落ち込みすぎだろ…」

ルーミア「だって、有太が喜ばないから…」

…？

有太「喜ぶ？」

ルーミア「この家に住ませてくれてるお礼として、こうしたら喜んでくれると思ったのだ」

有太「お、おう…でも、なんでこんなタイミングに？」

ルーミア「ソレは、その……………／／／」カアッ

…おいまさか。

(有太は鈍感ではない)

有太「……………」

俺に惚れてしまったりしたのか？

原因ならいくらでも思いつくが…

ルーミア「…うう／／／」

有太「…はあ。その反応ピュアすぎるだろ」

さつきまで俺に胸を直接当てようとしてたヤツとは思えん。

ルーミア「有太のことが、す、す…」

顔を赤くしながら、ルーミアはこう言った。

ルーミア「好きなのだ…」

有太「…フツ」ギユツ

ルーミア「有太…？」

有太「よく言った。…よろしくな、ルーミア」

俺って、結構チヨロいんだな…

ルーミア「…！うん！」

甘い①

side 火野有太

次の日、俺の目が覚めると…

ルーミア「……………」ニコッ

ルーミアが優しい目で俺を見ていた。

有太「おはよう、ルーミア。…俺の寝顔を見てたのか？」

ルーミア「……………」ニコッ

…あれ？まさか。

有太「おーい、生きてるか？」ブンブン

目の前で手を仰ぐが、ルーミアはまだぼーっとしている。

…さては。

有太「こうすりゃいいのか？」ナデナデ

頭を撫でてみる。

すると…

ルーミア「おはよう、有太♪」ギョッ

まるで何もなかったかのように、ルーミアは抱き着いてきた。

有太「…さっきのはわざとか」

ルーミア「何のことなのだ？（惚け）」

有太「…何でもない。他のヤツらを起こしに行くか？」

ルーミア「…有太、時計を見るのだ」

有太「ん？…あ」

『9…36』

有太「…全員起きてるな、うん」

ルーミア「有太が作った朝ご飯を食べたいのだ！」

有太「分かった分かった。行くぞ」

ルーミア「うん！」

ガチャツ

ー1階ー

ケーティ「あら、おはよう」

魔理沙「おはようだぜ」

有太「おう、おはよう」

霊夢「お腹すいたわ」

有太「今すぐ作るから待ってろ」スタスタ

アリス「…ちよつと気になったんだけど」

ルーミア「？」

アリス「ルーミアって、有太と一緒に寝てるの？」

ルーミア「…そうなのだ」

霊夢「ふーん。アンタら付き合ってるの？」

ルーミア「…ふえ!?!?／／」

突然変化球（質問）が飛んできて、ルーミアは顔を赤らめる。

魔理沙「…まさか」

ルーミア「そ、そうなのだ…／／」

ケーティ「…え、いつの間に？」

魔理沙「ケーティも知らなかったのか？」

ケーティ「ええ、だって普通そんな事はすぐ報告されるから…」

アリス「いつから付き合ってるの？」

ルーミア「……き」

4人『きき?』

ルーミア「昨日の夜から、なのだ：／／／」カアア

魔理沙「：マジか」

アリス「……………」じー

アリスはルーミアをじっと見ている。

ルーミア「：ど、どうしたのだ?」

アリス「どっちから告白したの?」わくわく

ルーミア「そ、それは：／／／」

アリス「どっち?どっち?」わくわく

ルーミア「私、なのだ：／／／」プシユウ

アリス「キヤー!」(≡▽≡)

ケーティ(ええ：アリスって恋バナするタイプなのね)

その後ルーミアは有太が朝食を作り終えるまで質問攻めにあつたのだった。

有太「朝飯できたぞく：って、どうした?」

ケーティ「：兄さん」じっ

有太「お、おう？」

ケーティ「…私達に報告すべき事があるんじゃない？」

有太「…そうだな。俺とルーミアは付き合うことになった。…どうせルーミアから話
は聞いてるんだろ？」

アリス「凄い、堂々と言った…」

ルーミア「／／」プシュー

ルーミアは頭から湯気が出ていた。

…スパツと言いすぎたか？

だいぶ強すぎる初代さん①

side 火野有太

朝飯を食べ終わった後、魔理沙とアリスは帰っていった。

有太「…そうだ。なあ霊夢」

霊夢「何？」

有太「初代は神社にいるのか？」

霊夢「霊夢さん？いるけど…どうかしたの？」

有太「ちよつと手合わせしようと思つてな」

霊夢「…紫がボコされたのよ？」

有太「そうだな。でも俺は紫より強いし、体を動かしたいからな」

ルーミア（流石有太なのだ、自分の健康を気遣つてる…）

（別に気遣つてるワケではなく、ただ戦いたいだけ）

―博麗神社―

有太「おーい初代」

霊夢「あら、有太。どうしたの？」

萃香「ういゝ…」

どうやら酒を飲んでいたようだ。

朝から飲むのは…いいよなあ。

有太「ちよつとアンタと手合わせしたくてな。手合わせ願えるか？」

靈夢「うーん…ちようどヒマだったし、いいわよ」

有太「おう」

とりあえず庭に出る。

有太「ルールは…そうだな。スペカ無制限、能力使用や直接攻撃OK、相手が気絶または降参したら負けで。つまりはほほ何でもありだな」

靈夢「フツツ、分かったわ。先攻はアンタに譲るからかかってきなさい」

有太「おう…」スツ

ルーミア「頑張るのだ、有太く！」

靈夢（有太の本気、どれぐらい強いのかしら…？）

♪MULAストーリー—GOD Apple!?

有太「行くぜ…桜符〈炎天桜舞〉」シュバツ

BLOOM!

靈夢「フツ、甘いわ！」サツ

有太「避けさせるとでも?…ほい」スツ
…シヤツ!

靈夢「!?」ドスツ

有太「火桜の花びらを自由自在に動かせるんだよ」

靈夢「そうなのね…今度は私よ。靈符〈夢想封印〉」ギユン

…バゴオ!

有太「うおっ!」

靈夢のなんかじや比べ物にならない威力のエネルギー弾が飛んでくる。

有太「こりや相殺だな…」

幽符〈アストラルビット〉

炎符〈フレイムバレット〉

技を片手ずつ使って2つ同時に発動する。

シユウウウ…

靈夢「あら、相殺されちゃったわ」

有太「危ねえ…」

いやいや、技を2つ使わないと相殺すらできないって何だよ?

…気にしない方が良さそうだ。

有太「炎符へヘルフレイム」ボツ

ゴオオオオ……!

大きな火球を放つ。

靈夢「夢符へ封魔陣」スッ

ピキッ!

結界のようなものが初代の前に張られる。

有太「このままじゃ防がれちまうな……もう一発!」ボツ

ゴオオオオ!

靈夢「2発撃とうが関係ないわ! 夢符へ二重結界」サッ

ピキイッ!

有太「マジかよ」

シュウウウ……

防がれちまった……

靈夢「靈符へ夢想封印・集」シユバツ

ギユルルル!

集中型か!

有太「ツ……時間停止!」

←ブウウウン…

時を止める。

…咲夜は今頃焦ってるんだろな。

←ブウウウン…

咲夜「…えっ、誰かが時を止めた？」

案の定焦る咲夜。

咲夜「…恐らく火野有太ね」

しかしすぐ納得したようだ。

初代の後ろまで回り込む。

有太「…再生！」

→ブウウウン…

霊夢「…あれ？」

有太「隙あ r 「あ、いた」…え」シユツ

靈夢「よっ」パシッ

技を発動するぐらいの隙はなかったのでストレートをかましたが、あっさり止められた。何だよその反射神経…

有太「どうせ至近距離にいるんだ、くらえ！覇符〈炎天掌〉」
ズガァン！

靈夢「ハッ！」シユッ

…ドゴッ！

俺の掌底は初代がパンチで相殺した。

有太「……………」

さて、どうするか…

だいたい強すぎる初代さん②

♪MULASTORY—GOD Apple!?

side 火野有太

実をいうと、俺はまだ本気で戦っていない。初代もそうだ。

勝敗を分けるのはどちらが相手を早く本気にさせるか、だが…

有太「まずは攻撃を続けるか。炎符へブレイズスクリーン」ドゴツ

ドツゴオン!

そしたら初代はソレを相殺しようとするハズだ。

霊夢「霊符へ夢想封印」ギユイイン

予想通りだ。

…よし!

有太「転送火桜!」シユツ

霊夢「なっ…(まずい、技はまだ発動中…!)」

気配を消してすぐ初代の後ろに回り込む。

…からの!

有太「打符〈雷天落倒〉」ビリッ

靈夢「…へっ!？」

…ドゴオ!

靈夢「ごっ!？」

俺の拳は初代の頭にクリーンヒットした。

…しかもメテオ効果付きで。

靈夢「…うわっ!」バゴオ

初代は地面に激突した。

有太「へへっ、どうだ!」

靈夢「油断してたわ…むう…」スツ

フワッ

起き上がった初代はすぐ空中に戻ってきた。

靈夢「次は当たらないわよ。靈拳〈夢想正拳〉」ギユン

パンチか…!

有太「覇符〈天空掌〉」ヒユン

…ドゴオオオ!

俺と初代の拳がぶつかり、衝撃波が生まれる。

萃香「おお〜！」ゴクゴク

霊夢「…強いわね」

ルミア「いけいけ有太〜！」

有太「ラツシユの速さ比べをしようか？」

（元ネタはジョジョ3部。ソレを少し弄った）

霊夢「…フツ、いいわよ。ハアツ！」シユツ

有太「オラア！」ドゴツ

…行くぜ！

有太「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ！」
霊夢「せいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいイッ！」
ドゴドゴドゴツ！

有太（ツ、やっぱり一撃一撃が重いな。そろそろ隙を突きたいな…）

霊夢（絶対どこかで不意打ちをしてくるわね、気を付けないと…）

…どうやら俺の行動は読まれてるようだ。

だが…流石に”コレ”にはアンタも気付かないだろうさ。

有太「時空へ時空停止」。パチン

…ギユワンッ!

俺を中心に強い衝撃が走り、時間軸全てが止まる。

有太「さてと…集中攻撃だぜ。

炎符へヘルフレイム」

落符へ天空落とし」

幽符へアストラルビット」

桜符へ炎天桜舞」

…オーケーだ。

有太「時間軸は動き出す…!」

…ギユワンッ!

霊夢「…なっ!?!」

シユバババツ!

突然現れた(初代にとって)弾幕が初代を襲う。

霊夢「くっ…能力発動!」バツ

…スウツ

有太「…その手があつたか」

まさかこのタイミングで使うとはな…

だいぶ強すぎる初代さん③

♪ M U L A ス ト ー リ ー — G O D A p p l e ! ?

side 火野有太

まさかこのタイミングで使うとはな…

有太「アンタの能力は”浮く”ことだろ？」

靈夢「その通り。『あらゆるものから浮く程度の能力』よ」

まあ、正確には次元から浮いてるだけで、時間停止でもすると攻撃は当たるがな。

靈夢「そろそろ本気でいくわよ。神技〈八方鬼縛陣〉 シュバツ

…ドガアアン！

有太「うおっ…」 サツ

こりやマジで本気のような…

有太「なら俺も本気でいかせてもらうぞ。獄炎〈ビッグバン・ヘルフレイム〉 スツ

ゴオオオオ…ッ！

数万度の火球を飛ばす。

靈夢「神符〈真・夢想封印〉」 ギュン

ドゴオオオ!

強化版夢想封印で応戦する初代。

霊夢「…ハアッ！」ドッ

バァン!

有太「ッ!?!」

俺の技がかき消され、初代の弾幕が襲い掛かる。

有太「赤手へ神ゴッドハンドX」…ハアッ!」ガシッ

シユウウウ…

最終強化したゴッドハンドXでなんとか止める。

有太(俺のパワーは50億:俺が元いた世界と同じくらいなら初代のパワーは190

億ぐらいだろうな…)

ちなみにゆかりんのパワーは40億前後、ヘカさんのパワーは”1人で”80億だ。

霊夢「何じつとしてるの?神技へ八方龍殺陣」ギユン

有太「(来る…!)」覇符へ天空掌」ズガァン

地面に向かって掌底を放ち、衝撃を与える。

有太「防御火桜!」ピキッ

そして防御する。すると…

…ドガアアーン!

有太「…よし」

地面に与えた衝撃と防御のおかげで初代の技の威力をだいぶ抑えることができた。

靈夢「へえ…考えるわね」

有太「戦闘には頭を使う場面もあるんだぜ。落符へ宇宙ドロップ」ドゴツ
ギョオオオ…!

初代に向かって銀河が降ってくる。

靈夢「610重結界!」ピキイン!

有太「ハア!」

シュウウウ…

俺の技は防がれてしまった。

…というか。

有太「明らかに靈力の無駄だろ…」

靈夢「ちよつとふざけてしまったわ」

あんなスピードで610枚も結界を張るのを「ちよつとで済ませるなよ…

…てか、タイミング的にコレがいいな。

有太「なあ初代、提案がある」

靈夢「言ってみなさい」

有太「次の攻撃で、最後にしないか？」

靈夢「…フツ、いいわよ。お互いラストワードでやりあいましょう」
ラストワードか…

俺、この技実戦で使ったことがないんだが…やってみるか。

靈夢「いくわよ…ラストワード〈夢想天生〉」カッ

コオオオオ…！

初代は不思議な光に包まれた。

普段はあの状態だと一切の攻撃を通さないが…

コイツは通る。

有太「くらいな…ラストワード

〈終炎の火桜〉

…オラア！」

シユバババツ…！

数えきれない量の火桜に視界は満たされた。

知…ってる天井だ

side 火野有太

……ん。

布団の中で目が覚める。

有太「知ってる天井だ…俺、負けたのか」

どうやら技の途中で気絶したようだ。

あの技は未完成だしな…

サツ

襖が開く。

ルーミア「あ、起きたのだ！」

有太「負けちまったよ。スマンなルーミア」

ルーミア「負けたのは残念だったけど…ソレでも有太はカツコよかったのだ！」

有太「そうか。ありがとな」

スタスタ

霊夢「あら、起きたのね」

有太「初代か。俺はいつ気絶したんだ？」

靈夢「ラストワードを発動して…15分ぐらいした後かしら？」

有太「…Oh」

15分も最終奥義を発動してたのかよ…そりや気絶するわな。

靈夢「私も下手したら負けてたわよ？何よあの規格外な技」

有太「姉さんが編み出した技だ。万全な状態でやると…そうだな、異空間1つ消し飛ぶ威力だ」

ルーミア「（。D。）」

靈夢「…さっきのは威力を抑えてたって事？」

有太「15分も出せたんだ、そりやあ抑えてるだろ」

靈夢（ヤバっ、弹幕ごっこじゃなかったら多分負けるわ）

有太「ま、万全な状態で使う事はほほないだらうけどな」

靈夢「あつたら逆に怖いわよ、そんなバケモン技を使うタイミングなんて」

布団から起き上がり、縁側に出てみると…

有太「…Oh my god」

そこには綺麗な火桜の木が：

霊夢「アンタが技を使った後あの木が何処からともなく生えてきたんだけど」

有太「技の副作用でああなるの、忘れてたぜ…」

霊夢「今秋なんだけど？季節外れにも程があるわ」

有太「安心しろ霊夢、火桜は年中咲いてる」

霊夢「…動かしてくれない？」

有太「はいはい」スタスタ

火桜の木の前まで移動する。

有太「スマンな火桜、ちよつと動かすぜ」スツ

俺は木に手を当て：

有太「転送！」ギユン

シュッ

木を丸ごと転送した。

霊夢「…何処に転送したの？」

有太「赤い場所だ」

霊夢「ああ…」

その頃。

シュツ

美鈴「どこからともなく木が!？」

門番は突然現れた木に驚いていた。

有太「視線を感じる」

霊夢「…誰もいないわよ？」

有太「いいや、絶対いるな」スツ

スパッ

俺は空間を開き…

有太「出てこいゆかりん！」グイッ

「きゃっ!?!」

ドサッ

34 話越しのデジャブだな（メタい!）

紫「いきなり引つ張り出さないでよ！驚いちやうじやない!」

有太「ゴメンゴメン。んで、さっきからなんで俺らを見てたんだ？」

紫「…ちよつと話があるの」

真面目な顔になる紫。

…なるほどな。

有太「分かった。霊夢、また後でな」

霊夢「ええ…」

スルッ

俺と紫はスキマの空間に移動した。

やつと動き出す物語

side 火野有太

スキマの中の異空間に入り、そこで紫と話をすることになった。

紫「…見せた方が速いわね。こんなモノがあつたの」スツ

紫が出したのは…赤い骨。

魔力と少しの神力を放っている。

アイツか…

紫「貴方の話によると、この骨が突き刺さつてたらとあるヤツが来る…のよね？」

有太「ああ、印としてそうしてくれて頼んだからな」

パワーはアイツが圧倒的に上だが、翻弄するぐらいの実力が俺にはある。

もちろん、弾幕ごっこなんてヤワなモンじゃない。

紫「具体的にいつ来るの？結果が緩むかもしれ「そんな事はないな」…えっ？」

有太「アイツは平行世界から直接この空間に入ってくるからな。俺と同じだ。後来るのは明日だな」

紫「そう…」

有太「まあ、あくまでもアイツが来るのは同盟つつか、そんな感じだ。実はな……」
俺が来た本当の目的と、ソレに至った過程を紫に話す。

話し終わつた後、紫は少し納得いかない顔をしていた。

紫「その準備に貴方の世界で14年もいるの？」

有太「そうだ。コイツはガチの前代未聞だからな……」

紫「いまだに貴方の話を完全に信じ切れないのだけど」

有太「ソレはしやあない。ただ……準備しなかつたらこの世界も俺達の世界も消し飛ばさ
だろ」

紫「……………」

有太「この話は隠岐奈にも話しておくべきだな」

紫「……そうね」

少しシリアスな話は終わり、俺は家に帰ってルーミアに音ゲーを教えていた。

ルーミア「……あつ、体力切れなのだ」

有太「最初はそんなモンだ。練習すれば……」スツ

俺がよくやる譜面を始める。

有太「…こんな事もできるようになるぞ」 トンツ
ドドドドドドドドドド!

超素早い動きで譜面を叩く。

ちなみに俺は2本指タイプだ。

ルーミア「おお…!」(。D。)

有太「ココはフリック、からの連打…」 トンツ

シヤツシヤツ!

2分後、画面にはオールブリアントが表示された。

有太「どうだあ?」 ドヤア

ルーミア「流石なのだ!」

有太「お前も練習すりやこうなるぞ。能力や体を鍛える時と同じだ」

ルーミア「例えが戦闘狂なのだ…」

有太「しようがねえだろ、マリオ家は全員戦いばかりだ」

ルーミア「そーなのかー」

…コイツ絶対このタイピングでソレを言ったのはわざとだろ。

有太「…おっと、そろそろ時間だし飯にするか。何食べたい?」

ルーミア「有太の料理なら何でもいいのだ!」

ソレ、一番反応に困るヤツじゃねーか…
…ま、いつか。

美味しくいただいた

side 火野有太

有太「ほれ、今夜はラーメンだ」

偶々ケーティが勝つてた豚骨ラーメンのパック（インスタントではない）が3人分あった。

スタスタ

ケーティ「あら、今夜食べるの？」

有太「おう」

ルーミア「美味しそうなのだ」

有太「んじやつ」

3人『いただきます』

ズズツ

3人『…ツ！』

ルーミア「美味しいのだ！」

ケーティ「美味しい！」

有太「…ん、美味しい！」

流石。パツクだ！

(お前の料理じゃないのかよ)

そしてを美味しくいただいたとき(意味浅)

数時間後。

俺は寝ることにした。

有太「っし、ルーミア寝るぞ」

ルーミア「……！」タタツ

有太「どうし「んっ！」んむっ!？」チュツ

今起こった事をありのままに話すぜ…

俺は突然、ルーミアに抱き着かれキスをされたんだ！

(ポルナレフか！)

ルーミア「ん、むっ、んむう…」

や、やめろお、舌を絡めるなあ〜！

ドサツ

ついでにベッドに押し倒される。

ルーミア「ぷはっ…フフツ♡」トロン

ルーミアの蕩けた顔を見て、俺の理性は速攻で崩壊した。

(早っ!?)

…ああ、もうどうにでもなれ。

ルーミア「有太…きやつ!」ドサツ

有太「……………」

ルーミアを仰向けにし、押し倒す。

有太「ルーミア…初めて会った時、お前は俺を食べたよな?」

ルーミア「…う、うん」

有太「今度は…俺がお前を食べる番だ」

ルーミア「んっ…♡」

そして美味しくいただいたとき(意味深)

チュンチュン…

有太「…ヤっちゃまった」

コレが朝チユンってヤツか…
隣を見ると。

ルーミア「…あんつ、そこは…あつ♡」

…夢の中でも致しているようだ。

有太「それにしても…」

ルーミアのおっぱい、柔らかかったな…

(賢者モードじゃないのかよ)

有太「着替えるか」

―数分後―

いつもの服(綺麗なもの)に着替え、1階に降りる。

有太「ん、おはようケーティ」

ケーティ「………兄さん」

…おい待てまさか。

ケーティ「…次は防音を、ね？」

有太「ス、スマン…」

でもよお、突然ルーミアにディープキスされたんだぜ？

しかもその直後にルーミアの蕩けた顔を見たんだぞ？

理性なんてあっさり崩壊しちゃったわ！

(普段はクソ強い理性なのに?)

ケーティ「…まあいいわ。とつとと朝飯作って」

有太「お、おう…」

辛辣な言い方だなおい…

昨夜うるさかった俺も悪いけどよ。

スタスタ

ルーミア「おはようなのだ、ケーティ」

ケーティ「……………」じー

ルーミア「…どうしたのだ？」

ケーティ「気持ちよかったようね？」

ルーミア「…へ？」

ケーティ「音、大きかったわよ？」

ルーミア「」

バグったスケルトン

side 火野有太

さて、朝飯も食べ終わったが…

有太「そろそろ行くか」

ルーミア「何処に行くのだ？」

有太「ちよつとした用事だ。すぐ戻ってくる」

ルーミア「分かったのだ。……腰痛い」

有太「……スマン」

ケーティ「……」ニヤニヤ

何故か俺の妹がニヤニヤしながらこつちを見てるんだが…

有太「…何だ？」

ケーティ「激しかったようね」ニヤニヤ

有太「うっせ。お前は嫁と百合百合してる。じゃあな」スタスタ

ガチャツ

ケーティ「…は!?よ、嫁なんていないわよ!」

ルーミア（すぐ正気を失ったのだ…）

ヤツの気配を探りながら移動する。

…ココらへんだな。

有太「よう、いるんだろ？」

すると…

ビリッ

空間に裂け目ができ、そこから黒いスケルトンが現れた。

（つまり黒いサンズ）

「割と早いじゃねえか」

有太「割とって何だ、割りとって。…まあいい。何があつたんだ、エラー」

コイツはエラーサンズ、平行世界の破壊者のなヤツだ。

…まあ、根は悪くないヤツだが。

エラー「インクの野郎をつけてたんだが、アイツがとある世界線の創造者に干渉してんだ」

インクサンズは、平行世界の守護者のなヤツだ。

…しかし、本来は無感情だったりする。何回か会ったことがあるが何考えてるか分からない。

有太「…ほう？」

エラー「確か名前は…Xガスターだな。どうやらソイツに干渉してから数年経っているらしい」

(Xガスターについては、YouTubeでアンダーベースと調べれば出てくるよ)

有太「ココまでは普通だな…で？そのXガスターってヤツに何かがあるんだろ？」

エラー「まあな…ソイツはとんでもねえ完璧主義者だな。リセットを超えた能力、『上書き』で世界線を弄りまくってんだ」

…上書き？

有太「何だソレ？」

エラー「リセットより確実に世界線を変えられるらしい。ソレのせいであっちのフリスクとキヤラが苦しんでるようだぜ」

有太「…なるほどな。んで？今はまだ俺らから干渉はできないんだろ？」

エラー「その通りだ。俺としてはただ不可侵を破棄してるインクが気に食わねえだけだが…お前はヤツらを助けたいハズだろ？」

有太「…ああ」

エラー「ま、俺が話したい内容はソレだけだ。…くれぐれも世界線に干渉しすぎるなよ、お前の姉の行動で腹痛が止まらねえんだ」

有太「分かった。…姉さんのヤツは諦めてくれ」

エラー「……………」

有太「そんじゃ、またな」

スタスタ

エラー（弟のアイツですら止められねえのかよ…）

違和感

side 火野有太

シュツ

エラー「待て」

有太「？」

エラー「俺達のは別で平行世界から来たヤツの気配を確認した」

有太「…ほう？」

エラー「ま、お前も違和感に気付くだろうさ。じゃあな」スツ

ビリッ

……。

有太「…帰るか」

エラーとの話も終わり、帰路についたが…

有太「…明らかに空気がおかしいな」

エラーが言ってた事がコレか。

有太「急いで帰るか」

シユツ

ー自宅ー

シユツ

ケーティ「…兄さん」

有太「ああ…」

2人『異変だ』

ルーミア「…ええっ？」

有太「外の空気に違和感があるんだよ」

ルーミア「…言われてみれば、そんな気がするのだ」

ルーミアは言われて気付いたようだ。

…まあ、パワーは賢者の一歩前だししよがない部分もあるだろうな。

有太「恐らく紫は気付いて「ええ」…だよな」

目の前にスキマが現れ、そこから紫が出てきた。

紫「貴方が話していた相手…エラーとは別の人物が幻想郷に侵入したわ」

有太「何処にいるんだ？」

紫「…ごめんなさい、私も気付いたばかりだから何処にいるのかは分からないの」

有太「まあ流石にそうか。俺が探してやるよ…」スツ

そつと目を瞑り、心を落ち着かせる。

有太「空間把握！」ギユン！

幻想郷内の気配を一気に探る。

ただ、広い範囲でやるのは体力が削られるので、平行世界のエネルギーを持った人物のみ探知する。

有太「……………」

……………！

有太「…見つけたぞ」

紫「何処にいるの？」

有太「妖怪の山だ。ただ、隠れているのか誰にも見つからないようだ」

紫「今すぐ観察「やめとけ、少なくともお前1人は」…?」

有太「エネルギーの反応からして確実に敵だ。賢者のお前が1人で行ってそこで何かあったら幻想郷の均衡が崩れる…だから、俺も行く」

紫「…分かったわ」

有太「お前らは？」

2人『付いていく』

…だろうな。

まあ2人とも紫よりほんのちよつと弱い程度だし、俺がいるからには何も起きさせない。

有太「んじゃ行くぞ」

靈夢「…靈夢」

靈夢「？」

靈夢「アンタ、何か『違和感』を感じるかしら？」

靈夢「違和感?…いや、何も」

靈夢「そう…(そうやら賢者レベルじゃないと気付かないようね)ちよつと出かけるわ」スツ

靈夢「分かったわ」

フワツ

「……………」

「この世界…！」

「色んな所にEXPがある…！」

「コレでもっと手に入る…！」

「もっとLOVEが手に入る…！」

殺妖人

side 火野有太

ヒュウウン…

辺りを警戒しながら空を飛ぶ。

ルーミア「地面に何かがあるのだ！」

ケーティ「アレは…塵？」

紫「何故そんな所に…まさか」

ケーティ「？」

有太「妖怪の死体だろうな」

妖怪は死んで数分経つと塵になる。

ちなみにモンスターは死んだ瞬間だ。

紫「一体誰が…」

有太「…進むぞ」

ヒュウウン

side 博麗靈夢

靈夢 「コレは…」

私が見たものは…塵の山だった。

靈夢 「大量の妖怪が殺されている…異変確定ね」

靈夢も連れてきた方が良かったのかもしれない。

…恐らく有太達も動いてるわね、気配を感じるし。

靈夢 「…はあ、久々の異変解決だし警戒しないとね」フワツ

妖怪の山。

そこで、白狼天狗の集団と1人の少女が交戦していた。

辺りは血の匂いで充満している。

「グハツ…貴様…何者だ…!」

「お前に言う必要なんてない」スツ

…ズバツ!

「ガツ…」バタン

権「ッ、貴様仲間を……！」ギユン
ドッ！

「……………」ニタア

少女は不気味な笑みを浮かべる。

権「ハアッ！」シヤッ

「遅い」シユッ

…ガキイン！

権「なっ……」

刀は弾かれ、地面に落ちた。

権（しまった、武器がー）

「死ね」ドッ

……ビュン！

少女が権を殺そうとした瞬間、辺りに突風が発生し、弾幕が飛んできた。

「チッ」サッ

スタッ

「大丈夫ですか、権!？」

「何ですか、この死体の数……」

椛「文様…守矢の巫女…」

来たのは椛の上司の烏天狗、射命丸文と守矢の巫女、東風谷早苗だった。

「…あら、少し多めにEXPが貰えそうな相手が来たわね」

早苗「EXP…?（経験値?ゲームのような話ですね…）」

文「妖怪の山に何しに来た」

新聞記者ではなく天狗として、文は少女を威圧しながら質問した。

「何しに?ああ、カンタンな事よ」スッ

少女はナイフを構える。

「お前達を殺してEXPを貰いに来た」

ヴアアアツ…!

言葉にできない叫び声が響きわたる。

早苗「コイツは…!?（いや、ゲームのキャラクターですよ!?ありえない…!）」

ドッ!

「FIGHT」シャッ

ズバツ!

文「ツ…!」サッ

文は辛うじて攻撃を避けた。

文（何よこのスピード!? 幻想郷最速と名高い私が辛うじて避けるレベルって…!）

早苗「秘術〈グレイソーマタージ〉ギョーン!

弾幕を飛ばす早苗。

「…フン」シヤッ

フツ…

しかし少女はソレを全てかき消した。

ナイフのたったの一太刀で。

早苗「なっ…（もう間違いないです、コイツは…!）」

「死ね」シヤッ

…ズバツ!

ダメージ：99999999

残りHP：1

文「ガフツ…!」ヨロツ

攻撃を受けてしまった文は、致命傷を負った。

「トドメだ」シユツ

文「（ああ、私、殺されるのね…）『ガキイ！』えっ…？」

文に振りかざされたナイフは、いつの間にか宙を舞い、地面に突き刺さっていた。

「…お前か」

「スマン、遅れた」

早苗「…有太さん！」

side 火野有太

有太「よう早苗。…ケーティ、文の回復を頼む」

ケーティ「ええ」

…さて。

有太「よう、始めましたか？ 平行世界のキャラ」

キャラ「……………」

容赦なし

side 火野有太

有太「よう、始めましてか？ 平行世界のキャラ」

キャラ「……………」

早苗（やつぱりキャラだったんですね。有太さんとは別の平行世界から来たんですか）

キャラはこつちを見る。

ただ、早苗達の時のように殺戮的な笑みを浮かべず…

キャラ「どうしてお前が…ッ」キッ

殺意マシマシでにらみつけてきた。

紫「幻想郷の賢者として質問するわ。貴女の目的は？」

キャラ「お前達を殺して E X P を貰いに来た」

＞

紫「E X P …なるほど」

少し前紫に説明してたので、すぐ理解したようだ。

紫「ならば…追放するまで」ギユン

有太「紫、お前は援護を頼む。ルーミア」

ルーミア「？」

有太「今すぐE Xになれ。紫同様援護を頼む」

ルーミア「…分かったのだ」ゴオツ

そしてルーミアは姿を変えた。

早苗「!?（へ、変身してお姉さんになった!?）（。 ㊦。）」

有太「……………」チラッ

後ろをそつと見る。

文「ツ…ケホッ」

椀「文様…」

ケーティ「心配しないで、私が回復させてるから」ギユウウン

…大丈夫そうだな。

キャラ「お前は本気で殺す」ギユン

ゴオオオオオ…

血のように赤黒いナイフがキャラの手の中に現れる。

有太「…行くぞ」スッ

俺はハイペリオンを出し…

有太「斬ッ！」ドッ

突撃した。

キーン！

ナイフと剣がぶつかり合う。

キャラ「…||>」ニタア

どうやら隙を見つけたようだ。

…まあ、そんなモンはないが。

有太「ツ、ドラア！」ドゴオ！

キャラ「!?」グラッ

俺はいきなり力を入れてナイフを押し切り、キャラの体勢を崩す。

そして足に火を纏い、宙返りをし…

有太「烈焼脚」シャッ

…ドゴオ！

キャラの腹に思いつきりかかと落としをした。

キャラ「ガハッ…！」

ケーティ（うわあ、鬼畜ね…）

紫（私の援護、必要かしら？）

有太「どうした？まだ1割も力を出してないだろ？」スツ
剣を構える。

キャラ「流石にバレたか」スツ

…恐らくキャラは隙をついて攻撃してくる。

ならば…

有太（ルーミア、聞こえるか？）

ルーミア（…有太？）

有太（今、声を直接脳内に転送している。キャラが隙を出した瞬間、紫が廃電車を落とすだろうからソレと同時に急所狙いで攻撃しろ）

ルーミア（分かったのだ）

…よし。

ギユン

有太「炎天桜舞！」BLOOM！

明らかに避けられない弾幕を飛ばす。

キャラ「フン、こんなもの！」ズバツ

フツ…

有太「チッ」

まあいい、コレは隙を作るためだ。

紫（今よ！）スウツ

キャラの真後ろにスキマが開く。

キャラ「…！」サツ

…グシャッ！

有太「避けられたか…（今だ、ルーミア！）」

ルーミア（了解！）

キャラ「フン、そんな策が私に通用するとも？」

有太「思うさ。なんせ…」

…ザクッ！

キャラ「ガアッ…!？」

有太「お前が今その”策”にかかってるんだからな？」

罪のないヤツらを大量に殺したクズなんか…

有太「俺は容赦しないぞ」

ルーミア（さ、流石に容赦しなさすぎなのだ…）

…ひよこっ

靈夢（私、出るタイミングミスったわね）

：初代が木の裏に隠れてるのはもちろん気付いてた。
キャラは気付いてないようなので放置だな。

割と頭を使っている戦い

side 火野有太

キャラ「ツッ……（このままでは私が一方的にやられる読者的に美味しくない展開になつてしまう……!）」

……こんな戦闘中に何メタい事考えてるんだ？

スツ

ルーミア「……食べ物？」

キャラ「あむっ……」パクツ

ポワン

有太「回復したか」

キャラ「死んでも復活できるが、痛いのは嫌だ」スツ

再びナイフを構えるキャラ。

有太「痛いのが嫌、か」シュツ

動きやすくする為にハイペリオンを異空間に収納する。

有太「じゃあEXPなんて溜めてるんじゃないやねえよ」

キャラ「断る！」

ドツ！

圧倒的スピードで突撃してきた。

有太「ツ…」サツ

反射で避ける。しかし…

キャラ「…！！」ニタア

まるでソレを予測していたかのように、キャラはナイフを俺に向けて振り下ろした。

…ズバツ！

有太「グツ…」

腕に斬り傷ができる。

ルーミア「有太！」

まずはキャラの動きを止めるべきだな。

有太「クソツ、敵が本気を出した途端にこうかよ…（問題ねえよルーミア。アイツの動きを止めるから闇で攻撃をしてくれ）」ボツ

ブラフで油断したような態度をとる。

キャラ「！」ダツ

予想通りキャラの攻撃が来た。

有太「(来る……) アストラルビット！」 シュバツ！
紫色の弾幕を放つ。

キャラ「邪魔だ！」 シャツ！

有太「全部かき消せると思うなよ！ フレイムバレット！」 ダンツ！
少しでも動きを遅くするんだ！

有太「ヘルフレイム！」 ゴオツ！

キャラ「チツ……！」 サツ

ルーミア「(今なのだ！) ナイトバード！」 ギュン

……ゴオツ！

闇の鳥がキャラの至近距離に現れ、ぶつかつた。

キャラ「グワツ (この闇……あの人食い妖怪か) 先にお前を殺す！」 ドツ！

ルーミア「!？」

ギュワンツ！

有太「させねえよ！」

時空停止でルーミアの前まで移動した。

(時間停止だとキャラは行動可能だから)

キャラ「どけ！」 シャツ

有太「どくワケねえだろ。炎天掌！」ズガァン！
ガキーン！

キヤラのナイフを弾く。

有太「紫！」

紫「ええ！」スウツ

ルーミア「うわっ!？」

ルーミアはスキマの中に引つ張られた。

コレで攻撃されることはない。

キヤラ「せっかくのEXPだったのに。逃がすな！」

有太「EXPなんて溜めて、どうするつもりだ？」

キヤラ「お前には関係ない……！」ギョーン

シュバツ！

キヤラの頭上に赤黒いナイフが何本も現れる。

今度は近距離じゃなくて遠距離スタイルか？

キヤラ「串刺しにしてやる！」

有太「……ハッ」

そんなセリフ、鼻で笑ってやるぜ。

有太「やれるモンなら……」ギユン
拳に神力を纏う。

有太「……やってみやがれ！」

ドゴドゴドゴツ！

全部弾いてやらあ！

キヤラに語彙力はあるのか？

side 八雲紫

スキマにルーミアを引きずり込み、スキマを閉める。

ルーミア「いきなり何するのだ！」

紫「貴女が傷ついたら有太が悲しむでしょう？」

ルーミア「そ、そうだけど……」

スウツ

ルーミアが照れているのを無視してスキマを開く。

ケーティ「あら、入ればいいの？」

紫「ええ」

文「……………」

椀「し、失礼します」

早苗（スキマってこんな空間なんですわね…目がギョロギョロ動いてる…）

紫「有太も恐らく予想している、作戦を伝えるわよ」

ルーミア「…作戦？」

ケーティ「兄さんも予想してるって…思考でも読まれたの？」

紫「いえ。彼の頭の良さは妹である貴女ならよく分かっているハズよ？」

ケーティ「…ソレもそうね」

紫「作戦はこうよ…」

side 火野有太

キャラのナイフ弾幕を全部弾いた時には、文達もスキマの中へ入っていた。今頃、スキマ空間で紫が作戦でも伝えているのだろう。

あの短時間でキャラの戦闘スタイルを見極めたのか？だとしたら凄いな。

キャラ「…チツ、殺しかけてたヤツまで」

有太「よかったな、コレで一对一だぞ？」

キャラ「お前と戦闘なんてちつとも嬉しくない。さっさと死ね」ギョーン

ドツ！

有太（コイツに会ってから『死ね』とか『殺す』とか何回言ったんだ？）

…んな事どうでもいいか。

有太「結界」ピキッ

キャラ「無駄だ！」ズバツ
パリン！

結界はあっさり破られた。
たつた一太刀で。

有太「（攻撃力はエグいんだよな、コイツ）炎天桜舞！」BLOOM！
赤い桜の弾幕を放つ。

キャラ「（弾幕を消すついでに殺しにかかるか）レインオブナイフ！」ギユン
ドドドドツ！

赤黒いナイフが頭上から降り注ぐ。

…やつとまともな技を使ってきたな。

有太「ま、ケツイで出来たナイフなんてカンタンに対処できるけどな！」

結構反則技だから使うのは躊躇ってたが…しゃあない。

有太「いくぜ…吸収！」ギュルルル！

俺の手から赤い渦巻きが発生し、赤黒いナイフをエネルギーに変え吸収していく。

シユウウウ…

キャラ「!?」

有太「もう俺には物理攻撃しか効かないぜ！」バアン！

そしてこの決まり文句を言う。

(MULAでは毎回言ってる)

キャラ(つまり本物のナイフじゃないと聞かないのか…?)

…一応言っておこう。

もちろん吸収はエネルギー攻撃を完全無効にする無敵技ではない。

当たり前だが許容範囲もある。

さつきので許容範囲の2割ぐらい吸収した。

有太(この技、使うタイミングも考えないと…)

クソ野郎

side 火野有太

キャラ（吸収か。厄介だ…）スツ

キャラは本物のナイフを取り出す。

有太「おっと、エネルギー攻撃じゃないからって俺が倒せると思うなよ？（煽り）」

キャラを煽り、集中力を削がせる。

キャラ「うるさい！」ドツ

ズバツ！

有太「おっと、そうは問屋が卸早苗」サツ

サンズみたいなセリフを言いながらナイフを避ける。

キャラ「（あのクソ骨のマネか）レインオブナイフ！」シャキン

シユバツ！

ナイフの雨が降ってくる。

…おいおい。

有太「どうやってこの数のナイフ持ち歩いてんだよ…」

…今考えても無駄か。

ボツ！

足に火を纏う。

有太「ブレイズスクリュー！」ドゴツ

ゴオオオオ！

キヤラ「！（燃やす気か！）…させない！」スツ

シヤツ！

俺の思惑に気付いたのか、キヤラはさらにナイフを投げてきた。

咲夜かよ…

有太「時空停止！」

ギユワンツ！

時でも止めないと絶対避けることができな密度だったので止めた。

有太「ナイフを避けるついでに…」ササツ

一旦縛るか。

すぐ破られるのは目に見えてるが、2秒ぐらいの隙ができる。

ぐるぐる…

エネルギーで縄を作り、キヤラを縛る。

有太「よし、オーケー。時間軸は動き出す…」
ギユワンツ!

キャラ「…ツ！」ギギツ

気付いたら縄で縛られていたと気付くキャラ。

有太（…ハッ!）ギユン

キャラ「アアア！」ビリッ

うおっ、馬鹿力で破りやがった…

有太「だが隙はできた!くらえ!」

ギユイイン!

キャラ「!?(いつのまに溜めやがった!?)」

…ズドツ!

有太「滅焼脚!」バゴオ!

キャラ「グフツ…!」ヒユン

ドゴオ!

技はキャラの鳩尾にクリーンヒットし、キャラは地面に激突した。

霊夢（ええっ!?!強ッ!）

（コイツまだ隠れてる）

紫「…作戦は以上よ」

ルーミア「……………」

早苗「そんな作戦でいいんですか…?」

ケーティ「私がいいと思うわよ?」

椀「ええっ!?!」

ルーミア「確かに…その作戦なら有太の補助ができるのだ」

早苗「マジですか…」

紫「とにかく、さっき言った作戦でいくわよ。有太は今の所善戦しているけれど相手の力はまだ未知数、油断できないわ」

キャラ「グツ、このクソ野郎が…!」

特大ブーメランを投げるキャラ。

有太「クソ野郎はお前だ、鏡見ろ」

クソ野郎以下のヤツにクソ野郎と呼ばれる筋合いはない。

キャラ「こうなったら……」スツ
また食べ物か。

ソレはさせねえぞ？

有太「転送火桜」パチン

シュツ

キャラ「……ゴホツ!？」

キャラの口から出たのは……泥。

俺が食べようとしていたものと入れ替えた。

(やっつてる……ことがクソ野郎じゃねーか)

有太「相手に回復するヒマを与える気はないのでな」

キャラ「……」

殺意の透明人間

side 火野有太

キャラ「……………」ゴゴゴ

有太「…？」

さつきからキャラが一寸も動かず黙っている。

正直嫌な予感しかない。

有太（覚醒でもするんだろうな…）スツ

一旦距離を「誰が逃げていいと言った？」…！

有太「やつと喋ったか」

見ると顔に影がかかっており、目が赤く光っている。

しかも口は綺麗な三日月に…怖いなおい。

その状態…K（狂気）キャラと名付けておくか。

Kキャラ「この力、使わなくてもいいと思つたのに…フフツツ」スツ
いつも通りナイフを出してきた。

色も同じく赤黒い。

有太「最初から使わないから俺がお前に何発も攻撃を当ててるんだぜ……ん？」
目の前にキャラはいなかった。

…後ろにも心配がない。

有太「何処だ「ココだ」ツ!?」サツ

いたのは頭上だった。

危ねえ…

Kキャラ「ヴアアアア！」シャツ

悲鳴なのかよく分からない発狂をしたキャラは、ナイフをブンブン振り回しながら弾幕を放ってくる。

もちろんナイフも弾幕も殺意マシマシだ。

…弾幕はコレで一旦消し去るか。

有太「ヘルフレイム！」ゴオオオオオ!

本来のサイズの火球を投げる。

Kキャラ「！」スツ

しかしソレに気付いたキャラは…

ズバツ!

火球を真つ二つに斬った。

有太「…チッ」

さつきと比べてスピードも増してやがる…

Kキャラ「フフフ…アレ？さつきまでの煽りはどうしたのかなあ？」ニコニコ
そんな邪悪な笑みで言われてもな…

有太「今のお前じゃ煽りは効かないだろうな…炎天掌！」ズガアン！

Kキャラ「遅い♪」サッ

あつさり避けられる。

速いっつーの…

Kキャラ「…さて、と。もつといたぶつてあげるⅡ>」

ヴアアアア！

キャラは再びあの意味不明な発狂をし、今度はナイフを大量に飛ばしてきた。

…しかも。

ギユイイン！

有太「…ツ!？」ダッ

ドガアアン！

爆発するハート形弾幕も放ってきた。

こりや厄介だ…

有太（しばらく防戦、いや避戦一方になっちまうぜ…）
その時だった。

…ジジッ

ケーティ（兄さん、聞こえるでしょ？）

ケーティが脳内電話をしてきた。

有太（ああ…文の治療は終わったのか？）

ナイフやハート形弾幕を避けながらケーティと脳内電話をする。

ケーティ（ええ、今は安静にしてるわ。それより…紫がとある作戦を立てたの）

有太（教えてくれ）

ケーティ（…紫が『有太ならすぐ気付く』とか言ってたわよ？）

有太（…マジで？）

ケーティ（マジ）

有太（そうか…ならいい。タイミングいい所で作戦を実行しろ）

ケーティ（了解）

ジジッ…

実はこの脳内電話、あの会話量でたった5秒しか経ってない。

…実際に喋ってないし、そりゃそんぐらいだろうが。

有太「…って、キャラはどk…うおっ!？」サツ
ズバツ!

脳内電話中もキャラの位置をしつかり把握してたのに…!

Kキャラ「||>」フツ…

有太「!？」

消えただと!?

有太「…ツ」サツ

よかった、殺意は感知できるようだ。

有太「……………」ゴクリ

ケーティ、作戦はできるだけ早く決行してくれよ…?

謎の2段構え

side 火野有太

有太「…！」サツ

チツ…

どこからともなく舌打ちが聞こえる。

有太「何処だ…？」

殺意は…右だ！

有太「せいっ！」ドゴツ

俺の拳は何かに当たった。

有太「ツ…」ポタツ

拳を当てたのはナイフの刃だった。

その証拠に今血が滴り落ちている。

痛えな…

Kキャラ「そろそろ死んでくれないかな？」

透明なまま、キャラはそう語りかけてきた。

有太「お前のようなヤツに…殺されてたまるかよ…！」ギユン
…そこだ！

有太「炎天掌！」ズガアン！

Kキヤラ「…ギヤツ」

掠ったか…？

…ギユン

後ろにエネルギー音だと!?

有太「危な…グワツ！」ズバツ

Kキヤラ「殺意から私を感知してたようだが、後ろからも弾幕は放てることを忘れていたようだな」

有太「クソツ…」

さっきの攻撃でダメージを食らってしまった。

有太（早くしてくれ、ケーティ！）

いつ、”タイミングいい”時になるんだ…！

ズバツ

有太「ぐう…」サツ

パアア…

キャラの斬撃を避け、回復を試みる。

Kキャラ「チツ、自己再生か」スツ
シヤツ！

また後ろから音が聞こえる。

有太「今度は、当たらねえよ…」サツ

透明人間状態のキャラに攻撃をしようとしても、近接攻撃はナイフで防御され、弾幕は斬られてオワリだろうな。

コレじゃあジリ貧だな…！

紫「3…2…1…今よ！」

ケーティ「了解！」ギユン！

ゴオツ…！

有太（どうする…？全体に攻撃するか？）

Kキャラ「？」

今キャラが何処に居るのかなんて分からねえからな…砂なんてかけてもソレごと透明になるだけだ。

Kキャラ「||」スツ

シヤツ!

有太(弾幕か!) サツ

…ん?

弾幕は俺の横をスーッと過ぎ去った。

有太「何狙って…?!」

ルーミア「………」じー

そこにはルーミアが突っ立っていた。

…いや待てよ?

ルーミア「…フツ」スウツ

弾幕がルーミアの至近距離に入った瞬間、ルーミアはスキマの中に入った。

…多分一目見るとモグラ叩きだと思うだろうな。ただアレは恐らく”2段構え”だ。

有太(流石幻想郷の賢者と俺の妹だな)

俺は回復に徹するか。

スウツ

早苗「ミラクルフルーツ！」

今度は早苗がスキマから現れ、弾幕を放ってきた。

Kキャラ「……………」シャツ

スパアン！

しかしキャラにとっては邪魔なだけだった。

有太（まあ、時間稼ぎにはなったか）

Kキャラ「||>」ドツ

…ズバツ！

早苗「ツ…」

キャラは早苗を…：斬らなかった。

いや、斬れなかった。

スーッ…

斬撃は早苗をすり抜けたのだ。

Kキャラ「な…!?!」

有太（やっぱり2段構えだったな）

スウッ

そして早苗はスキマに戻った。

K
キ
ヤ
ラ
「
す
り
抜
け
た
だ
と
…
?」

作戦成功と乱入

side 火野有太

有太「……………」ギョーン

もう少しだ。

背中を斬られたダメージはもう少しで治る。

…地味に治しにくい攻撃をしやがって。

スウツ：

ルーミア「ミッドナイトバード！」ゴオツ

シュバツ！

再びルーミアがスキマから現れる。

Kキャラ「……………」(何かのからくりがあるハズだ)「ササツ

何故かキャラは冷静に弾幕を避けている。

もう気付いたのか？ いや…流石にないだろう。

ルーミア(あれ？攻撃してこないのだ)

ケーティ「攻撃がこない？」

紫「…一旦早苗も出すわよ」

早苗「はい！」

権「私は「アンタは怪我人よ、戦闘には出せないわ」…あ、はい」

スウツ

早苗「いつけえ！」バツ

ズドドツ！

早苗も出てきた。

つまり今2人スキマから出てきていることになる。

Kキャラ「……………」ズバツ

早苗（ずっと無言…不気味ですね）

…このまま攻撃を続けてもいずれバレそうだな。

回復も済んだし…よし。

有太「ルーミア、早苗」

2人『?』

有太「スキマに戻ってくれ。作戦がバレたら戦況は相手に傾いてしまう」

ルーミア「でも、私は有太の補助を…」

有太「補助してくれるのはありがたいが…今キャラが何考えてるかが分からない。分からないが故危険だ」

ルーミア「…分かったのだ。早苗、戻るのだ」

早苗「えっと、はい」

スウツ

2人はスキマの中に戻る。

Kキャラ（あのすり抜け、恐らく誰かの能力によるものだな…） スツ

有太「…?」

ケーティ「作戦はバレてないわよね？」

ルーミア「そうなのだ」

早苗「しかしやりすぎるとバレてしまうので有太さんが戻れと」

ケーティ「うーん…」

紫「有太の補助はできたから、作戦は成功よ。今度はあの殺人鬼の隙をどう突くのか考えましよう」

ケーティ「ええ…」

文（あの時火野有太が来なかったら…）

椀（文様…？）

Kキャラ「さっきの謎攻撃は終わりか？」

やつと喋ったな。

もう800字ぐらい経ってるんだぞ？（メタい）

有太「まあな」

Kキャラ「…他のヤツらは後で殺す。先にお前だ」ギョーン

エネルギーのナイフか。

有太「もう俺の吸収のことを忘れたのか？」

Kキャラ「手の渦巻きに触れなければ問題ない…レインオブナイフ！」ドッ

シユババッ！

有太「…マジかよ」

ナイフの量が数十倍に跳ね上がっている。

どうやってあの量を瞬時に…？

有太「結界だけじゃ防ぎきれねえな…」

吸収と…攻撃で弾くか。

ギョーン！

有太「結界！吸収！炎天掌！」

ピキツ！ギョルル！ズガアン！

有太「…せいっ！」

シューウウ…

何故か語呂がいい3拍子のおかげで、バケツがひっくり返ったようなナイフの雨は止んだ。

Kキャラ（技が多彩なのが厄介だ…クソツ）スツ

…ドツ！

今度はキャラが直接攻撃してくるようだ。

隙を突かれないよう全方位気を付けないとな。

Kキャラ「ヴアアアア！」ズバツ

まあた発狂か…

有太「うるせえ！雷天落倒！」バチッ

拳骨代わりに攻撃をする。

…ズドッ！

Kキャラ「アアアッ！」キイン

有太「ぬっ!？」

ナイフで防がれてしまう。

危ねえ、ナイフの柄の部分で当たってよかったぜ…

Kキャラ「||>」シヤッ

有太「つと」サッ

油断も隙もないな……ん？

靈夢（私の出番、まだかしら？……あら？）

ドガアアン！

突然、極太光線が飛んできた。

有太「うおっ、コレは…!」

Kキャラ「…:…:…」

時は少し遡る。

有太達がキャラと戦闘をしていたその頃、博麗神社では。

霊夢「霊夢さん、何をしにいったのかしら……ん？」

ヒュウウン

魔理沙「大変だぜ、霊夢！」

魔法使いの魔理沙が焦った表情で飛んできた。

霊夢「紅魔館からヤバイ本を盗んだの？」

魔理沙「今回はソレじゃないぜ！それよりもついてきてくれ！」

霊夢「？」

―数分後―

2人の前にあるのは……塵の山。

キャラが殺した妖怪達の死骸である。

霊夢「何よ、コレ……」

誰がこんな数の妖怪を、と霊夢は驚く。

魔理沙「異変以外ありえないぜ、コレは」

霊夢「そうね……まさか霊夢さんは」

魔理沙「霊夢さんに何かあったのか？」

霊夢「違和感を感じるから出かけるって……ッ?」

霊夢は妖怪の山の方角から強い力を感知した。

魔理沙「どうした、霊夢?」

霊夢「…妖怪の山に向かうわよ」

魔理沙「お、おう…?」

ヒュウウン

―さらに数分後―

魔理沙「ッ…」

そこには哨戒天狗の死体があつた。

少し時間が経っているからか塵になりかけている。

霊夢「…アレは!」

魔理沙「アレ?……!」

死体の先を見ると、そこでは有太と…ナイフを持った少女が戦っていた。

霊夢「有太が誰かと戦ってるわね」

魔理沙「犯人は恐らくあの少女だな。…奇襲するぜ!」スツ

魔理沙はミニ八卦炉を構え…

ギューイン!

魔理沙「恋符へマスタースパーク」
ドガアアン！

極太光線を放ったのだった。

有太「うおっ、コレは……！」

「……………」

本気でいくぞ

side 火野有太

ドガアアン!

有太「うおっ、コレは……!」

魔理沙のマスターズパークじゃねえか!

アイツらも来たのか。

Kキャラ「………」

霊夢「有太!」

魔理沙「大丈夫か!」

有太「ああ、大丈夫だ…下がってる」

コイツらの力じゃ太刀打ちできない。

魔理沙「なんでだぜ?」

有太「すぐ殺され…伏せろ!」ガパッ

2人『!』

Kキャラ「||>」

有太「…お前、喋る時間もくれないのか？」

Kキャラ「大事なEXPを逃すワケにはいかない」

霊夢「EXP…？」

Kキャラ「ヴアア！」ギユン

ちよつと待てよ…！

有太「結界！」ピキツ

…パリン！

霊夢「!？」

結界が容易く割られたことで、霊夢は驚く。

有太「…とりあえず説明はスキマでだ。紫！」

スウツ

スキマが現れ、紫が中に誘導する。

紫「2人とも、入りなさい」

魔理沙「私達は戦えないのかよ!？」

有太「一旦説明してもらってからだ！」

霊夢「…分かったわ「霊夢!？」行くわよ、魔理沙」ガシツ

霊夢は魔理沙の腕を掴み、スキマの中へ入っていった。

魔理沙「ちよ、うわっ!」スウツ

有太「…よし「死ね」…ぬっ」サツ

Kキャラ「またしてもEXPを逃してしまったが、まあいい…ヤツらはいずれ再び現れるハズだ」

有太「さあ、どうだろうな?その前に俺がお前を倒してるかもしれないぞ?」

いい加減フルパワーで戦うからな。

Kキャラ「ハッ、冗談はクソ骨だけにしてほしい」

クソ骨…サンズか。

有太「ジョークはいいもんだぜ?例えば…」

お前が俺達を殺す、とかな?」ギユン

本気でいくぞ。

…ドゴオ!

side 博麗霊夢

有太が戦ってる相手はキャラといって、別世界から来たと知った。

ケーティ「…つてことよ。アンタ達じゃアイツに敵わないわ」
文「最速の私ですら回避できない攻撃です…死にかきました…」
どうやら有太達が着く前、文は死ぬ一步手前になっていたそう。
今は元氣そうだから信じ切れないけどね…

霊夢「……………」

魔理沙「ツ、でも私達は異変を「魔理沙さん」…早苗」

早苗「私達は補助役です。遠距離から狙うしかないんですよ」

ルーミア「有太を信じてほしいのだ」

魔理沙「…分かった」

有太…私達は援護するから、頼むわよ。

♪MULAストーリー―炎天桜舞V3

side 火野有太

ドゴォ!

Kキャラ「グフツ…!? (な…!?)」

気付いたら俺はすでに攻撃…右ストレートを終えていた。

攻撃はクリーンヒットし、キャラは後方に吹っ飛んでいく。

有太「……鬼畜戦法、いくぜ」シユツ

転送火桜使い、キャラの後ろに回り込む。

Kキャラ「ツ……！」キツ

咄嗟にナイフで止めようとするキャラ。

……遅い。

有太「炎天掌」ズガアン！

バキイ！

キャラのナイフを派手に割り、攻撃を当てる。

Kキャラ「がっ……！（何だ!? さっきと比べて圧倒的に強くなっている……!）」

有太「……よっ」スツ

ギユイイン！

光線で囲むか。

有太「疑似ガスターブラスター」

……ドガアアン！

Kキャラ「ヴァアアアア！」シャツ

ズバツ！

有太「チツ」

光線が斬られてしまった。

派手にぶつ放したかったのによ…

有太「ま、いいか…」

Kキャラ「レインオブナイフ！」 シャツ

シュバババツ！

まあたこの技か…

有太「炎天桜舞」 B L O O M !

シュウウウ…

ナイフを火桜で相殺した。

Kキャラ「なん、だと…」

有太「…なあ、タマシイの色が変化するのは好きか？」

Kキャラ「まさか…！」

有太「そう、俺もできるんだぜ？全部」パチン

…キーン！

キャラのタマシイが青くなる。

Kキャラ「ツ…」

有太「サイヤクな目に遭わせてやるよ」

(サングスの真似)

タマシイを操り、キャラを地面に叩きつける。

起き上がろうとしてる間に：

有太「ブレイズスクリュー」ゴオオオオ！

攻撃をする。

鬼畜？ 当たり前だろ。

Kキャラ「(クソ骨の真似をしやがって…！) ヴアアアア！」ズバツ

火の玉は斬られてしまう。

…だかな、ソレは困なんだよ。

有太「(本命はコイツだ) マリオファイナル」ゴオツ！

Kキャラ「なー」

…ズガアアン！

Kキャラ「ガハツ…」

マリオ家の奥義が炸裂する。

…俺個人の奥義じゃないけどな。

有太「どうだ？ 獲物としていたヤツに返り討ちに遭う気持ちは？」

タマシイは青いままにしておく。

解除したら絶対攻撃してくるからな。

Kキャラ「ツ…お前はやはり邪魔だ…！」

有太「だろろうな」

その為に俺はこの世界にいるんだぜ？

有太「さて、続けるぞ。天空掌」ズガアン！

Kキャラ「ッ！」サツ

有太「お…避けられると思ったか？」ゴオツ

バゴオ！

左手で火を纏ったパンチを放つ。

俺、実は両利きなんだよ。

Kキャラ「グフツ…」ヨロツ

怯んだキャラは倒れそうになる。

…もちろんそうはさせないが。

ギョーン！

タマシイを操りキャラを立たせる。

Kキャラ「この、野郎…！」

有太「休む機会なんて与えねえよ、スポーツじゃないんだしな」

Kキヤラ「離せ…！」

有太「離したら攻撃してくるだろ？」

Kキヤラ「当たり前だ…！」

うん、知ってた。

…そろそろか？ 霊夢達への説明が終わるの。

終幕

♪MULATLE—Heavenly Inferno
side 火野有太

…そろそろか？ 霊夢達への説明が終わるの。
補助してくればかなり助かる。

Kキャラ「ヴアア…アア！」バキイ！

有太「…！」

俺の制御を破ったか…面倒だ。

Kキャラ「シネエエエ！」ドッ

殺意マシマシだなおい…

有太「炎天桜舞」BLOOM！

弾幕を数十倍にした炎天桜舞を放つ。

視界が火桜だらけだ。

Kキャラ「ギヤツ…アア…ツ、ヴアア！」シャツ
怯みながらも、キャラはナイフを飛ばしてきた。

視界が埋まってるせいでブレッブブレだけだな。

有太（…あと数分か？）

俺がフルパワーで戦えるのは精々10分ぐらいだ。

だから…すぐカタをつけなきゃいけないんだが、キャラがあまりにもしぶとい。

有太（近接が一番いいなこりゃ）…ハッ！」ドッ

Kキャラ「ツ…！」ズバッ

サッ

攻撃を避けながら、俺はキャラとの距離を縮める。

…ココだ！

有太「オラア！」ドゴッ

Kキャラ「グオ…！」

顎にアツパーをくらわせた。

からの…！

ボッ

有太「炎突！」バゴオ！

かかと落とし！

Kキャラ「ガッ…！」

ドサツ

連続攻撃をくらい、キャラは倒れる。

有太「トドメだ……！」ギユン

ギユイーン！

Kキャラ「ツ、クソツ……！」

有太「疑似ガスタープラスター」おっと、ソレはさせない……ツ!？」

シユウウウ……

靈夢（誰か来た……？）

黒いローブを着た男がどこからともなく現れ、俺の疑似ガスタープラスターを消し去った。

「コイツら」が干渉している平行世界には極力行くなと言ったはずだ、キャラ

Kキャラ「知らなかったんだ……！」

有太「………」

見たところキャラの知り合いのようだ。

コイツら、というのは俺……と他に誰だ？

有太「確実にこの世界出身じゃないのは分かる……お前、何者だ」

「コイツの回収係だ……」ギユン

…逃げるつもりか！

有太「ツ、待て！」ダツ

「さくらばだ」

シュツ……

ローブの男はキャラを連れて去ってしまった…

有太「クソツ……！」

敵を逃がしちゃった……！

ザツ

霊夢「有太……」

有太「初代か…待機、ありがとな。…逃がしちゃった」

霊夢「恐らくもうこの世界線にはいないわね…」

ローブの男はキャラに俺を含むヤツらが干渉してる世界線に行くなど言っていたしな…もういないだろうし、当分は戻って来ないだろう。

スウツ

スキマが開き、中から紫達が出てきた。

紫「敵の反応が幻想郷から完全に消えたわ…それにしても霊夢、貴女いたのね」

霊夢「ええ、まあ」

初代にはどうやら俺しか気付かなかったようだ。

ルーミア「有太……？」

ケーティ「敵を逃がしてしまったのよ、絶対責任を感じてるわ」

魔理沙「私の出番、結局なかったんだぜ……」ボソッ

霊夢「あつたとしても死にかけてるわよ、私達は」ボソッ

有太「……お前ら、申し訳ない。敵を逃がしてしまった……！」サツ
謝罪として土下座をする。

早苗「有太さん!？」

ルーミア「顔を上げるのだ、有太!」

紫「有太……貴方が責任を感じる必要はないわ。貴方はこの幻想郷を崩壊の危機から救った、それだけで充分よ」

有太「だが敵は「分かっているわ。再び来たらその時対処すればいい」……」

紫「私達は決して貴方を責めないわ……むしろ感謝しているのよ?」

有太「そう、か……」

俺は顔を上げる。

有太「ありがとな、紫」

次こんな事が二度と、起こらないようにしないと……

こうして、平行世界からの刺客から俺は幻想郷を守ったのだった。

炎天桜舞を教えてやろう：姉さんが

side 火野有太

キヤラとの戦いから一週間が経った。

哨戒天狗の1割程が殺されたらしく、天狗組織は忙しそうにしていたようだ。
何故俺が知ってるのかって？

有太「ふーん…」パラッ

文々。新聞を読んだ、いや読んでいるからだ。

視点は主観的だが、内容は割と正確だから読んでいる。

ルーミア「有太、ヒマなのだ」ぐでー

有太「寺子屋の宿題をやってる」

ルーミア「もう終わってるのだ」ごろん

有太「じゃあ俺と新聞読むか？」

ルーミア「だがことわる」

…さては俺が本棚に置いてるジョジョの漫画を読んだな？

有太「ならそのままぐでつとしてろ」

ルーミア「分かったのだく」ぐでえつ

ソレでいいのかよ。

ピンポーン

…来客だ。

有太「ん、はい」スタスタ

ガチャツ

魔理沙「よう、有太」

ドアの先にいたのは魔理沙だった。

有太「どうした？」

魔理沙「ちよつと教えてほしい技があるんだぜ」

有太「技?…とりあえず入れ、牛乳出すから」

魔理沙（なんで牛乳だぜ?）

…数秒後…

ルーミア「あ、魔理沙なのだく」ぐでえい

魔理沙「よう、ルーミア」

…コトン

机に牛乳が入ったコップを2つ置く。

：俺も牛乳が飲みたくなったからだ。

有太「んで、教えてほしい技って？」

魔理沙「：名前何だっけ？」ぽかーん

有太「ズゴツ

忘れ た ん か い ！

有太「はあ：どんな感じの技だ？言ってみろ」

魔理沙「炎のドラゴンっぽいヤツがぐるぐるくってなるヤツだぜ」

炎のドラゴン？：ああ。

有太「マリオファイナルか：」

魔理沙「で、どうなんだ」「無理だな」：ええっ!?なんでだぜ!?

有太「アレは俺の家系、マリオ家の秘伝技だからだ。撃てるのは俺や姉さん、それと

姉さんの子ぐらいか？」

：うん、他に思いつかないな。

魔理沙「えっ?ケーティはお前の妹じゃないのか?」

有太「アイツは拾われたんだ。姉さんが12歳の頃だな」

(詳しくはMULA本編でどうぞ)

魔理沙「そ、そうか：」

有太「ということだな。他に教えてもらいたい技はあるか？」

魔理沙「じゃあ…炎天桜舞だぜ！」

…ほう？

有太「意外だな。『弹幕はパワーだぜ』なんて言うお前だったらヘルフレイムとかそのあたりを習得したと思っただが」

魔理沙「なんか和風？な技を知りたくてな」

有太「お前に和風は合わないだろ」

魔理沙「失礼な、私の好物は和食だぞ！」

有太「…マジで？」

魔理沙「マジだ」

有太「おう…」

じゃあ今夜はうどんにしとくか。

魔理沙「話を戻すぜ。炎天桜舞ってどうやってやるんだ？」

有太「…ちよつと待ってくれよ？」スツ

俺はタブレットを異空間から出し、とある動画を探す。

…つと、あつた。

有太「この動画を見てくれ」トンッ

魔理沙「？」

有太「姉さんが技を教えてる動画だ」

(お前は何もしないのかよ!?)

『チルノでも分かる炎天桜舞のやり方』

アルミ『どうも、アルミよ。今回は炎天桜舞のやり方を教えていくわ』

魔理沙(コイツが有太の姉か。パーカーとか似てるな)

アルミ『この技を習得する注意点。一応この技はどの属性でも集中できるけど、霊力、妖力、魔力、神力の内どれか2種類のエネルギーを持ってないとまともな威力は出せないわ』

魔理沙(私は魔力を持つてるから大丈夫だな)

アルミ『んじゃ技を教えていくわよ。まずアンタのメインのエネルギーとサブのエネルギーを、19:1で出してみなさい』ギユン

魔理沙「はあ!」(。D。!)

∴ポーズつと。

有太「どうした?」

魔理沙「魔力と霊力を19:1つて∴難しすぎだろ!」

有太「カンタンだろ、慣れれば」

魔理沙「慣れるまでがしんどいんだぜ…」

有太「…とりあえず動画を続けるぞ？」ポチッ

アルミ『出せたかしら？次に、ソレを花びらの形にしてみなさい』シユツ

魔理沙（コレは出来そうだな）

アルミ『そして後は…ソレを大量に出すだけよ！』バツ

シヤッ！

魔理沙「……………」（。D。）

アルミ『じゃあ最後に、実際の技を見せるわよ。…炎天桜舞！』BLOOM！

シユバババツ！

魔理沙（凄い…綺麗だぜ…）

アルミ『以上がやり方よ。みんなも挑戦してみなさい。それじゃ』

そして動画は終わった。

有太「どうだ？できそうか？」

魔理沙「19：1がなんとかできたらいけると思うぜ。アレは難しそうだ」

有太「19：1のやり方はな…計量カップにエネルギーを一旦ぶち込んでみる」

スタスタ

ルーミア「はい、計量カップ」スツ

魔理沙「おう、ありがとな」

…ギョーン

有太「まずは魔力だろ？赤い線を入れてるハズだ、そこまで入れてみる」

魔理沙「分かったぜ」

ギョルル…

有太「次は青線まで霊力を入れろ」

魔理沙「転換…」スッ

ギョルル…

…よし。

有太「後はソレを花びらの形にしたら、炎天桜舞の弾幕が1枚完成する」

魔理沙「…なあ」

有太「？」

魔理沙「どうやったらあんな量の弾幕を一気に出せるんだ？」

有太「…慣れ？」

魔理沙「慣れって怖いぜ……」

有太「まあそういうな。お前も慣れればいつか俺みたいになるさ」

魔理沙「…そうか」

ガタン

魔理沙「じゃ、私は特訓を頑張るぜ。じゃあな」

有太「おう、またな」

ルーミア「またなのだ」

ガチャツ

アイツが炎天桜舞を習得したら、霊夢にも一矢報いるレベルになるだろうな。

有太「…フツ」

全体が強くなったら、面白くなりそうだ。

もこたんだお！

side 火野有太

魔理沙に炎天桜舞のやり方を見せた次の日、俺は人里に来ていた。

ルーミアは寺子屋で、ケーティは別の所にいる。

有太「散歩がてら見て回るか」スタスタ

ザワザワ：

人里は活気づいていた。

平和だな：

有太「こんな平和が続けばいいんだg「キャーッ！」：もうフラグ回収したなおい」

「泥棒よ〜！」

「どけゴリアー！」ダッ

泥棒は袋を抱えており、手に包丁を持っていた。

ナイフじゃないのになんだか違和感があるな：止めるか。

ザッ

「どけえー！」

有太「俺はどかないぜ？」

「ッ、オラオラア！」 シャツ

泥棒は俺を無理やりどかさうと、包丁を振り回す。

有太「おつと……」 サツ

……包丁は折るか。

有太「フンツッ！」 ギユン

バキッ!

エネルギーを纏った拳で包丁を折った。

「!?」

周り『!?』(。D。)

有太「で、どうするんだ? 逃げてても無駄だぞ?」

「ヒ、ヒイイッ!」 ドサツ

泥棒は俺が包丁を折ったのを見た泥棒はしりもちをついていた。

有太「……あー、警備隊の人はいるか? この泥棒を捕まえてもらいたいんだが」

俺は警察だが、幻想郷は職場じゃないからな。

(後書きで説明)

「あ、はい……協力ありがとうございます……」

有太 「いえいえ……」

ぐいっ

「ほら、行くぞ！キビキビ歩け！」

「は、はいいいいい！」

泥棒は縄で縛られ、牢獄かと思われる場所へと連れていかれるのだった。

有太 「……一件落着だな」

「兄ちゃん、凄いな！」

「包丁をバキッ、てよお！」

有太 「別に大したことじゃないですよ。あと兄ちゃんじゃないんで」

てか、78歳（外見30代前半）の何処が兄ちゃんだよ。

……ザッ

「お前が慧音の言つてた火野有太か」

有太 「ん？……その通り、俺は火野有太だ」クルツ

振り返ると、そこには白髪の女性がいた。

あつち（MULLA）と同じ外見だな。

妹紅 「私は藤原妹紅、迷いの竹林の案内人をしている」

有太 「おう、よろしく……んで、慧音はどうしたんだ？事件でもあつたらすぐ駆けつけ

てくるハズだろ?」

妹紅「お前が場に居合わせたと聞いて授業を続けているぞ」

有太「…そうか」

俺、慧音に信用されるようなことしたっけ?

慧音「…へつくし!」くしゅん

リグル「風邪ですか…?」

ルーミア「大丈夫なのか?」

慧音「だ、大丈夫だ。え、この問題は…」

「……………」ぐー

「チルノちゃん!」

…まあいつか。

妹紅「…そういえば」

有太「?」

妹紅「お前、火を使うそうだな？魔理沙から聞いたぞ」

有太「魔理沙から？…まあな」

妹紅「竹林で私と一つ、手合わせをしないか？」

…手合わせ？

有太「ちようどヒマだったし、いいぞ」

妹紅「じゃあ早速行くぞ」

キング・クリムゾン！

ザッ

有太「ココらへんがいい感じに開けてるな」

妹紅「ルールは…ただの手合わせだからいらぬいな。始めるぞ」スツ

ボツ

妹紅は手から火を出し、構える。

有太「…へっ」スツ

ボオオ…！

俺は手に火を纏う。

妹紅「…ハッ！」ドツ

ゴオオ!

火の弾幕が飛んでくる。

有太「対抗するか…せいっ！」ギユン

ドゴオ!

火を纏った一撃を放つ。

…すると。

シユウウウ…

弾幕は一撃で相殺された。

…あ。

妹紅「…!」

有太(ヤベっ、キャラ戦みたいな加減でやっちゃまった)

妹紅「面白い、なら…コレはどうだ！」バツ

ゴオオオツ!

妹紅は火を身にまとう。

そして空を飛び…

妹紅「フェニックス！」ドツ

(ちよつと弄つた)

ヒュウウン!

有太 (もう必殺技だど!?)

展開速すぎないか!?

有太 「ツ…じゃあ俺のいくぜ! 炎天掌!」ズガアン!

ググツ…!

妹紅 「お前の火はその程度か!」ボオオ

有太 「本気出したら辺りが吹き飛ぶんだよ!」

妹紅 「それでいいじゃないかあ!」ゴオオオ

有太 「いいんだなあ? じゃあいくぞ!」ギユン

ボオオ…!

有太 「ヘルフレイム!」

問答無用で巨大な火球を投げる。

ゴオオオオ!

妹紅 「(コレが本気か…受けて立つ!) フェニックス…再誕!」ヒュン

…バゴオ!

妹紅は俺の火球に突撃した。

：おい、コレまさか：爆発オチか？

ドガアアン！

やっぱりか。

数分後、煙は晴れた。

有太「大丈夫か：つて、蓬萊人だから大丈夫か」

妹紅「むう：火の扱いはお前が一枚上手のようだな」

有太（アレ、別に本気でもなんでもないぞ？）

（おい、脳内で煽るな）

妹紅「もしよろしければ、今度また手合わせしてくれないか？」

有太「：ヒマだったらな」

ま、俺大抵の場合ヒマだけどな。

おつきーながヤキモチ？

side 火野有太

妹紅と手合わせした数日後、俺は後戸の世界に来ていた。

来たのだが…

隠岐奈「むう…」むすっ

隠岐奈は何故かむすっとしている。

俺、なんかしたか？

隠岐奈「なんで…」ゴゴゴ

有太「？」

隠岐奈「なんで紫にばかり構うんだ！」

有太「…え？」

隠岐奈「彼女でもない紫に、なんでもっと構うんだ！賢者なら私もいるのに！」
ブン

有太「えっと…紫の方が話慣れてるからだな？」

隠岐奈「…なら」

有太「秘神は滅多にでないから、よく現れる紫の方が呼びやすいのもあるかもな」
隠岐奈「：ぬう、そんな所で紫に負けるとは」orz

あからさまに落ち込む隠岐奈。

：やっぱり嫉妬してるだけだよな？

有太「俺が紫とよく話すのにヤキモチ妬いてるだけか？」

隠岐奈「……………」

有太「ソレはスマンな。週1ぐらいでココに来るよ」

隠岐奈「……………ダメだ」

有太「え？」

隠岐奈「私が毎日紫みたいに君の家に凸してやるのさ！」どーん

有太「：はあ？」

どうしてそうなる？

：というか。

有太「紫が家に来るのは精々週3だぞ？」

隠岐奈「だから紫より頻度があるんだ！」

違う、そうじゃない。

有太「来すぎたらルーミアに怪しまれるぞ？何か企んでるんじゃないかって」

隠岐奈「(彼女に怪しまれるだど？…まさか！)……一体何を怪しむというんだ」

有太「さあ？魔理沙が一時期毎日来てたんだが、その時ルーミアが拗ねた猫のような視線でアイツを見てたな」

あの顔をしているルーミアの頭をなでると、一気に癒しの表情になるんだよな。

(何ソレ可愛い)

隠岐奈「(うん、それで確信した)……そうか。だがそれでも私は毎日行くぞ！(バシってなんぼのもんじやい！)」

(何がバシなのか？)

有太「結局か…」

その後早速、隠岐奈は俺の家に来たのだった。

というよりはついてきた。

おつきーなの訪問

side 火野有太

隠岐奈に毎日凸すると宣告された、その夜。

有太「マジで来るのかよ…」

隠岐奈「言ったことはするのが普通だろう？」
そうだけでも。

ピンポーン

…ガチャッ

有太「ただいま」

ルーミア「おかえりなのだ…隠岐奈？」

隠岐奈「邪魔するよ」

ルーミア「……入るのだ」

…ん？

ーリビングー

隠岐奈「ココがリビングか…」

有太「適当に寛いでてくれよ、飯作ってくるから
今夜は…」

有太「ルーミア、何を食いたい？」

ルーミア「うーん…ポークステーキ！」

有太「オーケー」スタスタ

作っていくう。

sideルーミア

…とりあえず質問攻めなのだ。

ルーミア「…で？どうして来たのだ？」

隠岐奈「有太の料理を口にしてみたかったから…じゃダメかい？」

ルーミア「…で？どうして来たのだ？」

隠岐奈「…ん？（同じことを言った？）」

ルーミア「…で？どうして来たのだ？」

隠岐奈「えつと…」

ルーミア「…で？どうして来たのだ？」

隠岐奈「……………有太の」

おつ、言うのかく？

ルーミア「有太の？」

隠岐奈「有太の家に紫を超える回数で訪問したいからだ！」ばーん

ルーミア「……………は？今回が初めてなの？」

隠岐奈「彼女でもない紫が最高週3で来ているのはおかしな話だろう？」

ルーミア「……………まあ、そうなのだ」

隠岐奈「それに対して私はヤキモチを妬いてだな、これから毎日くることにしたのさ

！」ふんすつ

それで隠岐奈は何故かドヤ顔をしたのだ。

……………はあ。

ルーミア「有太は天然ジゴロなのだ……」

隠岐奈「……………」

ルーミア「単刀直入に聞くのだ。……………有太のこと、好きなのか？」じつ

隠岐奈「……………え、ええっ!?そ、そんなことないぞ？」あたふた

うわあ……………わかりやすい。

ルーミア「」彼女でもない」紫に対してヤキモチを妬いてる時点でバレバレなのだ」

隠岐奈「そ、そうなるな……」

ルーミア「彼女の私がいるのに？」

隠岐奈「……………うん」

ルーミア「はあ……………」

私はどうすればいいのだ…？

嫉妬？

side ルーミア

ルーミア「はあ……」

私はどうすればいいのだ…？

ルーミア「…まあいいのだ。有太は鈍感じゃないし、その内気付くのだ」

隠岐奈「…えっ？有太は鈍感じゃない？」

ルーミア「そーなのだ。じゃないと私は有太と付き合っていないのだ」

隠岐奈「そ、そうか…（もう気付かれているかもしれないな…）」

「飯できたぞ〜」スタスタ

…まずは食べるのだ、うん。

side 火野有太

ジユウウウ…ツ

有太「よし、できた」

ポークステーキ3人前。

一応素材は高級だぜ？

有太「飯できたぞ〜」

スタスタ

隠岐奈「…おお、美味しそうだ」

コトン

皿や調味料を置いて、俺も椅子に座る。

有太「んじや〜」

3人『いただきます』

パクツ…

隠岐奈「…!!!（この肉の柔らかさ、それと食感！凄いで！）凄く美味しいな！」

有太「喜んでくれて何よりだ」

ルーミア「はむっ、あむっ♪」パクパク

ルーミアも美味しそうに食べていた。

―数分後―

隠岐奈「ごちそうさま。いやあ本当に美味だった」

有太「…ところで」

隠岐奈「?」

有太「隠岐奈は帰るのか?それともココで寝るのか?」

客人用の部屋はあるし。

隠岐奈「寝る」

Oh、即答か。

有太「オーケー。客人用の部屋はあっちだぜ」

隠岐奈「分かった:(むう、できれば有太と寝たかったけど:まあルーミアがいるから無理か)」

ルーミア「有太」

有太「?」

ルーミア「ゲームしたい!」スツ

コントローラーを既に準備したルーミアはそう言う。

有太「おう、いいぞ。隠岐奈もやるか?」

隠岐奈「やりたいけど:操作方法が分からないね」

有太「なら教えてやるよ」

そしてしばらく3人で某大乱闘をしたとき。

:流石賢者、隠岐奈は始めて1時間程で9レベを倒せるようになっていた。

一方、その頃。

もう1人の賢者はスキマを覗いていた。

紫「むうう…っ」

ヤキモチを妬きながら。

side 八雲紫

どうして隠岐奈が有太の家にいるのよ！

しかも楽しそうにして！

というか…

紫「週3といってもソレは今まで1、2回しかなかったのよ!？」

バンバンツ！（台パンの音）

平均しても1、6日ぐらいよ！

（数えてたのか!?!）

紫「…こうなったら」

隠岐奈と勝負するしかないようね。

ケンカを売ってきたのは隠岐奈だし、別にいいわよね？

藍「…紫様」

紫「あら、藍? どうしたの?」

藍「前の机が碎けています」

…あ、ホントだ。

紫「ごめんなさいね、ちよつとイラついてたわ」

藍（いや、紫様のアレはちよつとってレベルじゃない…一体何をしたんだ火野有太?）

仲がいいんだか悪いんだか

side 八雲紫

紫「ごめんなさいね、ちよつとイラついていたわ」

藍「紫様のアレはちよつとってレベルじゃない…一体何をしたんだ火野有太?」…紫様も行ったらどうです?少しは嫉妬も和らぐでしょう」

…!!!

紫「いい考えよ、藍。行ってくるわね」

私はスキマを開き、有太に会いに行った。

藍「……………最近紫様の人が変わった気がする」

side 火野有太

ルーミア「勝ったのだ!」

隠岐奈「また負けた…」

ルーミアと隠岐奈が対戦をしており、今の所ルーミアの全勝だ。

弾幕ごっこことかで戦ったら隠岐奈が勝つから、この状況を見るのは珍しいな……
スウツ

有太「ん?…ゆかりん?」

紫「やつほく、ゆかりんよ♪」

有太「(うおう…なんだその挨拶)なんかテンション高いな?」

…まあ、さつきまでスキマで覗いてたのはバレバレだがな?

台パンしてる音も聞こえだし、気付かないワケがないだろう。

紫「隠岐奈がいると聞いてね」

隠岐奈「…おお、紫じゃないか。私も有太の家に遊びにきたのさ」フンツ

…おい、早速ケンカするなよ。

紫「へえ……?」

ルーミア「(賢者2人がココでケンカしたらマズいのだ)落ち着くのだ、2人とも。コ

コは有太の家なのだ」

2人『……フン』

有太「まあまあ、とりあえず仲良くしようぜ。ほら紫、コントローラー」スツ

紫「ありがとう……隠岐奈」

隠岐奈「何だ?」

紫「少し、勝負をしましょう？」

ルーミア（現実がダメならゲームでするのか…）

有太「あはは…」

なんでコイツらこんなにバチバチしてるんだ？

…何故か知っちゃいけない気がする。

何回か戦った後…

2人は0勝0敗、10分になっていた。

引き分けになっているのは全部時間切れになっているからだ。

紫「次は勝つ…！」

隠岐奈「いや、私が！」

有太「…凄いな、まさか全部引き分けになるとは」

ルーミア「むしろわざとやっているのか？」

2人『断じて違う！』

おう…声が揃ってる。

『READY…GO！』

11回戦目が始まる。

―数分後―

有太「……………」

ルーミア「……………」

『DRAW!』

…11回目の引き分けだ。

2人『また!?!』

隠岐奈「おい紫、絶対に私とタイミングを揃えているだろう!」

紫「は!?!誰が貴女とタイミングを揃えるのよ!」

2人『ぐぬぬぬ…!』

有太「…はあ」

ルーミア「ケンカする程仲がいいのか…」

いや、もはや犬猿の仲だろコレ。

一方、ケーティは

紫と隠岐奈がゲームでバチバチやっていた、その頃。

side 博麗霊夢

霊夢 「そろそろ寝ようかしら…」

時間帯はもう8時ごろ、正直することがない。

霊夢 「霊夢」

霊夢 「？」

初代博麗、霊夢さんが話しかけてきた。

霊夢 「客人よ」

霊夢 「…この時間帯に？」

霊夢 「どうやら霊夢に質問があるらしいのよ」

霊夢 「質問？」

スタスタ

入口の鳥居まで行くと、そこには橙髪の女性が立っていた。

有太の妹、ケーティ・マリオである。

霊夢「ケーティ？」

ケーティ「すまないわね、1つ質問をしたいのよ」

霊夢「何よ」

ケーティ「アンタの知り合いまたは友達に…冴月麟って子はあるかしら？」

さつき りん？

…ああいたわね。

霊夢「いるわね」

ケーティ「今何処にいるか分かる？」

霊夢「さあ？多分魔法の森辺りにいるんじゃない？」

魔理沙程ではないけど、偶に見かけるし。

ケーティ「なるほどね…ありがとう。じゃあね」クルツ

ケーティはそう言ってこちらに背中を向ける。

…いや、待って。

霊夢「…麟に会って何するつもり？」

ケーティ「えっ？」

霊夢「この時間帯にそんな質問、怪しさ満点よ」

ケーティ「あ…それは他に用事があったから時間がなかっただけよ。麟に会いたい

理由は、色々話したいからね」

霊夢「ふーん……」

ケーティ「じゃ、またね」

スタスタ

霊夢（麟とケーティ……共通点が髪色と能力ね……もしかして……）

sideケーティ・マリオ

霊夢の話を元に、私は魔法の森辺りをほつつき歩いていた。

……そもそも今は夜だから見渡しが悪いわね。

ケーティ「なら……一旦寝よう」スツ

ヒュン

私は空間を裂き、異空間に入り、その中にある私の部屋に行く。

一日中歩き回ってたから、眠いわね……

ケーティ「ふわあ……」ドサツ

予め置いていた布団にくるまり、私は眠るのだった。

―数時間後―

ピリリリ…ッ

ケーティ「ふあ…7時…」

カチッ。

布団の隣に置いていたアラームを消す。

朝飯は…冷蔵庫にあった。

とりあえずこの用事を済ませて兄さんの料理を食べたいわね…

ケーティ「さて、魔法の森をほつつき歩くとするわ」

ヒュン

異空間を出ると、魔法の森の入り口にいた。

スタスタ

ケーティ「く〜♪」ピーッ

適当に口笛を吹きながら魔法の森を歩き回る。

…魔術師の女王が森の中で口笛を吹いて歩いている謎の構図ができたわね。

(ケーティは魔術師の女王、てか女神である)

「おーい」

ケーティ「？」

ザッ

奥の方から走り…いや飛んできたのは魔理沙だった。

魔理沙「ケーティじゃないか。どうしたんだ？」

…よし、魔理沙に協力してもらおう。

冴月麟

side ケーティ・マリオ

魔理沙「ケーティじゃないか。どうしたんだ？」

…よし、魔理沙に協力してもらおう。

ケーティ「ちよつと人探しをしてるんだけど、冴月麟が何処にいるか分かるかしら？」
 魔理沙「麟?…ああ、この時間帯だったら奥の方で二胡を弾いていると思うぞ。というか

、何で麟に？」

ケーティ「あつちの世界では私の弟子なのよ。だからこつちの世界の麟にも会ってみたくてね」

魔理沙「弟子か…能力とかが似てるから割と合いそうだな」

ケーティ「でしょ?じゃあ行ってくるわね」

魔理沙「おう…あつ、有太つて今家にいるか?」

兄さんが?うーん…

ケーティ「私は出かけて数日帰ってないから分からないわね」

魔理沙「そうか…ま、多分いるだろ。じゃーな」スツ
ビューン！

…あんなスピードで進まなくてもいいと思うけど。

ケーティ「…んじゃ行くとしよう」スタスタ

紫「……………」じっ

隠岐奈「……………」じっ

2人『むむむう…』バチバチ

有太「コ、コイツら…」

ルーミア「一晩中対戦してもずっと引き分けてるのだ…しかも寝ずに…」

有太「お前らやつぱり仲いいだろ？」

2人『ちがう！』

ザツ、ザツ。

ケーティ「黒い花がないわね…」

あつちでは私が植えたからあるかもしれないけど。

…あら？

『~~~~~』

二胡を弾く音が聞こえる。近くにいるようだ。

もう少し近づいてみると…

麟「……………」スツ

『~~~~~』

ケーティ（やっぱり綺麗な音ね…）

―数分後―

麟「…よし、今日の練習は終わり！」ザツ

どうやらさつきまでの練習だったようだ。

麟「あれ？誰かいますか？」

ケーティ「ごきげんよう」

麟「こんにちは！どちら様ですか？」

…ココでも年上に対しては敬語のようね。

某紅白巫女と白黒魔法使いと違って。

2人『くしゅんっ!』

靈夢「同時にくしゅんしたわね…」

萃香「2人のことを噂してるんじゃないのかあ〜?」ゴクゴク

ケーティ「私はケーティ・マリオ、ちよつと貴女が弾く二胡の音色に聞きとれていただけよ」

麟「そうですか…私は冴月麟、仙人の修行をしている者です!」

ケーティ「仙人の?へえ…」

そこもあつちと同じなのね。

弾幕はパワー、なのか？

side 火野有太

有太「…はあ」

紫「……………」じっ

隠岐奈「……………」じっ

2人『むむむう…』バチバチ

有太「コ、コイツら…」

ルーミア「一晩中対戦してもずっと引き分けてるのだ…しかも寝ずに…」

有太「お前らやつぱり仲いいだろ？」

2人『ちがう！』

いやいや、こりやどうあがいても仲いい以外のなんでもないぞ？

どうやったら一晩中引き分けるんだよ？

ピンポン

有太「んあ？」スタスタ

誰かが来たようだ。

ガチャツ

魔理沙「おはようなのぜ」

有太「おう、おはよう魔理沙。何か用k「ん!」…どうした？」

何故か魔理沙が驚いた顔をしている。

魔理沙「お、おい。なんであつちに賢者2人がいるんだ？」

有太「紫と隠岐奈か？アイツら一晩中ゲームでケンカしててな。ずっと引き分けてるんだよ」

魔理沙「（。D。）」

有太「んで？何の用だ？」

魔理沙「…コイツだ」スツ

魔理沙が出したのは…赤いエネルギーが入った瓶。

有太「…魔力と霊力を混合したモノか？」

魔理沙「そうだぜ。私はコイツで…」パカツ

ギューン！

魔理沙「火桜が生成できるようになったのぜ！」スツ

有太「ほーん…で、一斉に何枚作れるようになったんだ？」

魔理沙「まだ1枚だぜ…」

まだ1枚か…あ。

有太「そういえば、言い忘れてた事があってだな」

魔理沙「？」

有太「火桜って、俺が言った比率じゃなくても出来はするんだよ」

魔理沙「は!?!早く言えよ!?!」

有太「…といつても、俺が言った比率が最も強い比率だ。だからお前に教えてやったのさ。弾幕はパワーなんだろう？」

…まあ、俺にとつちや弾幕は時と場合によつて調整する、だけどな。

魔理沙「うーん…じゃあこのままの比率でやるぜ」

有太「おう、そうしろ。その内なんとなくでその比率が出せるようになるから」

魔理沙「…なあ」

有太「？」

魔理沙「それって、どれぐらいの時間がかかったんだ？」

有太「時間？あー…」

どれぐらいだっけな？1年…半年…

有太「ざっと2か月か？1日2時間ぐらい練習して」

つまり2 x 60で大体120時間の練習だな。

魔理沙「お前で2か月なのか!」

有太「そうだよ」

魔理沙「私が1日5時間やってそれぐらいかかりそうだな…」

有太「まあいいじゃねーか。霊夢に勝ちたいんだろ?」

魔理沙「そうだけ。いずれお前にもな!」

有太「俺にも?色んな平行世界を旅してから出直してこい」

魔理沙「…平行世界の旅をしてるのって、お前の姉じゃなかったか?」

有太「そうだぞ?だが俺は姉さんより若干弱いぐらいだ。だからそれぐらいしない

と、俺には勝てないぜ?」

魔理沙「そうか…:よし。私はさっさと帰って練習するぜ!」

有太「おう、じゃーな「あ、そういうば」?」

魔理沙「ケーティが何故か麟に会いに行ってたぜ」

有太「麟?…ああ、アイツか」

魔理沙「んじやまたぜ」

ビューン!

魔理沙は箒にまたがり、超スピードで飛んでいった。

有太「ケーティがココに麟に会いに行っただけは…すでにここにも会ってるの

か？」

あつちではアイツらは百合百合してるからな。

えいえんてー？

side 火野有太

未だに賢者2人がやいのやいのしている。

…俺の家のリビングで。

有太「（よし、逃げよう）…ルーミア」

ルーミア「？」

有太「ちよーつと散歩行ってくる。お前も来るか？」

ルーミア「もちろん！」

有太「吉幾三。こつそりロックしとくか」

ガチャツ…カチツ。

こつそり玄関を出て、ドアを閉め、鍵をかける。

コイツらはどうせ能力で出られるしな、問題ないだろ。

ルーミア「どこにいくのだ？」

有太「うーん…そうだな、竹林に行くか」

こつちの竹林は妹紅と戦った時以外行ったことがないしな。

ヒュウン…

ー迷いの竹林ー

スタツ

有太「よし、永遠亭まで迷路だ」

ルーミア「どうして永遠亭に？」

有太「行つたことがないからだ」

ルーミア（おー、シンプルなのだ…）

…ん？

有太「ちょっと待て、落とし穴がある」スツ

ひよい

その辺に会つた石を前に投げてみる。すると…

…ボスツ！

そこに大きな穴が現れた。

ルーミア「恐らく白兎の仕業なのだ」

有太「ソレはあつちの世界でも経験したな。こつちでもそうなのか…」

…なら。

有太「地面から2ミリだけ浮いて移動するか」フワツ

某青狸のマネだ。

その頃…

??「えっ?!落とし穴に気付かれたウサ!？」

草むらからこっさり有太達を監視していた兎は、焦っていた。

少し進むと、タケノコを掘っている人物がいた。

有太「ん?おお」

ルーミア「妹紅なのだ!おい」

ザッ

妹紅「有太とルーミアじゃないか。もしかして私と勝負しにきたのか?」

有太「いや、今回は別で永遠亭に向かってる」

妹紅「永遠亭に?見た所怪我してなさそうだが?」

ルーミア「行ったことないからいくらいいのだ」

妹紅「は、はあ…」

有太「んじや、またな「ちよつと待て」お?」

妹紅「いつも通りなら永遠亭に引きこもつてるハズの輝夜をついでに呼び出してくれないか?」

輝夜「ああ、あのゲーマーな姫さんか。」

有太「分かった、呼んどくぜ」

妹紅「またな」

スタスタ

??「…!ものすごい波長を感じる…!」

??「鈴仙!」ガサツ

落とし穴をしかけた兎が草むらから現れる。

鈴仙「なによ、てる。侵入者らしき人が「どうやら敵じゃないウサよ?」…へ?」

てる「さつき盗み聞きしたけど、来てる人は幻想郷に来た侵入者を撃退した人だった

よ」

…どうやらてるは「ウサ」という語尾をいつも付けるワケではないようだ。

鈴仙「ホントに?まあた嘘ついてる?」

てゐ「コレは嘘じゃないウサ」

鈴仙「ふーん…でも一応監視はしておくわ」

えーりんではなくぐーや

side 火野有太

ザッ

落とし穴を避けていき進むと、やがて永遠亭にたどり着いた。

ルーミア「わはく…」

有太「ん、ルーミアは来た事がないのか？」

ルーミア「あまり怪我しないのだ」

有太「なるほどな…」

怪我しても自然回復で何とかなるだろうしな。

大妖怪って便利。

有太「んじや入るか…失礼します」

スタスタ…

鈴仙「…！侵入してきた！」

ダッ

てゐ「んゝ、別に撃退しようとしても逆に撃退されるのがオチだウサ。私はココでニ
ンジンでも…」カリカリ

有太「…ん？」

空間が若干歪んでいるように見える。

…輝夜有能力か。それと誰か来るようだ。

ザッ

「侵入者、そこで止まりなさい！」

…よし。

有太（ルーミア、ネタ披露するぞ）

ルーミア（了解なのだ）

有太「どーも、アポなしで来た訪問者です」

ルーミア「そのおともです」

2人でお辞儀する。

鈴仙「あ、コレはご丁寧に、私は鈴仙・優曇華院・イナバよ……つて、違う！宵闇の

妖怪は分かるけど、貴方達は誰!？」

ノリツツコミ乙。

有太「火野有太、現人神だ。ちよいと妹紅から伝言と、興味本位できた」

鈴仙「(9割興味本位が目的でしょ…)…襲撃するつもりなのかしら?」

有太「は?」

んなワケないだろ。

…思考を読んでも同じことを考えてるようだ。

有太「幻想郷を守る立場がなんで襲撃するんだ?俺の事は数週間前の文々。新聞に書かれてたハズだぞ?」

自慢じゃないが。

鈴仙「えっ?…:…あ!」ハッ

鈴仙は何かを思い出したかのように、ハッとする。

鈴仙「貴方が襲撃者を撃退した人なのね、ごめんなさい」

有太「おう、襲撃はしないから安心しろ」

「…あら?」

隣にあつた襖が開く。

2人『?』

鈴仙「姫様？」

そこには月の姫、蓬莱山輝夜がいた。

輝夜「あら、貴方が火野有太？」

有太「その通りだ」

輝夜「私は蓬莱山輝夜よ……つてもう知っているようね」

鈴仙「えっ？」

輝夜「別世界の幻想郷から来たんでしょ？魔理沙から聞いたわよ」

魔理沙から？

……ああ、アイツ色んな所に行くヤツだったな。

輝夜「とりあえずよろしくね」

有太「よろしく。……そういえば妹紅が竹林で待ってたぞ」

輝夜「もこたんが？今日は決闘の日じゃなかったはずだけ……」

鈴仙「先週やらなかった代わりに今日やるって言ったじゃないですか」

輝夜「……あ、そうだった。テヘツ」

ルーミア（私、完全に空気なのだ……）

えーりん!えーりん!

side 火野有太

輝夜「でも今行くのも怠いし…」

おい、約束は守ってやれよ。

「姫、あまり部屋を散らかさないでください…ん?」ひよこ

襖からもう1人出てきた。赤と青の服を着た銀髪の女性…八意永琳だ。

永琳「侵入者…じゃないわね、誰かしら?」

臨戦態勢に入っていないことから察してくれたようだ。

この人が敵に回ったら普通に厄介だからな…

有太「俺は火野有太、コイツは付き添いのルーミアだ。よろしく」

永琳「私は八意永琳……なのは知ってるようね」

ほう、永琳も知ってたか。

有太「魔理沙から聞いたのか?」

永琳「ええ…ところで姫、妹紅との約束はどうしたんですか?」

輝夜「後少しで行くわよ」スタスタ

輝夜はそう言っつて部屋に戻つた。

永琳「部屋を片付けてからにしてくださいね？「はいはい」…2人も来なさい、お茶出すから」

ルーミア「そーなのかー」

その頃。

魔理沙「うーん…」カチャカチャ

魔理沙は魔法道具を弄つて炎天桜舞に使う魔力&霊力の調合をしていた。

魔理沙「コレをこうして…こうか？」ジャーツ

シユウウウ…

魔理沙「おお、いい感じに混ざつてるぜ「ピンポーン」…お？」

ガチャツ

「こんにちは、魔理沙」

金髪の少女がそこにいた。隣には人形がフヨフヨ浮いている。

魔理沙「…アリス？どうしたんだ？」

アリス「最近会つてないから少し話がしたくて」

魔理沙 「最近?…3日前会ったよな?」

アリス 「(ギクツ) そ、そうかしら?…とにかく魔理沙と話がしたいのよ」

魔理沙 「(私と話がしたい?怪しすぎだろ…) …で?本命はなんだ?」

アリス 「……………ま」

魔理沙 「ま?」

アリス 「魔理沙とガールズトークしたいの!」ドーン

魔理沙 「…はあ?」(。D。)

何言ってるんだコイツ、と魔理沙は思った。

魔理沙 「お前変なキノコでも食べたか?」

アリス 「失礼な、貴女からもらった美味しいものしか食べてないわよ!」プンブン

魔理沙 「…まあいっつか、入れ」

ガチャツ

アリスが部屋に入ると、ふと赤いエネルギーが入ったガラス瓶に目が留まる。

アリス 「…コレは?」

魔理沙 「霊力と魔力をいい感じに混ぜたものだけ。有太にとある技を教えてもらって

な」

アリス 「有太…ああ、貴女が言ってた人ね」

どうやら前に魔理沙は有太の話をしたようだ。

魔理沙「ちよつと技を借りさせてもらったぜ」

アリス「そう…」

魔理沙「じゃ、お茶とつてくるぜ」スタスタ

その後2人は雑談に花を咲かせたようだ。

暴走するアリス

side 霧雨魔理沙

私はアリスとガールズトークという名の雑談をしていた。

何故かアリスが私と喋りたいとか言うからな…変なキノコでも食べたのか思ったぜ。

魔理沙「それでな、有太の家で飯を食べたんだが、それが超美味いんだよ！」

アリス「えっ、そうなの？」

魔理沙「そうなんだよ。アイツ性格も結構いい方だし強いし料理もできるんだよな」

マジでアイツの弱点が思いつかないぜ。靈夢さんよりは若干弱いらしいけどな。

魔理沙「…ん？」

アリス「……………」むすっ

何故かアリスはむすつとした顔をしていた。

魔理沙「…どうしたんだ？」

アリス「…羨ましい」

魔理沙「有太の事がか？」

アリス「ええ……私が魔理沙の胃袋を掴む前に出し抜かれるなんて……しかも短時間で！ 妬ましいわ！ パルパルパルパル……」

……なんでパルスイのマネをしてるんだ？

アリス「なんで私の彼氏の魔理沙を……火野有太許さない……」ブツブツ

今度は変な事をブツブツ言い出した。

……お前の彼氏になった覚えはないぞ？ てか私は女だが？

魔理沙「おーい、アリス？」

アリス「マリアリが正義のハズなのに……マリアリが正義「おーい……きゃっ!?」ハッ
やっとなりに戻ったか。

魔理沙「さっきから何言ってたんだ……？」

アリス「えっと、その……愛してる？」

魔理沙「絶対違うぜ」

とかささらつと愛の告白すんなよ。

アリス「ごめん、ちよつと暴走しちゃったわ」

いや、ちよつとつてレベルじゃなかったぞ？ まるで暴走機関車のようだったぜ。

魔理沙「……そうだ！ お前も今夜有太の家に来るか？」

アリス「えっ？」

魔理沙「羨ましがらずにまずは食べてみろよ」

アリス「……………分かったわ」

…今すぐごく間が長かったぞ？

魔理沙「じゃあ今夜行くか」

そして雑談は続いた。

side 火野有太

有太「…あ、そうだ。鈴仙、今腹減ってるか？」

鈴仙「まあ、今11時だし…」

有太「ちよっと待ってろ」スツ

永琳「…異空間？」

温めてたネタがあるんだよ…物理的に。

俺は異空間から例のブツを出した。

コトン

鈴仙「…は？」

俺が出したのは…うどん。

有太「召し上がれよ、うどんげ」

鈴仙「…あ、そういうこと？」

ルーミア「そのネタの為に今朝うどんを作ってたのかー？」

有太「おうよ」

鈴仙「えつと、じゃあいただきます…」
ずずつ

永琳「…有太」

有太「あ？」

永琳「今の、ダジャレのつもり？」

有太「そうだが？」

永琳「超寒いわよ？」

有太「…：…おう、スマン。次はもっと面白いうどんの出し方をする」

永琳「うどんの出し方なんて関係ないわよ…」

空間系ってチートじみてるよね

side ケーティ・マリオ

麟「へえ、ケーティさんって魔女なんですわね！あっちの私ってどんな感じなんですか？」

ケーティ「私の弟子よ？」

麟「…ええっ!?」(。D。)

かなりビックリしてるよね。まあそりゃ仙人見習いが魔女に弟子入りしてるんだから、当たり前前の反応だけど。

麟「どのような経緯ですか!？」ずいっ

顔をめつちや近づけてくる麟。

ケーティ「近いわよ…」

麟「あ、ごめんなさい」サツ

経緯…そうね…

ケーティ「確かレミリア達吸血鬼が吸血鬼異変を起こす半年前ぐらいに…」

割愛（MULA未登場なのでネタバレ防止）

ケーティ「…つて、感じね」

麟「なるほど…」

ケーティ「ところで、アンタも弟子になるつもりは「ないです！」…そう」

どうやら麟は自力で仙人を目指してるようね。

実際、仙人特有のエネルギー（神力と霊力が混ざったもの）を感じる。

麟「ケーティさんの能力って私のと似てるんですよね？」

ケーティ「そうよ？」

麟「確か、『虚空を操る程度の能力』でしたっけ？」

ケーティ「それでアンタは『亜空間を操る程度の能力』でしょ？虚空は何もない空間、

亜空間は空間の狭間…結構似ているじゃない」

会った当初は結界をすり抜けるだけだったけどね…

side 火野有太

有太「…を…するとだな？」スッ

てゐ「うんうん」

有太「…つて、引つかかるんだぜ？」

てゐ「ほうほう…中々いい案ウサ」ニヤリ

鈴仙「…何を話してるの？」

有太「コイツに比較的安全で引つかかる確率の高い罠をだな「ちよ!?!私が引つかかるのよ!?!」…悪い悪い」

でもさ、いたずらは楽しいだろ?なあ?

(引つかかる側の思考えr) 安全設計にしてるから、ケガすることもないしな?

(そういう事じゃない)

永琳「まあまあ、ほどほどにしなさいよ?」

鈴仙「師匠…「でもうどんげの反応も面白いからいい感じにね?」…師匠!?!」

なるほど、えーりんもされる側じゃなくてする側なんだな。

あつちにいるお前の弟はされる側なんだけどな?ココでは存在しないようだが。

(MULAの永琳には弟がいる。名前は月斗↑げつと)

鈴仙「うつ、胃が…」

永琳「あら、ココに医者がいるのよ?」

鈴仙「(。(。D)。(。D)。(。D)」

有太「まあ落ち着けよ鈴仙、やりすぎる事はないからさ」

鈴仙「そもそもやらないでほしいんだけど!？」

有太「うん、知ってる」

鈴仙「尚更やめてほしいんですが!?!はあ、はあ…」

どうやら息切れたようだ。

ルーミア「……………わはー(平和なのだー)」

賢者の恥態(?)

side 火野有太

午後3時頃。

有太「じゃーな」

ルーミア「またなのだー」

永琳「ええ、また…姫様の決闘がそろそろ終わってると思うから、見てってほしいわ」
有太「おう、分かった」

スタスタ…

一応竹林の道は覚えている(どうやって?)ので、進んでいく。
しばらくすると、前方から人影が見えた。輝夜だ。

有太「…おっ、終わったのか?」

輝夜「ええ…何故か妹紅が前より結構強くなってたわ」

有太「あー…そっか」

少くしだけ火の使い方の応用を教えてやっただけなんだけどな?

ほぼアイツの数日の努力だろ。

輝夜「じや、帰ってゲームでもするわく」
有太「またなく」

んで、人里を経由して家に帰った。

人里を経由した時ついでに兎が売ってる団子も買ってた。美味い。

そして、今家の前にいるんだが：

しーん

…物音一つもしねえ。

ルーミア「…心配がするのだ」

そう、2人ともいるはずである。

なのに音がしないのは…怪しき満点だな。

有太「ただいま」ガチャツ

…あれ？ 鍵閉めてないのかよ。

中を見てみると、出かけた時と比べて整理されていた。流石に片付けたのだろう。

ルーミア「ゲームの電源も切られてるのだ」

有太「だな…どこにいるんだ？」

1階にいないから絶対2階の客室にいるんだが…

ルーミア「…まさか！」ダツ

有太「うおっ？」

突然ルーミアが焦りだし、階段を駆け上がっていった。

有太「どうしたんだ…？」ガタツ

思考を読むヒマがなかったから分からん…

俺も急いで2階に上がると、俺の部屋のドアが開いていた。

入ると…

有太「……………は？」

2人『……………／／』スヤア

紫と隠岐奈が寝ていた。

…俺の枕や布団に顔をうずめながら。

ルーミア「やつぱり…」

どうやらルーミアが焦った理由はこれのようだ。

有太「…なんでこんな事してんだ？」

……はあ、はいはいもしいか。

有太「コイツら、いつ俺に惚れたんだ？」

ルーミア「…気付いてたのか」

有太「そりゃああんな感じになってたら、な？」

鈍感なフリするのも疲れる。

有太「でも俺の彼女はルーミアだけだ…少なくとも今はな」

ルーミア「そこはずっと私だけと言ってほしかったのだ」

有太「…ゴメン」

俺、少しハーレム願望があるんだよ。

ルーミア「とりあえずこの2人を起こすのだ」スツ

ルーミアは両手を上げ、妖力を纏うと…

ルーミア「起 き ろ オ ツ ！」

…バシイン！

2人『フオツ!?!』

片手ずつ2人をぶつ叩いた。

有太「（。 ㊦。）」

…絶対痛いだろ、今の。

自覚

side 火野有太

紫「いたーい！」

隠岐奈「誰だ、私を叩き起こしたのは！……ん!?」

有太「……………」

ルーミア「おはようなのだ、2人とも」

ルーミアは笑顔で挨拶する。しかし目が笑ってない。

紫「…ね、ねえ隠岐奈」

隠岐奈「な、なんだ…?」

紫「コレ、バレてるわよね…?」

ルーミア「ん〜? バレてるのは何のことなのだ〜?」じつ

ルーミアは2人を某火の鳥のように睨みつける。

闇とはまた違う黒いオーラを纏っているのは嘘だと思いたい。

…はあ。

有太「落ち着け、ルーミア」ナデナデ

頭を撫でて落ち着かせる。

ルーミア「…むう」

有太「で、2人とも。俺の枕や布団に顔をうずめながら寝てたのは何故だ？」
理由は明白だが、弄りたくなつたので敢えて質問する。

紫「(え、まさか気付いてない?) えっと、その、それは…」あたふた

隠岐奈「ふ、深い理由があつてだな…」あたふた
珍しく焦つた顔をする賢者達。

紫「ゆ、有太の布団が気になつて…」

隠岐奈「き、気付いたら顔をうずめていたんだ…」

2人『ぐ、偶然なの…』

さて、さらに問い詰めるか、バツサリ切り捨てるか…
切り捨てよう。

有太「うん、そういうのいいから」

きつぱりと言ひ訳を切り捨てた。

2人『え?』ポカーン

有太「お前らの俺に対する好意にはもう気付いてるぞ」
そして速攻で核心に迫つた。

張れ」

紫「……………！……隠岐奈」

隠岐奈「…紫」

2人『絶対負けないから』

…いや、2人とも受け入れるつもりだぞ？一応。

やる気を出す2人を見て、部屋を出る。

ルーミア「有太」

有太「ん、どうしたルーミア「甘えさせて」…分かった」ギョツ

腕を広げると、ルーミアは抱きついてきた。

ルーミア「有太の恋人は私だけなのだ…今は。だからできるだけ独り占めするのだ」

ムフー

有太「…やれやれ」ナデナデ

これからどうなるんだろうな？